

大嫌いな幼馴染みと一緒に、セックスしないと出られない部屋に閉
じ込められた

和鳳ハジメ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【大嫌いな幼馴染みだった筈だったのに、大好きな恋人へと変化していく】

出逢った時から玩具を巡って喧嘩。

成長しても、漫画の貸し借り一つで喧嘩。

犬猿の仲であるアキラとリコはある日、セックスしないと出られない部屋に閉じ込められた。

「安心しろよりコ、オレはテメーに手を出すほど落ちぶれちゃいねえ」
「安心してアキラ、あんたとセックスするぐらいなら死んだほうがマシよ」

「なら、助けが来るまで一時休戦だ」

「ええ、一時的にね」

「絶対にセックスなんてしない!!」

しかし、セックスせずに部屋で暮らすには、イチャイチャクエストなるもので、ポイントを稼がないと強制子作りセックスになる事が発覚して。

(こ、コイツ……こんなに可愛かったか??)

(意外と逞しいカラダ……じゃないっ、こんなドキドキなんて気の所為なんだからっ!!)

こうして。

絶対にセックスしないと誓った、幼馴染みケンカップル達の。

お互いへの好意に気付いていくラブ・サバイバルが始まるのであつ

た。

※「カクヨム」にも投稿しています。

※エロいシーンは（作者基準で）多々あるけど純愛コメディ路線なので、直接的なエロは期待しないでください。

目次

クエスト1／セックスしないと出れない部屋	1
クエスト2／イチャラブ・クエスト	8
クエスト3／危ない動画鑑賞	14
クエスト4／センス・オブ・デート（セックス前提）	21
クエスト5／傷	31
クエスト6／ときめきぶらくていす	41
クエスト7／ラブネーム	48
クエスト8／マインド・メイズ	56
クエスト9／イン・ザ・バスルーム	61
クエスト10／ポイント交換	70
クエスト11／乙女心を理解せよ	77
クエスト12／猫とオナニー	83
クエスト13／ちよつと古くない??	90
クエスト14／キャスト・オフ	96
クエスト15／はぴまり?	102
クエスト16／天使のお薬	110
クエスト17／心の証明	117
クエスト18／そして部屋は開かれた（なお）	122
クエスト19／セックスしても出られない、セックスしないと出られない部屋	129
クエスト20／尽くす男	135
クエスト21／セックスさせてくださいお願いします!!	143
クエスト22／よしっ！ ボコりましょ!!	150
クエスト23／人生全て	156

クエスト24 / ポイント・オブ・ノーリターンは過ぎ去った	162
クエスト25 / フェアに行こうぜ! (滝汗)	167
クエスト26 / “らしく”行こう!	172
クエスト27 / 誘惑すると言う事	177
クエスト28 / 所有権	182
クエスト29 / 催淫ガス! スイッチ・オン!!	189
クエスト30 / 扉の外にある未来(終)	195

クエスト1／セックスしないと出れない部屋

「何でこーなってんだよおおおおおおおおおおおッ
!?!」

「嘘でしょッ? は? ありえない、ありえないからこんなおッ、どうして、どうして——ッ!?!」

静かな部屋の中に、年頃の男女の困惑した叫びが響きわたった。

然もあらん、目覚めてみればラブホの様な内装の部屋に。

それもキングサイズのベッドの上に、二人仲良く寝かされていて。

外へと続くと思しき扉の上には、デカデカと大きな文字が印刷された看板が。

『セックスしないと出られない部屋』

二人はそれを信じられない様な目をして、何度も読み返し。

「——セックスしないと出られない部屋って何だよ?!? は? そうか、オレはまだ寝てるのか? 夢、そうだよ夢だよな? そうだって誰か言ってくれ!!」

（待って、ホント待って、あり得ない、マジありえない、よりもよってコイツと、アキラと一緒にこんな部屋に居るだなんてっ!!）

そう『セックスしないと出れない部屋』である。

こんなものはマンガやネットの中にしかない、くだらない猥談、妄想の類ではないのか。

だが、現実に目の前にある。

（何だよコレ……、マジでこーなってんだよ、夢じゃないって確信してるのが一番変なんだよ、頭が狂っちゃった気分だぜ!!）

（ええつと……確か昨日はアキラとボドゲで勝負したまま寝落ちして……）

（——待て、待てよ? そういや理子は昨日オレにボコボコに負けてたよな。……これはアレか、復讐か、ドッキリサプライズか。押し倒したら最後、誰かが入ってきてオレが弱みを握られるヤツか）
（まさか、うん、そう、まさかではあるけど……、もしかしてコイツ、

性欲に負けて理由を付けて合法的にセックスしようと企んでるんじゃない?!)

ギロリ、二人は同時に睨みあつて。

男、日に焼けた背の高い高校生、田仲 彰(たなか・あきら)はゴクリと唾を飲む。

女、ショートカットで釣り目の巨乳なセーラー服美少女、鈴姫 理子(すずき・りこ)は右手を握りしめ。

「——この卑怯者、こんな大がかりなコトしないと幼馴染み一人満足に押し倒せないワケ？ 失望したわ、あーあ、こんな幼馴染みでわたしはホント不幸だわあ」

「白々しいぜ理子、テメエが仕組んだんだろうが。うっかり転んで押し倒したらそれを写真に撮って脅迫するつもりだなッ!!」

「はあっ?! 言いがかりはよしてくれない？ 誰がアキラなんかとセックスするもんですか!! ホント嫌いっ、大嫌いよあんたなんか!!」

「それはこつちの台詞だ、テメエなんて大っ嫌いだッ！ 幼馴染みじゃなきや話し相手にすらゴメンだね!!」

なにさ、なんだよ、と威嚇しあう二人。

そう彼らは幼馴染みである、田舎育ち故に遊び相手がお互いしかおらず。

出会った時から玩具を巡って喧嘩する仲、成長しても変わらず、オヤツを取り合つて口喧嘩、ゲームの勝敗で手が出る足が出る。

(ホントマジで誰の仕業なんだよッ！ コイツがこんな事するわきゃねえし、っーか今更コイツとセックスしろとか嘘だろ？ 異性に見れないってのー！)

(この反応……やっぱリアキラが犯人の線は消えた……でも、そうなるっていったい誰がこんなコトを。いや無いから、だつてアキラよ？ お互いのおねしよした数まで知ってる相手と今更セックスとか、マジでないわー)

(ま、百歩譲つてだな。理子の方からセックスしてくださいって言うてきたら？ そりゃ考えない事もないけどよ………顔を体と家庭

的な所と意外に成績良い所は確かに取り柄だし??)

(土下座、そうねアキラが土下座したらセックスしても良いわ。——大学卒業ぐらいにコイツに恋人いかなかったら、お情けで、仕方なく、かなり嫌だけど付き合っただけあげるつもりだったし?)

理子は学校でも評判の美少女だ、それに長く一緒にいるからこそ。内面の良さも、アキラは一応なりとも評価している。

彼は農作業の手伝いで鍛えた、見かけより逞しい体をしている。童貞の癖にチャライ男という雰囲気、全くモテていないが彼女から見れば悪くない。

(——冷静になれオレ、本当にこれは現実なのか?)

(落ち着くのをよ、もし夢だったら……わたしはアキラのコトを……)

ごくりと唾を飲んだのは、果たしどちらだったか。

何を言えればいい、何かを言えば喧嘩腰にしなければならない、どうしてこんな事に、どうすれば脱出できるのか。

二人の思考が混沌してきた瞬間であった、突如として光の柱が部屋の中央に降り注いで。

「ッ!! 後ろに隠れろ理子ッ!!」

アキラは咄嗟に彼女を背に、不可解な現象と対面する。

——まるであの事故の時のように、バチつとスイツツチが切り替わる感覚。

「何だか知らねえけどな……理子には手を出させないぞ」

目の前の現象は明らかに異常だ、普通の高校生であるアキラに何が出来るのか。

だが今は、そんな問題など考えている暇などない。

「くそッ、何が来る、何が起きる——ッ?」

例え己が殺されそうとも、せめて幼馴染みだけは。

少しでも無事で、少しでも命を長らえさせる為に。

拳を握りしめる、宇宙人かそれとも人間か。

(理子はオレを守る、命にかえても)

大嫌いな幼馴染みだ、だが一緒に育ってきた、常に隣にいる大切な幼馴染みでもあるのだ。

男として、せめて彼女だけは。

(アキラ……もうっ、アンタってヤツは——!!)

彼の後ろ姿に、彼女は唇を強く噛んで。

胸がキュツと甘く締め付けられるのを自覚したが、嫌そうに顔をしかめて彼の前に出る。

大嫌いな幼馴染みだけれど、でも。

「あッ、おい理子!」

「——アンタこそ後ろに隠れてなさい!!」

「は? テメエ状況が分かってんのかよ!! 素直に庇われてろ!!」

「はあくくく?? 頭沸いてるのあんた? アホなアキラに何が出来るってのよ?」

「喧嘩売ってるのか理子? ん? 買うぞ? 遠慮なく買うぞ?」

「あら奇遇ね、あの変なのをどうにかする前に喧嘩でもする?」

異常事態にも関わらず喧嘩し始める二人、だがその中から聞こえてきた拍手に思わず静止して。

「いやー、仲良くてオッサンは尊みで死んでしまいそうやわ。お二人は天使泣かせやでえ!!」

「え? 誰? 天使? は? いやオッサン? テメエが犯人なら今すぐ部屋から出せ? ぶっ殺すぞ?」

「待ってアキラ!! コイツの足下よく見てっ!! なんか浮いてるわよっ!! タイガースを応援しながらビール片手に枝豆食べてそうなオッサンなのにつ!! 宙に浮いてるし頭に輪つかあるし羽があるわよっ!!」

理子の悲鳴のような叫び、自称天使なオッサンの姿にアキラも戦慄する。

このビール腹の変な中年男性は何なのだろうか、神々しさを感ずるのがなお悪い。

中年男性は二人の様子に、とても満足そうに頷いて。

「いやー、いきなり拉致ってすまへんなあお二人さん、あ、自己紹介がまだでしたね、オッサンの事は天使のオッサンとでも呼んでくれてかまへんよ」

「テメエの様な天使が居るか!! とつとオレらをこの部屋から出せッ!!」

「そうよそうよ! あたしんちもコイツの所も只の農家なんだからね!! 身代金なんか取れないわよ!!」

「そうカッカツせんと、ね? オツサンの言うこと聞いてくれんか?

あんさん達も理解してるでしょ、——オツサンが本当に天使で、セックスしないとこの部屋から出られない事は」

「……………」

天使のオツサンの言葉に、二人は顔を見合わせて黙り込んだ。

そう、頭では理解していた。

否、正確には本能と呼ぶべき何かが訴えていたのだ。

目の前の存在には逆らうな、言葉は本当だと。

「んんっ、ご理解頂けて嬉しいですわ。ほな説明いくで……と言つても、簡単な事なんやけどな」

そう言うと、天使のオツサンは宙に人口比や出生率のグラフを表示する。

まるでサラリーマンがプレゼンするような光景に、二人は何とも言えない表情で説明を聞き始めた。

「この日本の出生率が減少してるのは知ってますやろ? やからウチの上司……つまる所、人間はんの言うところの神様がな、こうオツサン達みたいな使いパシリに言うたんや——どんな手を使ってでも人を増やせ、つてな。オツサンはその中で日本担当の一人やねん」

「うごごご、し、信じたくないのに強制的に信じ込まされて気持ち悪いッ!? これどうなつてんだよオツサンッ!?!」

「人間はんはオツサン達天使と同じ神様が作りはったんやけど……、まー、オツサン達は神様方により人間はん達より上の権限を与えられてる的な? 人間はんは顧客で、オツサンは店の店員、神様方は会社そのものと言えば分かるかいな?」

「ううっ、色々疑問はあるけど。何であたし達がこうなってるの?

何でコイツとセックスしなきゃならないワケ?」

理子の疑問に、天使のオツサンは待ってましたとばかりに頷いて。

「オッサンの趣味や!! オッサンはなあ……くつつきそうできつつかない幼馴染みにラブイベントを与えて恋人にするのが趣味なんや!! ちなみに、お二人さんこのままだと恋人にもなれんと独り身で終わる予測結果が出とるで? けど安心してや!! この『セックスしないと出られない部屋』から脱出した暁には子沢山&裕福で幸せな未来が待ってるんやで!!」

「うおおおおおおおつ! マジか!! ウツハウハじやねえかフザけんなオッサン!! コイツとセックスするなら独り身で終わってやる!!」

「そうよそうよ!! 何か悲しくてこんな男とセックスしなきゃいけないのよ!!」

「うんうん、その感じ好きやわあ……。こう、ね、ここからどう恋人になつて行くかを考えただけで幸せエネルギーを充填できるつてもんやで。あ、幸せエネルギーってのはな? オッサンや神様方が生きていくのに必要なエネルギーで、ああ、最近には尊みが深いみないた言い方の方がエエんか?」

「知るかバカ!! 天使つつーならさあ、もつと他に方法ねえのかよ!!」

「ああ、時間停止能力や洗脳アプリの方が良かったでっしやるか? 実はAVやマンガのやつのイチャラブ系ハッピーエンドのやつは事実なんやで?」

「マジでツ!! 時間停止AVの1割が本当ってジョークじゃなかったのかよツ!!」

「衝撃の真実に瞳を輝かせるアキラ、男の子としてとても夢のある話だ。」

「もうこれだけで理性も、目の前のオッサンを天使認定しても良いとすら思う。」

「そんな彼とオッサンを、理子は冷え冷えとした視線を送り。」

「どうしてこうエロに偏ってるワケ?? もつとマシなのないの? アキラが好きな少女マンガみたいになさあ……」

「しれつとオレの趣味をバラしてんじやねーぞクソ女?? テメエなんてボドゲが趣味じゃねえかよ、相手いねえからオレが相手するしか

ねえじやねえか」

「……は？ 喧嘩売ってんのアキラ？」

「それはテメエだろ？」

これだから大嫌いなのだと、お互いを睨んで拳を握る二人。

天使のオツサンはまたも満足そうに頷いて、何も無い所からタブレットを取り出して差し出す。

「まあまあ落ち着きんさいお二人さん、今はセックスする気がない、それでもエエんです。細かいルールはこのタブレットで把握して頂戴ね、ほなまた、クリア後に会いましょう！」

「あ、ああ……って、消えやがったアイツツ!？」

「ええ……天使がタブレット……?? どうかルール？ ルールって何？」

残された二人は、困惑のまま立ち尽くしたのだった。

クエスト2 / イチャラブ・クエスト

天使のオッサンが居なくなるという事は、このセックスしないと出られない部屋に二人きりという事であり。

ごくりと生唾を飲み込み、二人は思わず顔を見合わせる。

(……………り、理子とセックスしなきゃいけないのか？ マジで？

いやそりや学校で一番スタイル良いけどさ、だつて理子だぜ？ いや無い、……無い筈だよな??)

(そんな……アキラとセックス……、そ、そりやあね？ 顔はそこまで悪くないし、ほ、ほら、体だつて毎日無理矢理筋トレさせてるし？で、でも——)

アキラの目には、顔を真っ赤にし口を開けて震える理子の姿が。

理子には、唇を噛みしめ頬を赤く染めるアキラの姿が。

どうしても写つてしまう、意識してしまう。

「そ、そうだあ!! タブレット確認しようぜえッ!! ここから出るヒントとかあるかもしれねえからなあ!!」

「そうー、そうよねっ!! ルールと確認しとかないとねっ!! あはっ、あはははっ、アンタにしては良い案じゃないっ!!」

お互いに声の上擦っているのは指摘しない、してしまつた途端に何かが壊れそうな気がするからだ。

ガタガタと堅い動きでタブレットの電源を入れるアキラ、理子は横からのぞき込む形で顔を寄せ。

「ッ!」

「っ!? ぐ、ごめん……」

「い、いや気にすんな？ 二人で見るんだからよ、これぐらい普通だぜ普通……」

「そ、そうよね、フツーよね……」

肩が少し触れた、それだけで過剰に反応してしまう。

気にしない、気にしてない、と二人は心の中で繰り返しながらタブレットの画面を見る。

そして、そこに記してあったルールは以下の通りだった。

- 1、セックスしないと出られません（滞在中は非常に時の流れを遅くしています、一週間粘っても現実世界の約3時間です）
- 2、時間制限はありません、ただし食事や娯楽は有料です（※ポイントを消費して購入してください）
- 3、非常事態には強力な催淫ガスが投入されます
- 4、情緒を大切にされる方は日替わりクエストがお勧めです
- 5、セックスした際にもポイントは発生します、詳細は別ページを参照してください。

- 6、セックスした後希望者は一定期間、滞在する事が出来ます。
- 7、一度出たらこの部屋には二度と来られません
- 8、自己目標を確認してくださいポイント大量GETのチャンスです

等々、様々なことが書かれていた。

最後に一番デカデカと大きな文字で「アブノーマルプレイにご注意を」と書かれた行から、二人は盛大に目を反らして。

「……………いやこれルールっていうか、ただの注意書きじゃねえの?」「食事は出ないけどポイント制……………え、って事はヤバイじゃない?」「……………ちよつと豪華な食事お二人様セットが5ポイント、セックス一回の基本ポイントが10……………、スナック菓子（一日分）が2、水2、ジュース2、……………コンドームが50」

「産めよ増やせよ地に満ちろっ!? あ、ああ、いえ、少子化対策とか言ってたし避妊は本末転倒ってのは分かるんだけどさあ!! ちよつと露骨過ぎでしょ!! 何よっ!! 大人の玩具をかうとポイントくれるって!! ふざけんな!!」

つまり、このままだと干上がってしまうのだ。

更に露骨な所をあげれば、本番行為をしなくてもポイントは得られるという事で。

（畜生ッ、全力でセックスに導いてやがるッ!! あのクソ天使めえッ!!）

こんなどぎついピンク空間から、セックスせずに脱出しなければな

らないのか。

考えただけでも気が遠くなりそうだ、その上、セックスせずに脱出する方法は当然の如く記されておらず。

「こうなりやアイツとの持久戦か……オレらが根負けするか、アイツが根負けするか。のサバイバル……だがどうやってポイントを稼ぐ？」

なあおい、日替わりクエストとやらを——」

「……待って、少し待ってくれない？」

「何か良い案があるのか？」

「そうじゃないけど……お願いっ、頼むから少し待ってって言ってるのよ!!」

「いや何でキレてんだよ?? 何かあったのか？」

険しい顔でふるふる震え始めた理子に、アキラは訝しげな視線を送る。

すると彼女は無言で俯き、部屋のとある方向に人差し指を向ける。

「は？ あっち？ あっちに何が——………あ」

「ううううううっ、何で透けてるのよっ!! 透明なガラスなのよっ

!! バカじゃない!? バカじゃないのマジでっ!!」

「そっか……ご愁傷様、ところでしたいのか？」

「聞くんじやないバカ!! 察しなさいよバカ!!」

半泣きで激怒する理子、然もあらん指し示したそこにはトイレと浴室。そのどちらもが、ガラスで外から丸見えだ。

ある程度の進展している恋人同士なら、軽いスパイスになるだろう。

だが二人は恋人ではなく、仲が悪い（と思っている）幼馴染み、キスだって当然まだだ。

「しゃーねえ、………ほら、これで良いだろ。終わったら声かけろよ」

「………アンタ………、こ、今回ばかりは感謝してもいいわ、ちよつとだけ待ってなさいよ………」

ズルい、理子はアキラの行動をそう評した。

だってそうだ、何も言わずシャツを脱いだと思えば自分に目隠しし

て。

その上でトイレが視界に入らないように、背を向けるベッドの上
座る。

(んもう大嫌いっ!! だから大嫌いなのよっ!! アンタってそういう
も……、ううっ、いつもいつもそうなんだからっ!! わたしがどんな
気持ちで……っ!!)

彼女はギロと彼を睨む、こんな行動なんて嬉しくない。

頬は赤くなつてないし、心臓は甘くときめいてたりなんかしてい
ない。

本当に、そう、本当に、少しも、嬉しくなんて、ない。

(………背中
の傷、まだ残ってる)

思わず触りたくなるのを我慢し、ぎゅつと拳を握つて。

頬の火照りを気のせいだと断じて、理子はトイレに入る。

すると自然に、彼女の目には彼の背中が飛び込んでくる。

(考えないのっ! 考えちゃ駄目、こんなクソ男なんて、ただの幼馴染
みなんだから………)

(———そういや熱くも寒くもねえな、空調はどうなって……いや、
考えるだけ無駄か? いや考えるべきだ、余計な事を考えずに済む
………)

こんな事なら般若心境でも覚えておけばよかった、この部屋から脱
出できたら出家するべきか。

アキラがそんな阿呆なことを考えている間に、彼女は帰ってきて肩
を叩く。

「………次に使うなら、せめて五分は開けなさいよ。いつもの様に
すぐに使うんじゃないわよ」

「お、おう、オマエもそうしろよ」

「………」

「………」

会話がとぎれる、何を言えばいい。

こんな状況で、どんな話題がある。

アキラも理子も、必死に話題を探す。

(くそッ、何か意識しちまって上手く頭が回らねえ……、いつも何も考えずに喋れてるのにさあ……)

(ど、どどどどどっ、どうすれば良いのよこれからっ!! 気まずいったらありやしないじゃないっ!! というか服を着なさいよっ! なんで脱いだままなのよっ!! 意識しちゃうじゃない!!)

(つかよお……何でコイツはわざわざオレの隣に座ったんだよ!! しかも密着しやがって!! ああもう失敗した!! とつととシャツを着れば良かった!! 妙に体温あつたけえんだよコイツは!!)

(お、落ち着きなさい、冷静になるのよ、今までもこれぐらいの距離なんで何度もあつたじゃない、そう! わたしとアキラは只の幼馴染みなんだから! 姉弟みたいなものよっ!! そう! 家族! なのよ!!)

またもガチガチに固まった二人は、それ故に会話が出来ず。

ただ、お互いの呼吸する音だけが聞こえる。

(き、気まずいっていうかああああああああああ!! うおおおとおおおお静まれっ! 静まれオレの色んな所っ!!)

(見ちゃ駄目、見ちゃ駄目、顔も体も見ちゃ駄目よ、だってキスもまだ、うん、まだ何だから——)

ぐくりと唾を嚥下したのはどちらであったか、次の瞬間。

ぐうぐう、と大きなお腹の音が二つ。

そう二つ、思わず顔を見合わせて。

「……………とりま目替わりクエスト確認して、出来る様だったらポイント稼いでメシ食おうぜ」

「賛成、お腹減ってるから変な空気になるのよ」

「だよな、腹減ってるから緊張すんだよ。……つと、このページか」

「なにになに? ……………手を繋いで一緒にAV鑑賞、——2
0ポイントっ!?!」

途端、画面からバツと顔をあげる二人。

「……………やるか」

「ええ、20あれば数日は持つかもしれないわ」

「ま、ただ見るだけだ、手を繋いで見るだけだ、変な事にはならねえよ

な！ 楽勝じゃねえか!!」

「ええっ！ これぐらいでこんなに稼げるなんて楽勝よね!!」

はははは、と乾いた笑い声ふたつ。

虚勢を張ってるだなんて、とてもじゃないが指摘できない。

（何でこんな内容なんだよッ!? ふざけんなあああああああああ
あッ!!）

（雰囲気流されない、わたしは雰囲気流されない、コイツとセック
スなんてしないっ!! 見るだけだもん、そうよ見るだけ、ええ、手を
繋いで見るだけ……………ううっ）

アキラと理子は視線を合わせずに、テレビの前に移動。

恐らくわざとだろう、密着するようなサイズの二人掛けソファに
座り。

「——準備はいいな」

「ええ、勿論よ。わたし達にセックスの可能性がないって事を証明す
るわよ」

左手と右手を恋人繋ぎで、太股と太股の間の上に置く。

そしてアキラは、リモコンを手に取りテレビを付けた。

クエスト3 / 危ない動画鑑賞

(くそッ、くそッ、くつそおおおおおッ、ぶつ殺すぞあのクソ天使ッ!!)

(あわっ、あわわわわわわわっ!? はいってるうっ!? む、無修正っ!?
なんで、なんでこんなおかしき無いのよおおおおおっ!?)

状況は非常に危機的だった、たかがAVを見るだけ。

自分たちが何かする訳でもなし、ただ黙って見てるだけで良い。
そう思っていたのは、開始十五分後まで。

(なんで男優も女優もッ!! オレと理子と似たやつなんだよッ!? A
Vマエストロかあのクソ天使はッ!?)

(ううううううう、予想すべきだったわ、こんな、こんな幼馴染み
設定のAVだけを見せに来るとかっ!!)

(しかも何で普段喧嘩ばかりとか、素直になれずにすれ違ってただ
の、は? こんなんばつかなのに一時間ずつと見とけて? コイツ
を密着して手を繋いで?!)

(た、耐えるのよわたしっ!! ここで耐えたら20ポイント手に入る
んだからっ!!)

そう、本当に最初の十五分は良かったのだ。

何せ取って付けた様なドラマパート、己達に似た出演者に設定、思
うところがあつたが許容範囲内。

だがその後、事が始まると話が変わってくる。

(お、オレもコイツと……………い、いや考えるなッ、それこそ思う壺
だッ!! ああ、でも胸は理子の方がデカいし形が……………じゃッ、
ねえッ!!)

(落ち着くよ、そう別な事を考えるの。——男優の人、アキラの方が
背が高いし逞し……………ち、違うっ!! そうじゃないでしょ!)

スピーカー越しだというのに、妙に生々しい嬌声。

女優の裸体が艶めかしく跳ねる、男優の獣性の籠もった吐息。

重なってしまう、脳内で隣の幼馴染みと映像が重なってしまう。

(どうにかしないと——そう、そうだ、AVの事は頭から追い出せッ、理子の事だけに意識を集中させるんだッ!!)

(……………っ!!) しまった、わたしは大丈夫、うん、流されない。でもアキラがもし雰囲気にも飲まれたら? もしかして……………もしかして?)
ふうはあ、と息を荒げている事にも気づかず。

二人はそつと隣を見る、奇しくも同じタイミングとなれば。

当然、目が合う訳で。

「ッ!」「っ!!」

(えつろろッ!! はあッ!? なんでコイツこんなにエロい顔してんだよッ!! 完全にAVに当てられてるじゃねえか!! 長い睫を震わせて、目を潤ませてさあッ!! 発情してんじゃねえよおおおおおおおおッ!!)

(あわわわわわわわっ!!) ぴ、ピンチじゃないのこれえっ!! すつごい目がギラギラしてたっ! なんかも犯してやるって感じて光ってたあゝっ!!)

誘ってるのか、襲うつもりなのか、途端にバクバクと大きく鳴り響く心臓の音。

テレビの中から愛の言葉と嬌声が聞こえる、独占欲を剥き出しにした獣の吐息が響く。

——隣の相手はどうだ? 画面の中と同じになっではいけないか? してしまうのか、本当に、二人の思考はぐるぐると渦を巻く。

(理子の巨乳、今なら揉んでも許され……………い、いや流されてる、今のオレは雰囲気にも流されてるんだッ、こんなヤツに手を出すなんて後が怖いって分かるだろ!!)

(今わたしの胸見てたっ?! 絶対見てたっ!! くっ、サイテーっ!!) 今までもそんな目で見てたワケっ!!)

(く、クールに行こうぜえオレよお……………、そう、そうだ、少子化だか天使だとか知った事かよ、オレはここを出るんだ、理子の貞操を、理子を守って、オレからも守りきって部屋から出るんだっ!! だから—— 安心しろよ理子、オレはテメエを襲わねえ)

(なんで急に強く手を握るのこイツっ?! 逃がさない為っ?! わたし

を逃がさない為なのっ!? その不敵な笑みは何よっ!? ま、負けないわよアンタなんか!!)

(そう、そうか——いつも通りの強気な顔で安心した………って、何で目を閉じてキス待ちっぽいポーズなんだよおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ!?)

キスをして欲しい、そんな風にしか受け取れない表情の理子に。

アキラは激しく動揺した、彼女も己と同じく抵抗を貫くと思つていた。

思つていたが、本当にそうなのか?

(さあ来なさい、いつでもキスしなさい。でもわたしにキスした瞬間——アンタを全力でボコボコにする)

(ッ!? 雰囲気が変わった!? ま、まさか受け入れるってのかテメエッ!! お、オレは童貞卒業すんのかテメエとセックスすんのかッ!?)

(覚悟は出来てるわ、アンタをこの拳で一撃必殺して沈める覚悟がね)(ま、待て、落ち着け……、これは毘だ、そうだ、いくら雰囲気に流されたからってコイツが素直にキス待ちとかするか?? ああ、そうだ——毘だッ)

キスした瞬間、或いはその一歩手前で暴力が襲ってくるのは経験則で分かる。

だが問題は、本当にキス待ちだったらどうするか、だ。

(考えろ、もし本当にキスだったら……オレは耐えられるのか?)

キスが正解だったとして、茶化したり断るようなりアクションをした場合。

たとえ理子といえど傷つくだろう、そしてそれは同時にOKサインでもあり。

その事実には、アキラの理性は保てるのだろうか。

(そ、それでもオレは——ッ!!)

ぶぐくりと生唾を飲む、ぶぐくりと理子の肩が震えた。

彼は真剣な顔で拳を握り、深呼吸をひとつ。

「ていッ」

「あ、だっ!? な、なにすんのよっ!!」

額に手をあて、ふくれっ面の理子。

アキラは彼女にデコピンをしたのだ、彼女からしてみれば大きくゴツゴツした手で、デコピンをしたのだ。

痛みと衝撃は、それなりにある。

「テメーがバカな事しようとしてたからだ、どーせオレが襲うかもしれないって勘違いして罫を張ってたんだろうが、ちつとは冷静になれ」

「A V見て発情してるアンタが悪いんじゃない!!」

「いやアレ見てエロい顔してる理子が悪いんじゃないの?」

「アンタの見間違えよ!! っていうかそれ言うならあたしの胸ガン見してた癖に!!」

「は? 自意識過剰もほどほどにしるよ?」

がるがる、ぎやうぎやうと喧嘩腰になる二人。

とはいえ手を繋ぎ合ったままなのは、律儀というか何というか。

『はい! それじゃあ今日の日替わりクエスト終了やでえくく! ポイントは二等分して振り込んださかい確認してや! ほなまた明日!!』

「……………テレビ消すか」

「晩ゴハン選びましょ……………」

天使のオツサンのアナウンスに、どつと脱力するアキラと理子。

疲れ切った顔で、仲良くタブレットを覗きこみ。

「気晴らしに良いもん食うか? それとも節約すつか?」

「牛丼でよくない? ポイント安いし」

「二人分で2ポイントか、確かに安いな……………それにすつか」

どことなく気まずい、けれど重い空気ではなく。

チラチラと相手を見ながら食事をし、交代でバスルームを使い。

パジャマが無いので、バスローブを代わりに着る。

——ならば、残る問題はひとつ。

「じゃあオレは床かソファで寝る、理子はベッドを使えよ」

「は? 今更何言ってるのよ。一緒に使いなさいよこんなに大きいん

だから」

不思議そうに言う彼女に、アキラは照れくさそうに頬を染めてそっぽを向く。

言わなければならぬ、弱みをみせる事になっても今はただ、少しでも危険を避けるために。

「……………今まで言わなかったけどな、可愛いんだよお前、テレビで見るアイドルよりも、学校の誰よりもさ、それにバスローブの下は何も付けてねえだろ。頼む、……………これ以上は言わせないでくれ」

「アキラ、アンタ——」

ドキ、と彼女の心臓は跳ねた。

そんな切なそうな顔なんて、始めて目にしたから。

普段から喧嘩ばかりで、大嫌いな相手なのに、向こうもそう思っているのに。

(守ろうって、大切にしてくれてるの？　可愛いって、そう思ってたの……………?)

嗚呼、と声が漏れそうになる。

だから彼が嫌いなのだ、狡い、本当に狡い、こんな時にだけ弱みを見せてくるなんて。

そんな所が可愛いって、思わせてくるなんて。

(わたしは……………、アンタの事を)

大嫌いだ、それは変わらない。

意識している、それは確かだ。

アキラとセックスしない、セックスせずにこの部屋から出る。

(大嫌い、でも憎んでるワケじゃない)

揺れてしまう、そんな姿を見せられると。

きつと彼にそんな意図は微塵もないだろう、でもどうしても、こんな状況なのだ。

だから。

「……………一緒に、寝なさいよ。信頼してるから、アンタはわたしを無理矢理襲わないって。……………怖いよ、少し、少しだけだけど、怖いから側に、居てよ……………今日だけはアンタの抱き癖だって許してあげ

るから」

「ツ!?!」

心細いと言わんばかりに俯く理子に、その耳まで真っ赤になった姿に。

アキラは心臓を鷲掴みにされた様な感覚に陥った、可愛いという言葉では言い表せない何かを覚えた。

(か、勘違いするな、これは庇護欲だ。ちよつと見た目がエロくて可愛いからって、ああ、オレがコイツに惚れる訳がない、ただ守りたいって、抱きしめながら寝て安心されたいって、それだけだから……)

それだけの事なのに、どうしてこんなにむず痒いのか。

相手の顔が見れないのか、毎日毎日ずっと見続けて見飽きた顔を、どうして今更直視できないのか。

「い、良いんだな本当に、一緒に寝るぞ、オレ抱き癖あるからお前を抱きしめて寝るぞ」

「……………うん、それで良いから。今はもう、何も言わずに寝ましょ」

「わかった……………」

「……………おやすみアキラ」

ベッドに入り、枕元にあるスイッチで明かりを消す。

もそもそと彼女が体を丸める音がする、少し離れているのに体温が伝わってくる気がする。

彼女が……………震えている気がする。

「っ!?!」

「安心しろ、オレがお前を無事にこの部屋から出すから。絶対を守るから、だからさ、安心して寝ろよ……………」

「……………ばか」

強引な腕枕を、理子は抵抗せずに受け入れて。

アキラの胸板に額を寄せて、目を閉じる。

とくん、とくんと彼の鼓動が聞こえ、それはとても落ち着く気がして。

「——今度こそおやすみ、理子」

彼女が寝静まった後、小さく笑ってアキラも眠りについた。

闇の中、天使から渡されたタブレットが淡く光る。

二人の眠りを覚まさぬように光り、日替わりクエストが更新される。

『相手の下着と服を選んでプレゼントし、その手で着替えさせてあげよう！ ※セックス込みのデートがテーマです、服は専用リストから選んでください』

その事に、二人は朝食の後まで気が付かなかった。

クエスト4／センス・オブ・デート（セックス前提）

——セックスしないと出られない部屋・耐久生活二日目。

ぐっすりと睡眠をとったからか、アキラと理子は多少なりとも冷静さを取り戻して。

「うーん……はよー」

「はよ、先にトイレと洗面所使わよー」

もともと、頻繁にどちらの家に泊まり徹夜でゲーム勝負していた間柄だ。

取り乱すことなく朝食後、さて何をしようかとなった時だった。

「そーいやさ、自己目標があるとかが言ってなかったか？」

「相手には見えないとか書いてあったわね、見てみましようか」

ソファーに座り仲良くタブレットを覗き込む二人、するとそこには。

「————いやいやいやッ!? 合意の上で処女を貰えってさああああああッ!!」

（こっ、こっこっこっこっおっ!! 告白して貰えってえ!!）

本当に、相手に見えないシステムで良かった。

二人は初めて、天使のオッサンに感謝の念を捧げる。

『※相手にバレではないけません』って、いやこんなの口が裂けても言えねえだろうがッ!!）

（こ、こいつに結婚を申し込まれろって!?!）

（ああもうッ、何考えてこんなもの——い、いや冷静に考えろ、これはセックス前提の部屋。つまりそれぐらいに仲が深まっている事が前提。他の奴らが同じとは限らないが……）

（……要するに、やった後のご褒美ってコトね、或いはいきなり拉致した謝罪もかねて大量のポイントサービスというか）

自己目標達成時の入手ポイントは1000ポイント、何でも交換できるという事で。

天使とこの部屋の存在が、それを保証するのだ。

確かにそれならば、この部屋から出た後も幸せに暮らせる気がする。

「……………今のところ、オレにはあんま関係ねー話だったわ、オマエのは？」

「わたしも同じ感じね、思うにコレって両思い前提って気がするわ」

「そうそう、ボーナス的なやつだよなこれ」

「……………」

会話が途切れる、これ以上何かを言うとはドツボにはまってしまいう気がしたからだ。

二人は視線を交わし、頷きあうと。

「話題を変えよう、現在の残りポイントは16」

「一食に2ポイント使うとして、あと八食分はあるわね」

「今日の昼と夜で4ポイント二食分、なら残り六食で二日分か…………」

「贅沢は出来ない、オヤツやジュースも無理、そして寝る意外の娯楽も無し」

本当にここは、セックスの為の部屋なのだ。

テレビを付けてもソツチ系しか流れないのは確認済み、各種端子があるのでゲーム機に対応してる事は確かだが。

「……………そうか、考えてみたらポイントさえ入れればメシも娯楽も手に入るって事だな!!」

「良いわねそれ、好きだけ居られるみたいだし!! どんなゲームがあるか確認しない？ アンタも少女マンガを交換してもいいわー!」

「待て待て、交換リストを確認するのは後でも出来る。今は……………今日の日替わりクエストを確認しようぜ」

「そうね、全てはポイント次第だもの。どれどれ今日の日替わりクエストは……………」

目を輝かせてページを切り替える二人、昨日のように我慢すれば良いだけの話だ。

どんな難題が来たって、そう耐えさえ出来れば。

『相手の下着と服を選んでプレゼントし、その手で着替えさせてあげよう! ※セックス込みのデートがテーマです、服は専用リストから

選んでください』

「……………下着と服を選んで」

「その手で着替えさせろおくくくっ!!」

選ぶのは良い、だが着替えさせるとは何だ。

服ならまだしも、下着まで着替えさせるのか。

必然、相手に体を晒すことになり。

「よし、今日のは止めるか!!」

「ちよ、ちよつと待ってアキラっ!? 何かヤバイ事がちっさく書いてあるわよっ!? ほらココ!!」

「どれどれ……………げっ、日替わりクエストをしない場合は報酬ポイントが現在のポイントから引かれます。くくくくく畜生ッ、選択肢ねえじやねえか!!」

「生きていく為には日替わりクエストしなきゃいけない、けど日替わりクエストで精神の耐久度を削られるっ! あのクソ天使いつ!!
どんな手を使ってもわたし達にセックスさせる気ねっ!!」

その時、アキラにはとある疑問が出てきた。

ポイントがマイナスになった場合、どうなるのだろうか。

「どっかに書いてないか? ポイントがマイナスになるとどうなるんだ? ヤベえよ、これ絶対に変な事が起こるって!!」

「くっ、確かにこんな部屋とシステムを考えるヤツがマイナス時のペナルティを考えてない筈がないわっ!!」

「——あつた!! その場合は失格とみなし、催淫ガス・イチャラブぞっこん一発必中子作り用が部屋に散布されます……………はあああああああッ!! ふざけてんのかテメエええええええええええ!!」

「み、未来が決定してしまうっ!? この年で子供が出来てアキラなんかと結婚してしまうのっ!」

お前がパパ／ママになるんだよ、が強制実行されてしまうのか。
恐ろしすぎるペナルティに、アキラも理子も戦慄して。

(いやこれマジでありえないガスだろっ!? いったいどんな……………いや想像すんなオレ!! また変な雰囲気になるだろうが!!)

(イチャラブぞっこん……………それを吸ったらアキラは——違うっ、そん

なコト考えちやダメ!!」

「ははッ、し、失敗しなきゃ良いんだよなこんなのはよおッ!!」

「そ、そそそそそうよっ!! 失敗しなきゃ良い話でしょ。幸いにして、我慢すれば良いだけのクエストなんだから……」

この先、日替わりクエストの内容が過激化していったら。

果たして本当に耐えきれぬだろうか、セックスしないでいられるだろうか。

一抹の不安を感じながら、二人は今日のクエストを始める。

「えつと何だ? エモいとオツサンが思えば思うほど基本報酬から加算されていく?」

「ふんっ、幾らポイントの為だからって変なの選んだら承知しないわよっ!!」

「お前こそ変なの選ぶなよなッ!」

「わたしは大丈夫よ、けどアンタは言う権利なーし。誰がアンタの服とアクセを選んでやってると思ってるワケ? このクソダサ男!」

「言つたなテムエ!! 後悔すんなよ!! 一泡吹かせて大量ポイント確保してやらあッ!!」

「好きにしたらあ、ま、わたしの加算ポイントの方が上でしようけどねえ!!」

売り言葉に買い言葉。

またも喧嘩腰の二人は、虚空から現れた分厚いカタログを手に取った。

(アキラは色黒っていうか日焼けで肌黒いから、似合うのが限られるのよね。だからチャラ男っぽいコーデにしてやってるんだけど……)

(そういうや散々グチってたな、胸がデカくて下着も服も中々合うのが無いって)

(デート……デートねえ、ウチの周辺ってデートスポットあったかしら? 精々が海と、ちよっと遠くの山と……電車で一時間行けば町中に行けるけど……)

(どうすりゃ良いんだ? 何が正解なんだ? ……コイツ、いつつも

ダボつとしたTシャツと短パンだしなあ……偶にはスカートとか??）
チラチラと相手を確認しながら悩むこと数十分、二人は選んだ服と
下着を出して貰い。

「よし、見せて貰おうじゃねえか。 temeエのコーデとやらをよおッ!!」
「ま、期待しないでいるわアンタのコーデなんか。 どーせ童貞丸出し
のエツろいヤツでしょ」

「くくく、いつまでそう思ってたかな? じゃあ————
……………ふ、服脱いで欲しいなあってオレ思うんだよ、き、着替
えさせるって話だったしなあ!!」

「そつ、そおだったわねえっ!! ——つ、あ、ううつ、見ても忘れなさ
いよ。絶対よ、それからブラの時は軽くて良いわ、ブラのフィットの
させ方とか知らないでしょアンタ」

「お、おう、頼む……」

すうはあ、すうはあ、深呼吸を繰り返してアキラは下着を手取る。
目の前にはTシャツを脱ぎブラを外した理子が、手ブラで立ってい
る。

そつぽを向いているが、耳まで真っ赤にして恥ずかしがっているの
が丸わかりだ。

(~~~~股間に悪いッ!! 意図してねえだろうけど!! 悪気はない
んだろうけどさあ!! エロいしか感想が出てこない!!)

「…………どうしたのよ、とつととブラ付けてくんない?」

「わ、悪い…………これで良いか?」

「うん、後はわたしが……」

ブラを無言でフィットさせる理子、視線を反らしたアキラもまた無
言。

どう、何を言えというのだからこのシチュエーションで。

(へえ、中々オシヤレなピンク花柄のね。 てつきりスケスケレースと
か選んできると思ってたけど…………ま、でも所詮は見えない部分よ、問題
は服ね服。 ……その前に下もあるのよねえ……………)

(み、見たいッ、くそッ、なんて卑劣なクエストなんだ!! ああ、なん
でオレはもつと見なかったんだ!! クソほど嫌いな理子のはいえ、

女の子の乳首だぞ!! 生乳だぞ!! ——部屋に来るまではチラチラ見えても気になんなかったのにさあ……)

上が終われば次は下だ、同じ柄の物をアキラは後ろから履かせる。間違っても臀部は見えない、太股だけに視線を集中して。

「——はい、オツケ。じゃあ肝心の服よ」

「お、おう………これだ、気に入ってくれると嬉しいんだがよ」

アキラが見せたのは、ロングスカートの白いワンピースだった。

気遣いだろうか下着が透けないような生地、それでいて胸が強調されるようなベルト付きの。

「うわっ、童貞臭っ、アンタこんな好きなの?? ちょっとマジで童貞丸出しじゃない?? 普通さあ、こんなの男の欲望叶えましたって服はそうそう着てくれる子なんていないわよ?? ——わたしぐらいなんだから、感謝しなさいよね」

「くッ、………あ、ありがとう!!」

悔しそうに口にしたアキラは、ネックレスと麦わら帽子を渡した。

「へえ〜、ほお〜、ふう〜くん?? アキラってこんなのが好みだったんだあ……へえ〜、ね、部屋から出たらさ、次の休みにでもこんなカツコで海デートしてあげようか? アンタってモテないし一度は女の子とデートしとくべきでしょ」

「うぐぐぐッ、調子乗りやがって!! お前もオレに着せろよオラあッ!!」

茹で蛸のように赤い顔で叫ぶアキラに、理子はくつくつと笑いながら服を見せる。

「じゃーん、ほら、どうよお……!!」

「ええっと、なんだコレ?いつものチャラ男系じゃないってのは分かるんだが……」

「この前、海外のイケオジ映画俳優が着てた感じのコーデよ!! 黒のダブルジャケットと黒パンツ、まあアンタ背が高いし似合うでしょ。ちゃんと袖口を捲って……わたしがするのかソレ」

ふんふんふーん、と機嫌良くアキラに着せ始める理子。

(恋人とか妻とか、そんな感じ………い、いや考えるなッ!!)

幸せな妄想を必死に振り払って、彼は真顔で言いなりになる。

「上はまあこんなもんね、後は下……………っ!? あ、う、くくくっ!!
わ、わたしも後ろから履かせるから細かい所は任せたわよっ!!」
「わ、分かったぜえっ!」

アキラとしては冷静に答えたつもりだったが、盛大に上擦って。

理子は理子で、今すぐ逃げ出したい気分だった。

(あわっ、はわわわわわわわっ!? ばおーんって!! なんかすごいパ
オーooooooooんって!! 太いし長い!! 昔、一緒にお風呂入った時と
違いすぎるんだけどおっ!?)

思わず直視してしまったのだ、興奮じようたいにあるソレを。

自分の気持ちで手一杯なアキラは、その状態に気づかずについて。

それが故に彼女は、彼が平然としているならと指摘せず。

(これオレが持つてるトランクスだな、コイツ手抜きしたな? いや
まあ変なの持つてこられるよりマシだが)

(うっし履いたわね? うん、履いた……………なら最後はズボンを
……………)

そうして出来上がったのは、都会デートな格好のアキラと海岸デー
トな理子。

二人がお互いの格好を、マジマジと見ていたその時だった。

『ふおおおおおおおお!! エエでエエでえ!! オツサンはばっち
り見とったでえ!! 初々しくでエモエモエネルギー満タンやで!!
ああ〜、これが見たかったんじゃあ〜、都会で格好良く着飾った
カレピとデートしたい、海岸を二人で歩いてデートしたい、うーん、
満足やでオツサンは!! 二人にそれぞれ追加ポイント10づつやつ
たるわ!! 持ってけ泥棒! ほな明日も楽しませてな!!』

「……………」

アナウンスが終わった途端、ぐったりと疲れる二人。

同時に、紙切れが落ちてきて『プレゼントやさかい持って帰ってな』
とメッセージが。

「……………着替えるか」

「そうね、着替えましょうか」

はあと、理子が盛大なため息が瞬間だった。

思わず、アキラはその可能性を考えてしまう。

(コイツに彼氏が出来たら、こんな格好すんのかなあ……、嬉しそうに着てさ、デートに行くのか?)

そう考えてしまうと、胸がちりちりと痛む。

生まれた時から一緒に居ると言っても過言ではない存在を、見た目は美しい幼馴染みを、大嫌いだけど性格は悪くない理子を。

(オレの知らない誰かと、お前はデートに行くのか?)

そして楽しそうにデートをして、食事の時は食べさせ合ったりして、最後にはラブホで抱かれるのだろうか。

こんな部屋で、喜んで裸体を晒すのだろうか。

(ツ!! ちつくしよう!! こんな、こんなのつてさあ……嫉妬、してるみたいじゃねえか。いや嫉妬してんだオレは、見ず知らずの誰かに、オレは、こいつを取られたくないって)

それはどういう感情なのか、深く考えると感情に、欲望に、嫉妬に、歯止めが効かなくなりそう。

衝動のまま、アキラは理子の細い腕を掴んだ。

「あん? 何よアキラ、そんな怖い顔してどーしたってのよ。そんなに気に入らなかつたのソレ? 傷つくんだけど」

「違う、……違えんだよ理子、そんなんじゃないよ」

「なら離してくんない? 着替えられないでしょうが」

「言わなければならぬ、言っては幼馴染みという一線を越えかねない言葉だ。」

でも、この感情は押さえられない。

(な、何よそんな真剣な顔して……)

アキラの緊迫した雰囲気、理子は思わず吞まれてしまった。

何故だかトクンと心が跳ねる、嫌だ、その目で見つめないで欲しいと不思議な言葉が脳を駆けめぐる。

何を言うのか、キスされるのか、押し倒されるのか彼女が身構えた瞬間だった。

「——頼む、オレ以外の前でそんな格好しないでくれ」

「え、あ、っ!?　　くくくあ、アキラ?　アンタ自分が何を言ってる……」
「畜生、嫉妬だよツ!!　深く聞くなバカ!!　そんな可愛くて綺麗な格好!!　似合ってるんだよバカ!!　だからオレの前だけにしてくれて言ってるんだよ!!」

「くくくくくくくくくつ!!　わ、分かったから離しなさいよ痛いし顔が近い……ち、近いのよ顔……、キスする気?　い、嫌、そう、まだ嫌なんだから……」

「……ごめん、どうかしてた。着替える……」

掴んだ腕を離す一瞬、彼が切なそうな顔をしたのを理子は見逃さなかった。

（ごそごそと着替える後ろ姿を見ながら、彼女の頬は朱色に染まり。

（ズルい、ズルいわよアキラ……だから大嫌いなよアンタ……）
でも。

（聞こえたから、確かに聞いたから、アンタの前でしか、着ないから）
本当にどうかしてる、この調子でセックスせずに居られるのか。

流されている、雰囲気は二人の空気を浸食している。

（うう……胸のドキドキが、止まらない……）

（うわあああああああアツ、言っただ、言っただよオレえええええええええツ!!）

（後ろ向いてて良かったわ……絶対今、顔がニヤけてる、うん、何か変な顔してるもんわたし）

（変だと思われたよな、絶対変な空気になるよなこの後!!　ど、どーすりや良いんだよおおおおお!!）

全力で悶えつつ、静かに着替える二人。

着替え終わっても、どちらも俯いて言葉を発しない。

そのまま三十分以上経過し、先に発言したのは理子。

「そ、そうだ!　夜までゲーム大会しましょう!!　今日のポイントで switch を交換できるみたいだし、マリカーで対戦しましょう!!」

「お、おう!　そうだな!　今日はぱあーっと遊ぼうぜ!　メシも豪華に行こう!!」

「賛成!　楽しむわよお!!」

そうして、二日目の二人は逃げるようにゲームに没頭し仲良く寝落ちした。

——セックスしないと出れない部屋・耐久生活三日目。

朝、寝ぼけ眼をこすりながら起きたアキラは、傍らで眠る理子の顔をぼんやりと見つめて。

(……………こいつ、こうしていると只の美少女なんだけどなあ)

あどけない寝顔へ自然と手が伸びる、触ると吸いつくような肌。

その心地い感触の頬を、優しく撫でて。

(睫長いよなあ……、ホント、あらためて見ると女の子らしいというか)

顔を近づけてマジマジと、不思議と彼女の寝汗の匂いでさえ甘く感じてしまいそう。

寝起き特有のぼやとした思考状況の中、当の彼女と言えば。

(……………んんっ!? へっ!? 何っ!? 何なのこれっ!? 何で顔近づけてるのよっ!? は? キス? もしかしてキスしよとしているのっ!? いったい何なのよおおおおおおおおおっ!?)

起きるに起きれず、盛大に困惑していたのだった。

クエスト5／傷

「……………綺麗だ、理子」

(よ、よく考えなさいわたしっ!! 落ち着くのよ、落ち着いて考えないと——)

彼女としては、非常に危機的な状況だ。

昨日の日替わりクエストが、彼をそんなに変えてしまったのか。

それとも、実はそういう気持ちを抱いていたとでも言うのだろうか。

(こ、このままだとっ!! わたしのファーストキスがぁぁぁっ!!)
「……………唇、ぷにぷにしてんなあ」

(はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!! なんでそんなに大胆に触ってくるのこイツっ!! どうしちゃったのアキラっ!! 襲うのっ!! わたし襲われちゃうのっ!!)

どうすれば良いのだ本当に、起きて、起きたら、どうなってしまうのだろうか。

変わらず、アキラは唇をぷにぷにと人差し指で押す。

もし理子が薄目を開けていたら、彼が寝ぼけ眼である事が分かるだろう。

(ううっ、目なんて開けれられないわよ!! こんな状況でっ!! こっつ、このまま寝たフリしとく? それと起きてひっぱたくべき?? なに、ホント何がしたいのアキラっ!!)

(あー、なんかスツゲえいぞコレ。何というか、頭が気持ちよく冴えていく様な……………よう、な、……………あれ??)

アキラは彼女の髪を撫でながら匂いを嗅いだ瞬間、己の行動を自覚した。

もはや目が覚めたとか、そんな事を行っている場合ではない。

(何でオレは理子の寝込みを襲ってんだよっ!!)

寝ぼけていたにも程がある、ダメだ、完全にこの変な部屋の雰囲気
に流されている。

危機感はもう一つ、即ち。

(やつべ、今コイツが起きたら気まずいどころじゃねえぞッ!? どうする、ここからどうするッ!?)

(止まった……、これで終わり? ならもう起きても——い、いやっ、まさかキス、本当にキスして起こすとかするのっ!? 流星に少女マンガの読み過ぎだつてアキラっ!?)

(今すぐ手を離せば……、いや違うッ、このシチュは少女マンガで読んだ! そう、こんな時、少女マンガのヒーローが取る行動は——
—ッ)

1、唇や耳、或いは髪にキスして起こす。

2、そのまま襲う。

(いや違うだろッ!? 特に2番目ッ!! それエロマンガとかTL系のやつッ!?)

思った以上に動揺している己を叱咤しながら、彼は必死に記憶を探った。

ここからの選択肢が、まだある筈である。

(3、ほっぺを抓って起こす。——そう! これだよこれッ!! これしかないッ!!)

(はうあっ!?! 空気が変わった!?! わたしには分かるっ、何かしようとしてるコイツっ!?!)

このままキスされてしまうのか、そのまま大人の階段を上がってしまふのか。

理子がきゅつと拳を握ったその時だった、頬がぐにゅと摘まれ。

「おーい、起きろ理子。そろそろ朝飯食おうぜー」

(……………このヘタレっ!! い、いや残念だっとか思っっていないから、そう思っっていないんだからねっ!!)

理子はううん、と眠たそうな演技をしながら瞳を開ける。

そしてぺしぺしと彼の手を叩きながら、はあと溜息を吐き出し。

「……………ちよつとアキラ、起きたから手を離しなさいよバカ。もう少し優しく起こせないの? 乙女の頬を抓るなんてデリカシーなくない?!”

「……………んじゃあ、日替わりクエストでもすつか?」

「ええ、ポイントは稼がないとね。——くれぐれも雰囲気流されるんじゃないわよ」

「はッ、お前こそうっかりオレに惚れるんじゃねーぞ」

普段と同じ喧嘩腰の筈が、どこか力なく。

それも気づかないフリをして、二人はタブレットを覗く。
するとそこには。

『今日はお互いをマッサージして、労ってあげましょう! 服装はコチラの指定した水着を着てください。報酬ポイントは30、昨日と同じく追加ポイントもあり得ます。』

「水着で……………」

「……………マッサージ?」

思わず視線を合わせる二人、その顔は真つ赤で瞳は泳いでいた。

(はあああああああアツ!? 水着ッ!? この状況で水着だとツ!?)

バカなのかあのクソ天使!! 理子だぞ? 性格はアレだけど体はエロい理子だぞ!! ちつくしよおおおおおおお!!)

(……………!! き、昨日の今日でコレっ!? ああもうっ!! ああああああ、もおおおおおお!!)

正直拒否したい、しかし昨日は勢いで浪費しポイントを食事分しか残さなかった。

つまり、未達成だと例の催淫ガスの出番であって。

「——ちッ、クソツタレが!! こうなりやヤケだ!! やってやるよマッサージすりや良いんだろうが!! コイツに手を出さないで部屋から出られる事を証明し続けてやんよッ!!」

「女は度胸っ!! こんなコトで流されたりなんかしないのよわたしはッ!! 何でもしてやろうじゃない!!」

「……………」

「へッ、威勢良く吠えたじゃねーか。オレのマッサージテクに酔いしれな……………!!」

「アンタこそ、わたしのテクで眠らせてあげるわよ!!」

自棄っぱちになった二人は、バチバチと火花を散らし。

そして、水着に着替えてご対面。

「アンタ……そうして見るとマジでチャラ男よね」

「うっせえな、好きでこんな顔してんじゃねえっつーの!!」

アキラは格好は、特に面白げのない水色のサーフパンツであったが。

元々の色黒さと、農作業の手伝いで鍛えられた体。

そこに首には金色のネックレスが加われば、ナンパ目的で海に来たチャラ男感を増している。

「っていうか理子こそ……、その、なんだ？　結構似合ってるじゃねーか」

「あ、ありがとう……」

視線を反らして照れくさそうに誉めるアキラ、誉められた理子は恥ずかしそうにモジモジと体を揺らす。

すると当然の様に、彼女の巨乳が動きに合わせて揺れて。

（なんで肩出しのビキニなんだよおおおおお!!　似合ってるけどさあ!!　似合ってるんだけどさあ!!　それ以上にエロい!!　いやエロいだろうがコレ!!）

アキラは戦慄した、この格好の理子にマッサージされて耐えなければならぬのか。

彼女の水着は、白レースのオフショルダービキニ。

肩紐がないぶん、肩は艶めかしく、そして大きな胸は今にもこぼれ落ちそうな。

（ふふふ、ピンチ、ピンチだ……目のやり場がマジでない、顔は恥ずかしくて見れないし、胸は論外、お腹は括れが何かエロい、ケツもダメだし太股もダメ、……いやマジでドコを見れば良いんだ??）

（あらためてコイツの体見ると……、ま、まあまあね、腹筋こそ割れてないけど引き締まって鍛えてるって感じで悪くないじゃない?）

アキラと理子はお互いをチラチラ見ながら、マッサージの打ち合わせを始める。

——お互いの顔が赤くなっているのには、不自然なまでに触れず。

「んでさ、……どうする？ 肩とか揉めば良いのか？」

「……………前からはナシ、後ろからで」

「分かった」

「お尻を触ったらコロス」

「あいよ、——じゃあ始めようぜ」

ベッドの上で俯せになる理子、アキラはその横で膝立ちになって両手を延ばす。

「はい、お客さん先ずは腕から行くぜー……って、うわ、お前の二の腕つてぷにぷにじゃね？ 唇と同じぐらいぷにぷにしてね？」

「……………ははっ、何でアンタがわたしの唇の感触知ってるのか追求されたくなければ、今すぐ口を閉じたらどう？」

「ッ!? あ、ああ!! マジで綺麗だぜ理子!! 綺麗すぎて言葉が出てこないから暫く無言で行くぜえっ!!」

やっべ、と慌てて口を噤むアキラ。

バレている、寝起きのうっかりがバレている。

(どーりで朝飯の時に静かな訳だよコイツはッ!! そりやあ静かになるわ、だってオレ綺麗だとか言ったもん!! 唇とかめつき触ってたわ!! そりや気まずくなるよなあ!! ——ド畜生!!)

このマッサージが終われば、とんでもない復讐が待っているかもしれない。

戦々恐々とした彼であったが、ある意味、それ以上に恐ろしい事態が起きて。

「……………んっ、——あん、んくっつ、そこっ、そこお……………」

(いやお前この状況分かってんのかよッ!? エロい声出さないでくれるッ!? ちよつと股間がやばいんだけどお!?)

「あ、やん、……………はア、あ、あっ、ふう……………や、あ——」

(無心だ、無心になるんだ……………大嫌いな相手だぞ、相手は理子だと、絶対にコイツに欲情なんて——)

その時だった、アキラは己の感情に疑問を覚えて。

そもその話、いったい何時から。

(そういえば、なんでオレは理子を大嫌いつて思ってるんだ?)

毎日のように一緒にいて、遊んで、お互いの部屋を無断で入り入れ、下着の種類だつて把握してる。

本当に大嫌いであるなら、こんなに一緒に居ないのではないかと。(……………そりゃあさ、ガキの頃つつーか。最初に会った時はマジで大嫌いだったぜ？ オレのミニカー奪うしオヤツは横取りするし、絵本を読めば先にわたしが読むって奪いに来るし)

りこちゃんなんてだいきらい、というのが幼少期の口癖だった。

子供なりに、本気で嫌っていた筈だ。

でも他に遊び相手が居なかったし、成長するにつれ喧嘩も遊びの延長線上になつて行つて。

(オレ、理子のことを——本当に大嫌いなのか?)

なんて事に思い至つてしまう。

この部屋から何事もなく出るならば、彼女の事なんて意識しない方が良いのに。

(何でオレは昨日、あの時、嫉妬したんだ?)

不味い、これ以上考えたら彼女を大嫌いな幼馴染みとして見れなくなる。

でもちやんと考えないと、いつか隣から居なくなつて行くような気がして。

(——違う、あの天使のオッサンは何て言つてた?)

アキラと理子は、お互い独身のまま一生を終える可能性が高いと。

そう、言つていなかっただろうか。

「……………そんなのは——」

「アキラ？ 手が止まつてるけど終わった？ なら交代するけど」

「ツ!? あ、ああ、終わったから交代してくれ」

「はいはい、オレのテクに酔いなどか言つて案外フツーだったわねア
ンタのマッサージ……………アキラ？」

どこかぼんやりした彼に訝しげな視線を送りながら、彼女は場所を交代する。

「なんでもない、……………ほら、始めてく——ぐえツ、て、テメエ躊躇無く
上に乗れやがったなツ!？」

「良いじゃない、文句ある？　——それとも、わたしが重いって言うの？」

「せめて一言くれてんだよ!!」

交代して俯せになったアキラの臀部の上に、理子は遠慮なく跨がって腰を下ろす。

そのままペタペタと、遠慮なく背中を触り。

（——まだ、傷残ってるのね）

感傷的に口元を緩ませながら、その傷痕を人差し指でなぞる。

この傷痕があるから、だから。

（だから大嫌いなものよ、アンタは……）

筋肉質な背中や腰をぐいぐいと押しながら、理子は悔しそうに微笑む。

幼い頃は嫌いだったのだ、でもそれは次第に口だけになって。

そして、二年前。

（アンタは……わたしを庇って車に跳ね飛ばされ死にかけた）

あの時の光景は、今でも夢に出てくる時がある。

けたたましいクラクションと、甲高いブレーキ音。

次の瞬間、道路脇に押されて目に飛び込んだのは宙を舞うアキラ。

（バカ……バカよアンタは、わたしを庇ってアンタが死ぬ所だったじゃない、それなのにアンタはわたしにさ、無事で良かった、だなんて——っ）

その瞬間の感情を、何と呼べば良いのか。

今でも答えは出ていない、怒りか、悔しさか、嬉しかったのか、それとも他の何かなのか。

でもはつきり分かる事は一つ、理子はアキラから返せるかどうか分からない。『借り』が出来たのだ。

（大きすぎるのよっ、命を救われただなんて、どう返せば良いのよ!!）
退院しても、こっちに何一つ要求しないしっ、お礼を言ったら頭打ったかって病院に連れてくしきあっ!!）

腹立たしい、アキラは理子の命を勝手に救っておいて。

その癖、恩返しすらさせてくれなかったのだ。

プレゼントを贈れば倍返しにされ、薄着になった上で隙だらけの姿を見せても腹冷えるぞと腹巻きを渡され。

(ああもうっ!! 思い返すだけでイライラしてくるっ!! 嫌いっ、嫌いよっ、アキラなんて大嫌いなんだからっ!!)

本当にもう、どうしてくれようか。

この、セックスしないと出られない部屋に一緒に居るといふのに。学校でも一番の美貌とスタイルを誇る理子に対し、強引に迫る事も、仕方ないと良いわけにして襲う事もなく。

「……………なあ、さつきから手が止まってんだが? 一応マッサージはしたからクリアだろうが。終わったなら上から退いてくれ、そろそろ着替えようぜ?」

「ああ、ええ、そうねえっ、マッサージは終わっても良いわよねえっ、——それはそれとして、ちよっと思っただのよわたし」

声色に怒りを滲ませて、有無を言わさぬ気迫で理子はケタケタと笑う。

上に乗られたままのアキラは、朝の復讐が始まったかと恐怖しかなく。

(あつたま来たわっ!! わたしにだってねえ、女の子としての意地があるのよっ!! それをコイツは砂粒ほども理解しないでくくくっ!!)

(ふふふ、怖いぜ、マジヤベーぜ、ああ、——オレは今日、殺されるかもしれないねえなあ…………)

(ええ、ええ、わたしを守ってくれたアキラは? 今回もわたしの貞操を守ろうとしているのよねえ…………?) ふっぎけんなっ!! 誰が守って言ったのよ!! 確かにセックスする気なんて最初は無かったけど!

でも仕方ないかなーって思ってたのに!! もう怒ったわ、絶対に——そう、絶対にアンタから頭下げるか告白してくるまでセックスなんてしない!!)

だから、理子がこれから取る行動はアキラとの協調路線ではなく。

「——ねえアキラ? わたし思ったのよ、このままじゃダメなんじゃないかって」

「……………つまり？」

「ほら、日替わりクエストに耐えてポイントゲットするなら、より強い心で居るべきだと思わない？」

「同意するが、強い心って言ってもどうするんだ？」

獲物が食いついた、と彼女はほくそ笑んで。

「せっかくだし、告白の練習しましょ。今みたいに交代で告白して、今のウチに動揺しない強い精神を手に入れるの。———それとも、臆病な童貞のアンタには無理難題だったかしら？」

「は?? やってやろうじゃねえか誰が臆病な童貞だクソ女ツ!! テメエこそ後悔すんなよ! それからそろそろ退いてくれると助かるんですがツ!!」

「あ、ごめん忘れてたわ、あははははーっ」

そうして、突発的に告白の練習が始まったのだった。

クエスト6／ときめきぷらくていす

ベッドから降りた二人は、向かい合って。

「ところで、練習するにしても着替えようぜ。部屋の中は温度が保たれてるけど風邪引くかもだしな」

「え？ 何そんな生ぬるいコト言ってるの?? このままするに決まってるじゃない」

「いや、だがな……」

「アンタはわたしに感謝すべくなのよ、だって——海デートが好きなんでしょ？ 水着のままならそれっぽいし雰囲気出ると思わない？」にまにまと笑う理子に、アキラは頭を抱えたい気持ちだった。

絶対にワザとやっている、雰囲気云々というなら彼女の町デートの格好でも良いではないか。

そうしないという事は。

(嫌がらせかチクシヨウ!! オレを惚れさせてマウント取る気だな!! オレがテメエみたいなヤツの色気に負けると思ってるのか!! 負けるかもしれない気がしてるんだよドチクシヨooooooooooooッ!!)

(ふふん、ま、土下座して頼み込むなら服を変えても良いけど。アンタはそうしないでしょ、勝った、勝ったわこの勝負!!)

(反則だろこの状況……、確かにコイツはウザったいし生意気だし横暴だし、でも思い返せば案外気遣い屋というか家庭的な面もあるし、そもそも何でそんなエロい体に育ってんですかねえ!!)

(ま、アキラが告白しようとしたしは揺らがな——……んん？ ああっ!? わたしも告白されるんじゃないんこれっ!?)

さながらチキンレースの様になってきた告白練習に、二人は頬を赤くしながら睨みあい。

「……………どっちから先だ」

「わたしから、アンタは後よ」

「あッ、テメエ先手を取るつもりかよズリイぞ!!」

「はー?? レディファーストって言葉知らないの？ ああ、それとも

すぎる勘違いしそうだよマジでさあッ!!)

手のひらから伝わる彼女の心臓の鼓動、柔らかさ、密着したからか甘い匂いさえしている気がする。

もしかして、と。

本気でそうなのか、と。

本気でそう思いそうになる、だが忘れてはいけない。

(これは練習、練習なんだ……)

(いつ、言うの、言うのよっ!! 必殺の一撃を言うの! ううつ、練習なんだから、恥ずかしくなんて、ないんだから——)

理子の瞳から目が離せない、思考は彼女の事ばかり。

喉がカラカラに乾く、息をするのすら忘れそうな緊張がアキラに襲いかかる。

彼女もまた、茹だつた思考を必死に振り払い、歯を食いしばって卒倒しそうな意識を保ち。

「……………好き、本当は好きなのアキラ。アンタとこの先もずっと一緒にいたい、アンタとなら幸せになれるし、幸せにしたい、だから——わたしと恋人になってください」

はい、オレも好きだ、愛してる、喉まで出掛かった言葉を必死に飲み込んで。

アキラは抱きしめたい気持ち、必死になって堪えた。

これは嘘だ、練習の告白だ、だからこんな言葉なんて本当はなくて。(嬉しいって、思いそうになるだろうがッ!!)

口を開けば、本気の愛を囁いてしまいそうになる。

理子の事を好きかどうかも分からないのに、心の衝動のままに愛しているとついそうになる。

苦しい、なんて苦しいのだろうか。

(ダメだ、今はッ、……今は、何も言えない)

「……………ね、ねえ、何か……、言いなさいよ、嘘、なんだから、好きなの、嘘だけど、恋人になりたいの、嘘だけど、……………抱きしめて欲しいの、嘘、だけど」

(だからッ、だからさあ——ッ!!)

思考が上手く働かない、嘘と好きを繰り返す彼女の言葉に脳味噌がグチャグチャにバグってしまう。

嘘、これは嘘で練習で、なら。

(オレも……嘘、そうだ、嘘って事なら)

何を言っても良いのではないか、そんな気すらしてくる。

この衝動だって、嘘だと言えば素直に言えるのかもしれない。

そうすれば、そうすれば理子は。

——オレの思いを受け入れてくれるのか？ 嘘なら、抱きしめて良いのか？)

誰かに。

(渡さなくて良いのか、オレじゃない他のヤツに、理子を……)

どうしてこんな時に思い出してしまうのだろう、あの天使の言葉が妙に頭から消えてくれない。

二人は恋人になる事なく、独身のまま終わる。

でもそれは、彼女に恋人が出来ない事を意味しない。

(この先、……理子はオレ以外と恋人になつて)

その可能性があるのだ、目の前の存在が、他の男の手に渡る可能性が、確かにあるのだ。

考えてしまつて、心の中だけでも言葉にしてしまえば、何処からか醜い感情すら沸き上がってしまう。

(オレは……)

これは嘘だから、練習だから、でも。

どうして。

(何でオレは、理子を守ろうつて——)

同意があるならば、彼女を抱いても良いはずだ、セックスしてこの部屋から出て行って良いはずだ。

そうしなかったのは、何故だろうか。

(オレはコイツの事が、大嫌い、だから……)

大嫌いだと、幼い頃からの惰性の言葉が今でも本気で言えるのだろうか。

——気づくな、と。

頭の中の何かが、冷静な部分が囁く。

(ダメ、だ、ダメだダメだダメだ、オレは……理子を守らなきゃいけないだツ)

例えそれが、自分自身からでも。

でも、これは嘘なのだ、これから言うのは練習だから、本当じゃないから。

だから。

「きやつ!? え、ええっ!? いきなりどうしたのよっ!?」

「——好きだ、愛してる理子、お前を離したくない、誰にも渡したくないツ!!」

「っ!? あ、——っ、く、苦しいってアキラ……」

「練習だから、これは嘘だから、だからさ、拒否しないでくれ、抱きしめさせてくれ……」

「……………う、うん、分かったから。だから少し力、緩めてよ……」

次の瞬間、確かに抱きしめる力は弱くなって。

でも代わりに、理子の耳み吐息がかかる。

「理子……オレの、オレだけの理子……、お前がさ、可愛いって本当はずっと思ってたんだ、愛してる、気づかないフリしてたんだ、好きで好きでさ、たまらないんだよ」

「ひゃうっ!? ううっ、耳、囁かないでえ」

「誰にも渡したくない、ずっと側に居てくれ、あの事故の時にさ、お前を守れたってスツゲー嬉しかったんだ、でもお前は可愛いから他の男子とかによく見られてたし、けど急に態度を変えるのがさ、素直になるのが恥ずかしくて、そのまま大嫌いのままでいたんだ……」

「うう……れ、練習よね? 練習なのよね?」

「ああ、これは練習だから、だから——お願いだ、このまま後少しだけ、お前をこうして感じていたい」

「……………練習だもん、だから、少しだけよ」

「ありがとう、愛してる理子——」

ぎゅっと強く抱きしめられて、けれど彼女はそれを拒否する気がおきなかった。

練習だから、これは嘘なのだ、でもどうしようもなく嬉しくて、だから胸がきゅつと痛んで。

「アキラ……………」

「ありがとう、理子」

おずおずと両手を彼の後ろに回し、想いに答える様に抱きしめた。まるで本当の告白のように、恋人のように、二人は抱きしめあつて。

——それと、観察していた者が一人。

（ふおおおおおおおおおっ!? エエやんけっ!! 尊いつ!! 尊みが爆発してるやんけっ!! 来たで来たでエネルギーがバンバン来るでえ!!）

正直な話、二人は初日に結ばれて出て行くと予想していた。

その後で、想いを深めあつていくのだろうと。

だがどうだろうか、この状況の中で二人は少しずつ進んで。

（こりゃあテコ入れせなアカンですな!! もっと尊みが溢れる方向へ!!）

天使のオッサンは使命感に燃えて。

一方で二人は、口数少なくとも恋人のような空気のまま一日を過ごし、仲良く手を繋いで寝た。

——セックスしないと出られない部屋、三日目。

「おはようさんですがなお二人さん!! 気持ちの良い朝で!! 食事の味はどうです? 中々エエでしょ、まあともかく今日は他でもなく、オッサンからの一日限りの新ルールを伝えに来たでえ!! ま、別にペナルティは無いんやけどな? でもポイント交換の品を用意するエネルギーの為に協力したってや!!」

突然現れて、ハイテンションな天使のオッサンに二人は吃驚して何も言えず。

けれど手を繋いだままのアキラと理子に、オッサンは満足そうに微笑んで。

「今日は是非、お二人はお互いの愛称で呼び合ってくれと助かるんや! ほなまたな!!」

「……………えッ?」

「……………はあっ!？」

「愛称で呼ぶ??」

彼らは同時に首を傾げると、目を丸くしてお互いを見つめ合った。

クエスト7／ラブネーム

愛称、そう突然言われても二人は幼い頃から名前呼びだ。

それに、何より。

「……………なあ、どうする?」

「愛称で呼ぶってコト?」

「ペナルティが無いって事は、別にやんなくても良いんじゃないかかって」

「でもエネルギーがどうか言ってたじゃない、今更愛称で呼び合った所で何が変わるワケでもないし、わたしはやっても良いと思うわ」「素直にやるのは何か負けた気がするんだよなあ…………」

アキラとしても、この部屋での生活に関わる事なら協力しても良い気がする。

とはいえ、もしその言葉が本当なら。

「つーかき、やらなかったらオツサンのエネルギー切れで部屋から出られるとかあり得そうじゃね?」

「その前に、例のえっちなガスを使われたらどーすんのよアンタ」

「…………」

「——選択肢がねえじゃねえかツ!」

「そんなに叫ぶコト? 良いじゃん、偶には愛称で呼ぶのも面白そうじゃない?」

「お前がそう言うなら、まあ良いけどさあ…………」

軽い憤りをみせるアキラとは裏腹に、興味を見せる理子。

彼女としては、言葉通りではあったが。

（ぐふふふくく、これは絶好のチャンスかもしれないわっ!! 昨日からなんか良い感じだし、そう、愛称で呼び合えばアキラがわたしにメモメロになる日だって近いかも!!）

（まーた何か企んでやがるなコイツ、でもまあ、…………へへッ、実はそういうのちよつと憧れてたんだよなオレ）

（でも単に愛称をつけるだけじゃ攻め手に欠けるわね、何かこう…………

そう！ バカカップルみたいな感じのを付けあうってのはどーよっ!!」
「——はッ、もしやコイツ、これを利用してオレの事を煽る気だなッ!! 忘れてねえぞ畜生ッ!! ゲームに負けたからって一人称の代わりにド下手童貞って言うように命令されたのはッ!!」

アキラの脳裏に思い浮かぶ屈辱の一週間、オレという代わりにド下手童貞と言わなければならず。

間違えてオレと言ったら、罰としてジュース奢りが発生。

『なあ理子様？ このド下手童貞にお慈悲をくれないか?? センセ達の前でこれ言うのキツイんだけどッ!』

『あははははっ、大受けしてたし良いじゃん、アンタ一生それ使いなさいよっ、ぎやはははははははっ!!』

あの様な悲劇を繰り返してはいけない、ちよつと好みの教育実習生のお姉さんの前で、ド下手童貞という一人称を使わなければならなかったあの悲劇は。

決して、そう断じて繰り返してはならない。

——今こそ、復讐の時だ。

「よし、なら愛称で呼び合おうぜ。但し——お前の愛称はオレが付ける」

「いいわよ、ならコッチも要求して良いのよね？」

「ああ、何でもこいよ」

「じゃあ……………ラブラブなバカカップルな感じの愛称にしましよ。勿論、アキラのはわたしが考える」

「ッ!? て、テメエ!? ——い、良いだろうッ! なら今からシンキングタイムだ!! 十分後には発表してお互いに呼び合うからな!!」
「ええ、楽しみにしてる」

理子の提案したルールに、アキラは戦慄しながら愛称を考え始めた。

慎重に決めなければならぬ、一歩間違えれば悲劇が繰り返されるのだから。

（くッ、まさかラブラブなバカカップル風だなんて条件を付けてくるとは!! 恐ろしい奴めッ、これじゃあ変な名前を付けて復讐する事が難

しくなったじゃねえかッ!!)

ルールに反すれば、あの屈辱の悲劇は繰り返されるだろう。

だがルール通りに愛称を付ければ「アンタってそーゆるーのが好きなんだあ……へえく〜つ」と、ニヤニヤしながら笑って来て。

この部屋から出た後も、それをネタにイジられる事は想像に難くない。

(どうするッ、どうすれば良いッ!! どうやったら理子の裏をかい復讐できるッ! ——いや違う、そうじゃない、裏じゃなくて攻めるは表ッ!!)

そうだ、奇をてらうのではなく王道を行くべき。

(コイツはオレが当たり差し障りの無い、無難な愛称を付けてお茶を濁すと考えている筈だッ、だってそうだ、アイツだってこれ以上へんな空気になって処女を奪われるのはごめんの筈だッ)

相手の嫌がる事をする、ああ、とても良い言葉であるとアキラは頷いた。

(なら………、敢えて攻める、こっぴどかしい愛称をつけてバカッブルっぽく振る舞う、これしかないッ!!)

(——って、アキラならそう考えてる筈よ、ええ、わたしなら分かるっ! ふふん、アンタの考えなんてお見通しなのよ!!)

対する理子は、幼馴染みという付き合いの長さからアキラの思考経路を正しく予測する。

(ふっ、今日のわたしに敗北は無いわっ!! なんとってアンタが好きそーな呼び方とか、ベッドの下に隠したエロ本から丸わかりなのよ!!)

彼の琴線に触れるツボを把握してる上に、彼女としてはアキラが頼み込むなら処女をあげる事に躊躇いは無い。

——つまり、前提条件が違うのだ。

守ろうとするアキラと、籠絡しようとしている理子。

弱点を知らぬアキラに、弱点を知っている理子。

(覚悟しなさいアキラ、——アンタはわたしに一方的にメロメロになるの、だってわたしは弱点知ってるし? アンタの頭じゃ効果的な愛

称なんてつけられないわよねえっ!!)

(……………覚悟を決めたぜ、ああ、例えオレの精神耐久度がガリガリ削れていっても——理子がオレにセックスしてくれって言ってくるぐらいにラブラブ・バカツプルを演じてやる)

そして十分後、戦意漲る二人はベッドの上で無言で笑いあう。

直後、先に動いたのはアキラだ。

理子の右手と己の左手を恋人つなぎに、絶対に逃がさないという強い決意でもって。

「——ん」

「っ!? はっ、はああああああああああああああっ!? アキラあっ!? い、今アンタなにしたのよっ!?」

「何って、お前の手の甲にキスしただけだが?」

「何でそうなるのよっ!? 愛称で呼び合うってのは何処へ行ったのっ!?」

「良く聞け、——ん」

「何でまたキスしたのよっ!? 今度は髪につ!!」

突如としてキス魔になったアキラに、理子は愛称で呼ぶどころではなく。

彼は慌てふためく彼女に、うつとりとした顔で告げた。

「ごめんな、お前に似合う愛称が思いつかなかったんだ。だから……愛称で呼ぶ代わりにキスしようってな、その方がバカツプルっぽいだろ?」

「う……う……う……っ!!」

「なあ、——ん、お前の望み通りだぞ……ん、嬉しくないのか?」

「やっ、やあっ、もおっ!! 普段のアンタは何処へ行ったのよ!! どころから覚えてきたのよお!!」

額に、腕に、耳に、軽く押しつけられるアキラの唇。

その少し堅い感触に、理子の心臓はドキドキと早鐘を打ち思考が定まらない。

頭が茹だつてしまう感覚、それが不快でないのがなお悪い。

(罨っ、これは罨よっ!! くそっ、こんな返しなんて予想してないわ

よお!! うううう、どーすれば反撃出来るってのよ、アキラを……直視、出来ないじゃない……(……)

勘違いしそうになる、自分たちが本当にラブラブ・バカップルで。このキスの嵐に、キスで返しても良いのだと思いきや……

そんなのは、そんな事をしてしまえば。

(だ、ダメなの、好きって言うのは……コイツが先なんだから、わたしへアキラが好きって言わなきゃいけないんだから——)

耳まで真っ赤になっているのを自覚してしまう、繋がれた手を振りほどけば良いのに。

残りの手も繋ぎたくなっていく、口元が笑ってしまう。

こんな表情なんて見せられないと、理子は彼の胸に顔を埋めて。

(ツ!!? こ、コイツ!! 防御態勢に入りやがった!! くそツ、良い感じに攻めてる所だったのにツ!!)

(くっ、顔を見られなくなったのは良いけど……コイツの体臭……か、考えないのわたし!! 考えるとドツボにハマるからあ!!)

(どうする、このままでも耳や髪にキスは出来つけど。同じ事の繰り返しは理子も慣れるだろ、あ……抱きしめるか、いや、いつその事、押し倒して……)

(このままだとジリ貧よ、攻めなきゃ負ける、で、でもこんな顔見せられない、こんな、こんな恋する乙女みたいな顔なんて——うん?) はて、と理子の脳に閃きがはしった。

恐らく己は恋する乙女の顔をしているだろう、普通の状態であったら絶対に見せられない。

だが今は、アキラに意識させるのが最も効果的な手段ではないだろうか。

——ならば。

「は、恥ずかしいから、ね? もう止めよ、……あーくん」

「あーく……ツ、く……ツ!!」

(よしっ、効果アリ!!)

(なんつー甘い声だしてんだよコンニャロオツ!! は? はあツ!! 耳がとけそうになったんだが?? つか卑怯じゃね?? おっぱい押し

つけながら潤んだ瞳であーくんとかさあああああッ!!)

思わず硬直したアキラに、理子はここぞとばかりに甘える。

その胸板に頬をすりすりと、うっとりとした顔で。

「はあ……前から思ってたけど、あーくんって良いからだしてるわよね、実は結構好みだったの」

「ッ!? あ、ッ、そ、そうだったのかあッ!?」

「ふふっ、なーにその変な声、あーくんらしくない。もつと強く抱きしめて、カッコいい声で口説いてほしいな」

「おッ、お前ッ、お前なあッ!! それ、それえッ!!」

なんだ、なんなのだ、本当に何なのだろうか。

理子が、いつも喧嘩腰の理子が、何の躊躇いもなく甘えて愛おしそうに愛称で呼んでいるだけだと言うのに。

アキラの感情は、ぐちゃぐちゃにかき回された様に不安定になる。

（くそッ、くそくそくそッ、勘違いしそうになるだろバカッ!! なんてさあ、なんでこんなに——）

嬉しいと、幸せだと思ってしまうのだろう。

こんな時間がずっと続けばいい、今、人生で一番幸せな気がする。だけど。

（嗚呼、——ダメだ、これはダメだぜ、理子、理子、理子………オレは、オレはお前を）

勘違い、しても良いのだろうか。

勘違いを、本当にしても良いのだろうか。

勘違いでないのなら、どんなに幸せな事か。

（——お前は、オレ以外にもいつかこんな顔をするつてのかい？）

ゆらりと黒い感情が沸き上がる、幸せだからこそ、不安になる。

いつか、いつか彼女が他の男の名をその唇で甘く呼ぶのかもしれない。い。

アキラの手を、すり抜けていってしまうのかもしれない。

（夢の様に幸せで、愛おしくて、——本当に夢だったら?）

目が覚めたら、自分の部屋でアキラは起きて。

横には寝落ちした理子がいる、そして再び喧嘩腰の日々が始まるのだ。

こんな幸せな感情が、無かった事になって。

(……どうすれば、これが夢じゃねえって確信できるんだ？ どうすりやさ、理子もおれの事が好きだって確信出来るんだ？ コイツが、オレ以外を好きにならないって、どうしたら信じられるんだ？)

分からない、アキラには何一つ確信が持てない。

だって理子はこんなにも魅力的で、対して己には何があるのだろうか。

彼が出来ることと言えば、体を張って守る事だけ。

(守って、コイツが無事で嬉しくて、コイツが傷つくのが嫌で、——それで？ 今度はオレ自身から理子を守るのか？)

守り抜けば、繋いだ手から離れてしまってもいいかもしれないのに。本当に守らなければいけないのか、どうして、何のために。

「……………嫌、だ」

「あーくん……？ その、ちよつと痛いわよ？」

「嫌だ、——嫌だッ、理子ッ、オレはお前を離したくないッ!!」

口に出してしまえば、火に油が注がれるように一気に燃え上がってしまう。

誰にも渡したくない、誰にも見せたくない、誰にも触れさせたくない。

理子には己だけが居ればいい、理子の声を聞くのは己だけでいい、理子が声を聞くのは己の声だけでいい。

——どこまで二人つきりで、愛し愛され。

「……………アキ、ラ？」

とさつと軽い音がした、理子がアキラに押し倒されたのだ。

「え、あ、つ、あ、アキラ？ 目が、目がね、怖いんだけど……」

ギラギラと獣欲に輝く、そして愛欲に支配されたアキラの瞳。掴まれた手首は痛く、ジクジクと熱を理子に伝える。

「ね、ねえ……何か言つてよ、冗談、でしょ？ やめて、やめてよ、煽つたのは謝るから、そんな、そんな——」

まさか、本当に、今のアキラの気配は尋常ではない。

何かに傷ついたような顔をして、でも口元は嗜虐心を感じさせるように歪み。

瞳だけが、愛を伝えていて。

——日に焼けた手が、間違いなく理子の胸を掴んだ。

「——いやあっ!!」

その瞬間、パンと乾いた音がしてアキラは頬に痛みを感じた。

「あ」

酩酊していた様な感覚から一気に引き戻される、理子に平手打ちをされたのだ。

彼女は裏切られたような顔で、目尻に涙を浮かべながら睨んでおり。

(お、オレは……今、コイツに何を——ツ!?)

(わたし、え、あれ? なんぞ今、アキラを拒否って……)

そうなのでも良いかもと、心の何処かで確かに思っていた筈なのに。

でも、怖くて。

「ごめんごめん——」

「——ごめん理子、ちょっとシャワー浴びて頭冷やしてくる」

逃げ出したアキラの背中を捕まえようとした彼女の手は、服の裾すら掴めず空を切った。

クエスト8 / マインド・メイズ

(マジでオレ何やってんだよおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおッ!?)

冷たいシャワーを浴びながら、頭を抱えてアキラは盛大に悶えた。
だつてそうだろう、くだらない復讐なんて考えた挙げ句に無言で押し倒そうとして。

泣きながらビンタされて拒絶されたとか、一生残る黒歴史だし何より。

(どうしようッ、ああああああッ、マジでどうしよう!! 謝んなきゃならねえけどさあッ!! スツゲー顔を会わせ辛いんだけどおッ!!
どんな顔して謝るんだよッ、今すぐ家に帰りてえよおおおおおおお
おおお、オレはとんだ勘違い野郎じゃねえかよおおおおおおお
お!!)

穴があつたら入りたいというレベルじゃない、何となく受け入れてくれるもんだよ思っていた。

理子だつて己の事を、何だかんだ言つて憎からず思っているのだと。

そう思つて、幼馴染みを越えた関係へと一歩踏み出した先がこれだ。

(そりやあさあ、色んな感情に流されたとはいえさあ、オレが全面的に悪いんだけどもッ!! 謝る前にこっちが罪悪感と羞恥心で死ぬッ!!
なんでオレは勘違いしてしまったんだッ!!)

頬の痛みは残っている、あの衝撃を、涙目になった理子の表情が目
に焼き付いて離れない。

これからどうすれば良いのだ、セックスしないと出られないのに。
そのセックスに至る前に、本気で拒まれてしまった。

(……………あー、そーいや飯の為にポイント稼がないとダメだつ
たんだ。ぬおおおおお、でもそうすると理子と色んな距離が近くなり
そんな感じになるしいいいいいい!!)

今のアキラは自分が一番怖い、さっきの様に何かを踏み間違えた瞬間。

理子を押し倒して、無理強いしてしまうかもしれない。
守りたい相手を、傷つけてしまうかもしれない。

(理子に……………嫌われたよなあ、絶対……………あああああああああッ、オレはこの先、どうやって生きていけば良いんだあああああああああッ!!)

時は既に遅し、覆水盆に返らず、後で悔いと書くから後悔なのだ。
アキラは理子に嫌われた、幼馴染みとしての縁さえ切られる事をし
てしまった。

——詰んでいるのでは、と冷たいシャワーを浴びたまま動けず。

(きやーーーーっ、い、今のそういう雰囲気だったわよねっ!? 大人の階段昇る的な!! うあああああああああッ、なんでビンタなんかしちやったのよおおおおおおおッ!!)

一方で理子も、絶賛後悔中。

だってそうだ、この部屋から出るには必要な事であつたし。

何より、口ではともかく憎からず思っている相手だ。

(惜しかった……………で、良かったのかしら……………ううっ、で、でもアキラ
だって悪いんだからっ!! あ、あんな無理矢理っぽく……………、こう、せ
めて好きだとか、愛していると、一言あれば……………、いやいやいやっ
!! そんな言葉一つで抱かれるほどチョロい女じゃないんだからね
!!)

思わず拒否してしまったのは、言葉が無かつたから。

それは確かであるが、それ以上に。

(うう……………、こんなに初体験が緊張するなんて知らなかつたわよお……………)

つまりは、そうである。

こんな部屋に来なくとも、いつかはそうなつてたかもしれない。

いつかは、誰かとセックスしていた筈だ。

(……………でも、アキラじゃないと……………アキラが良いの、うん、アキラだけ、わたしは……………)

理子の脳裏に、天使のオツサンの言葉が呼び起こされる。

彼と己は恋人にならずに終える確率が高い、何を、どんな根拠をもって。

確かに天使という存在は常識を遙かに越えたモノで、この部屋こそがその証である。

(……………何となく、そうなるかもって。納得しちゃったのよ)

自覚がある、己が素直な性格では無い事を。

知っている、こちらから望まないとかキラは手を出してこないと。

思っていた、幼馴染みの気楽な関係がずっと続けばいいと。

(だから、理由があるなら、そういう関係になってもしかたないって……………ううっ、でもでももお!!)

知らなかった、己が。

(えっちなコトにこんな耐性がないとかさあつ!! そんなの知らなかったわよ!! どうして恥ずかしいのよっ、ううっ、望んでるのに恥ずかしくてしかたないじゃないのっ!!)

だからきつと、言葉が欲しいとムードが欲しいと思ってしまったのだろう。

素直じゃなくて、性的なことに耐性が薄い自分が。

彼と、幼馴染み以上の関係になる為に。

(どうすれば良いってのよ……………、ちよつと強引にさえただけで押し倒されちゃうのに、いざってなると恥ずかしくて何か怖くて拒否しちゃうのに)

顔を上げて、シャワー室に顔を向ける。

するとそこには、水に濡れ続けている彼の裸体があった。

背中を向けているが故に顔は見れない、でも。

(……………傷)

大きく醜く、そして大切な傷。

彼が生き残った証であり、理子が助けられた証。

大切な大切な、彼女だけの絆。

(わたしは…………アキラに何が出来るの?)

長い付き合いだ、この部屋に来てからお互いに意識しあっているの

なんて敏感に気づいている。

彼が己に幼馴染み以上の、男女の好意を、そしてこの体に欲情しているのは理解している。

それを、必死に我慢しようとしている事も。

(……………なんで、アンタは我慢してるのよ)

確かに理子は拒否をした、だがその後でキスでもされたら流される事を受け入れたと思う。

全てが終わってから文句を言って、次の関係に進めたかもしれない。

でも、そうならなかった。

(わたしが、アンタに対して出来るコト……………)

何かしなければ、否、してあげたい。

思いのままに欲望をぶつけても良い、このセックスしないと出れない部屋の中で。

それでも、理子を守ろうとしているアキラに。

(——うしっ、取りあえず謝る!! 話はそれからよ!!)

きつと己は、全てを知った気でいたのだ。

長い付き合いだから、何でも知っているなんて思い上がっていた。
(わたしはまだ、アキラを知らないの)

そして、きつと。

(アキラにも……………わたしを知って貰うわ)

それは、彼も同じだと思うから。

理子はベッドから降りると。勢いよくダボTシャツと短パンを脱ぎ捨て全裸になる。

向かう先は、シャワー室。

(女は度胸!! 当たって砕けろよ!!)

ひたひたと迫る足音に気づかぬまま、アキラはシャワーに打たれ続けて。

(謝らなねえと……………そうだ、オレはちゃんと謝らないといけねえんだ)

いつまでもウダウダしていられない、どんなに不格好でも頭を下げなければ始まらない。

(……………その前に、少し暖まって謝罪の言葉を考えとこう)

アキラがシャワーを冷水から温水に切り替え、湯船を満たすスイッチを押したその時だった。

「はっ、入るわよアキラ!!」

「——ギャツ!? お、おまツ、お前なにしてんのツ!? か、隠して、隠しせよバカ野郎!!」

声に振り向くと全裸の理子が、慌てて目を閉じて後ろを向くと。

「ギャって何よ、ギャって、そんなにわたしの体が見たくないワケ？」

「さつきは無言で犯そうとした癖に?」

「そ、そそそそそツ、それに関しては後で謝るからツ、出て行けよツ、何で入ってきたんだよツ!!」

「何でって、——わたしもさ、ちよつと謝りたいと思ったのよ。だから……………久しぶりにさ、昔みたいと一緒にお風呂に入らない?」

理子の言葉に、アキラは思わず硬直した。

クエスト9／イン・ザ・バスルーム

「ああ、もしかしてお風呂入れ始めたばかり？　なら背中でも流して上げるわ」

「い、いや理子ッ!?　オレまだ良いって言ってねえぞッ!?」

「アンタに拒否権なんてありません、——ま、背中だけなんだから大人しく洗われなさいって」

「……………それじゃあ、オレがお前の背中を洗うとでも?」

凹の形をしている風呂椅子に、アキラは背中を押され座らされ。

「ええ、背中だけよ」

「…………お前、嫌がったじゃないか。なのに——」

「……………少し、恥ずかしかっただけよ。それを含めてゆっくり話そうと思ったの」

「そう、か…………、そうかあ…………」

「ええ、そうよ」

嫌われた訳ではない、その事実がアキラの心を瞬時に上向きにした。

そして同時に期待してしまう、何かこう、そういう感じになるのかと。

しかし。

(いやでもやっぱヤベーだろッ!!　何で一緒にお風呂なんだよ!!　しかも洗いつこするんだよッ!!　は?　何?　オレ試されてる?　何か試されてんのかッ!?)

(ううううううううっ、い、勢いでいっちゃったけど!!　何か近くで背中見てるだけなのにメツチャ恥ずいんだけど!!)

羞恥心で手が止まりそうになる、だが止まる訳にはいかない。

理子はアキラの前にあるスポンジとボディークリームを取ろうと、身を乗り出して手を伸ばす。

横からは取れない、彼の目の前には鏡があるのだ。

(いや鏡に写るのを避けたいのは分かるけどさああああああああああ

あッ!! おっぱい直当てはしちやいけねえだろルール違反にも程があるだろうがッ!!)

どうして冷静で居られるか、どうしてシャワーと鏡はセットになっているのか。

世界の理不尽さを彼は恨んだが、そんな事より背中中の感触に意識が持って行かれる。

正直な話、股間のスタンドアップを防ぐので精一杯だ。

「……………こうやってみると、アンタって普通に男らしい体してるのね」

「ふ、普通って何だよ……………」

「何? その上擦った声、もしかして痛かった?」

「い、いやあ!! お前、オレの背中を洗うの上手いよな!! 心地良いって言うか?? うーんオレは幸せ者だなあ!!」

普通に洗われるだけなら、まだ動揺は少なかっただろう。

だが、その大きさ故にどうしても当たる彼女の胸。

何故か、背中中の傷痕をなぞる指先。

(理子にヘンな意図はないって分かるけどさあ!! もうちよつと青少年の股間を思いやってくれねえかなあッ!!)

(昔はわたしの方が背が高かったのに…………いつの間にかこんなに追い越されちゃったわね)

(なんで今、そんな色っぽく溜息ついたんだッ!? わかんねえッ、女心わかんねえよおッ!!)

(ばーか、ばーか、アキラのばーか)

ここで衝動に流されてしまえば十中八九、先程の二の舞だ。

アキラは半泣きになって、色んな物を必死に堪えて。

——優しくスポンジで洗われる感覚が、妙にくすぐったい。

「…………ま、こんなもんね。髪も洗ってあげようか?」

「そこまでやったら、お前が風邪を引くかもしれないだろ。次はお前の番だ」

「それもそっか、——ならお願い」

平然を装ったつもりで、思いつき顔を反らしながらアキラは椅子

(今はこの背中を洗う事だけに集中するんだ、そう、邪念なんて振り払えっ!!)

(なんかスツゴい見てるうっ!? 鬼の様にガン見してるっ!? も、もしかしして——アンタって背中フェチだったのっ!?)

彼女は急浮上する疑惑に困惑しながら、無言のまま。

何とも言えぬ雰囲気の中で、理子の背中はアキラの手で磨かれて。

泡を流し終わった後、二人は一緒に湯船に浸かった。

(うぐぐツ、理子が前を向いてて助かった様な、残念な様な………でもそれはそれとして、なんかうなじがエロい!!)

(ひゃうっ!? ……う~~~~、お、お尻になんか堅いのがあたってるう……。それにアキラってば心なしか鼻息荒いし……)

押さえ切れぬ興奮と、お湯の暖かさ。

お互いの体温が混じり合う感覚、鼓動の音さえも一緒になる錯覚を二人は覚え。

「……」

無言、何から話せばいい、何を言えばいい。

言葉は考えていた筈なのに、不思議と出てこない。

(あ……、なんか落ち着くなあ……、でも後ろからとはいえ抱き抱える形になってるからエロい気分が止まらねえ、っーかさ、おっぱいつてマジで浮くんだなあ……)

巨乳は水に浮くとは本当の話であったか、とアキラが関心する中。

理子と言え、突き刺さる視線にくらくらと目眩にいた何かを感じて。

(うぎやおおおおおおおおつ、み、見ないでよつ、なんでそんなに見てんよ変態っ!! これだから男は~~~~っ!! こんな状況で見るなって言う方がどうかしてるけども!! ああもうっ、どうかしてるのよつ、わたしもっ!! 欲望まみれの視線が気持ち良いなんて——っ!!)

どうして幼い頃は、あんなに無邪気に一緒に入浴できていたのか。

今となっては不思議でしかないし、背面全体に感じる男の体の堅さは、気恥ずかしさと頼もしさしかない。

早く、早く何かを言わなければ、今度こそ言葉がないまま雰囲気に流されてしまうかもしれない。

「……」 「……」

けれども無言は続く、お互いの吐息だけが浴室に響きわたる。

しかし一方で、興奮や混乱は少しずつ落ち着いていつて。

（——嗚呼、ダメだ、これはマジでダメだ、だつてさ、………こんなにも理子とこうしているのが心地良いなんて）

（何か言わなきゃつて思うのに………、不思議、こんなに静かな気持ちになれるなんて）

とくん、とくん、早鐘を打っていた鼓動が穏やかになる。

アキラは彼女の腹部に手を回し軽く抱きしめ、理子は彼に心おきなくもたれ掛かる。

無言は続き、けれど焦りも不快さも無い。

（………思えば、ここに来てから一番リラックスしてる気がするぜ）
（なんか久々に、ゆっくりしてる気分……）

湯に浸かるといふ行為が、お互いの体温を混じり合わせる一体感を呼び、静寂が心を鎮めていく。

とても落ち着いている一時、心地よい暖かさに全てが溶けていくような感覚。

やがて、——暖かな静寂を先に破つたのはアキラだった。

「さつきはごめん」

「いいの、こつちも悪かったわ……ごめん」

「でも、先に暴走したのはこつちだ」

「それを言うなら、わたしだって暴走してたのよ。……だつて、アンタとならつて思ったのに。セックスするのがあんなに恥ずかしいだなんて……思わなかったのよ」

少しぶつきらぼうな声色に、その指し示す内容にアキラは嗚呼、と小さく声を漏らした。

そこには安堵があった、嬉しさがあった、だつてそうだ。

（理子は……オレを拒絶したんじゃないかな……）

身勝手な欲望を受け入れても良いと、もしかしたら彼の気持ちです

ら伝わっていたのかもしれない。

それは、何より嬉しい事だ。

「ごめん理子、オレはお前を守ろうって、でも……お前が誰かに盗られるぐらいなら……バカだな、お前の気持ちを何も考えてなかった、天使のオッサンが言っただ事は正しいんだって今なら納得できる」

このままだと恋人にならず、独身で終わる。

それはきつと、先程の様な事が起こってそのまますれ違ってしまうからだ。

もし逃げ場があるならアキラは理子を避けてしまおう、だから今までも幼馴染みから抜け出せなくて。

——同じ事を、彼女も思う。

「謝らなきゃいけないのはわたしも、……ずつとね、大嫌いだったの、あの事故でアンタに守られてからずっと。死にかけて癪にヘラヘラ笑って、無事でよかったって笑ったアンタにわたしは何も出来なかった……今も何も返せていないのよ」

本当に大嫌いな相手は、理子自身だった。

それに気づかないフリをして、今日まで来てしまった。

きつと己はこの部屋にこなければ、自分に向き合わずに幼馴染みという関係に甘んじていた。

「もう、アンタから一方的に守られるのは嫌なのよ。それに、どんな理由があってもアンタの気持ちを言葉にしてくれないと、——わたしの気持ち言葉にならないと、セックスしたくない」

好きとも、愛してるとも言わなかった。

それにはまだ少しだけ、ほんの少しだけ早い気がして。

「ま、恥ずかしいってのもホントよ。自分がこんなにエロ耐性が低いって知らなかったのよ」

自嘲する様に笑った理子が、アキラにとっても愛おしく思えた。

今なら素直になれる、心が口に出る。

「……………オレはさ、こんなに自分がお前を思ってるなんて知らなかったんだ。ガキの頃からの大嫌いをずっと引きずってさ、でも何も

言わなくてもずつと側に居てくれるって無意識に思ってたんだ」

きつと、大嫌いななんて言葉はあの事故の時に。

理子を暴走した車から守って大怪我したあの時には既に、他の言葉に変わっていたのだ。

その言葉は今に至るまでに思いを強めて、でも知らないフリをしていた。

「お前と幼馴染み以上の関係になるのが、……怖かったんだと思う、お前を守りたくて、傷つけるのが怖くて、でも一番は——おれ自身が傷つきたくなかったんだ、理子に拒否されるのが怖かったんだ」

幼馴染みという関係は心地よくて、友達以上で、時に恋人同然で、でも恋人でも家族でもない。

そんなぬるま湯の浸かっていたままなら、傷つかないと思って。

だから今も、好きとも愛してるとも言えない。

「……………結局さ、わたしもアンタも臆病だったのよ」

「このままで良いって、本気でそう思ってた。……おれもお前も」

「これはきつと、正しく天使がくれたチャンスなのね。……わたし達が幼馴染みという枠を踏み越えるかどうかの」

なら、お互いが抱える問題は。

「……………おれは臆病で、お前は恥ずかしい」

「そう、だからセックスしようとしても上手くいかない」

「じゃあどうする？ セックスしないまま限界まで耐えてみるか？」

「思ってもないコト言わないの、——これはわたしとアンタの問題なんだから、一緒に慣れて行きましょ新しい関係へとさ」

「慣れるって、どうするんだよ。……おれの気持ちはきつと重いぞ？」

「そんなの分かっているわよ、居もしないわたしの男を幻視して嫉妬するぐらいなもの」

ふう、と理子は微笑んだ。

彼との関係を、踏み出す決意を込めて。

「それも含めて慣れるのよ、わたしもアンタも。だから……わたしの恥ずかしさも一緒に慣れなさい、一緒に考えて乗り越えるの」

「……………理子——っ」

アキラは思わず涙がこぼれそうになった、受け入れて、一緒に歩いてくれる。

だから、決心した。

思いは同じ、幼馴染みという関係から一歩踏み出す為に。

「絶対にオレから言うから、それまで待つてくれ理子、オレは絶対……お前の気持ちを無視して襲わない、セックスなんてしない、幼馴染み以上の関係でお前と一緒に居たいから——ッ!!」

「アキラ……うん、わたしも、待つてるから、だからセックスしない、アンタが守ってくれるようにわたしも守るから」

今、二人の気持ちは結ばれた。

恋人としてではない、でも幼馴染み以上の関係として結ばれた。

目には見えない気持ちだが、心が、暖かくなる。

(ああ、何か少しもつたいたい気がしてきたわ、こうして一緒にお風呂入ってるだけなんて……)

(うわああああああああああ、幸せええええええええええええええええええッ!! オレ!! 超幸せだぜ!! あー、この世にこんな幸せがあるのか? これ恋人になったら幸せすぎて死ぬんじゃねえかオレ??)(うーん、何をしようかしら。今度は髪を洗いつこする? 違う気がするわ、そうねえ、思い出に残りそうな何か、そう、ならまだしてないコトで、セックスにならないコトは——)

(こうしてるだけで超幸せ……、のぼせる寸前までこうしてる……ああ、理子が良い女すぎてオレの心が爆発するぜえ……!!)

アキラが幸せを満喫しているその時であった、理子は振り返ると彼の首に腕を回し。

「——んっ、えへへへ」

「……………んんんッ!? お、お前今ッ!?」

「キス……しちゃった、ね、ね、今日はキスしましょうよ、唇はナシ、アンタ暴走しそうだからね。でも——慣れる為にもさ、色んな所をキスしてみない?」

「~~~~ッ!? 理子ッ!? き、ききききキスッ!」

脳味噌が一気にピンク色に染まる、ガチンと体が固くなる。

キス、キスして良いと、しかも向こうもキスするつもりで。

アキラは答えを口に出す前に、真つ赤な顔で歯を食いしばり。

「ん、——……………いいぜ、キスすつぞ。でも風呂あがって服着てからにしねえか？ 今すぐだと、その……………なんだ？ 暴走しちまうから」
「……………暴走？ つ!? う、うんっ!! そ、そうねっ!? 暴走しちやダメだもんね!! わたし先に上がるからっ!!」

キスされた前髪を両手で押さえながら、下半身に当たるアキラの特に固い部分に理子は動揺し。

何に対して真つ赤になっているのかはともあれ、耳まで羞恥の色に染めて慌てて出て行く。

彼はしばらくの間、立ち上がる事も出来ず。

「……………くそッ、もう大嫌いなんで言えないじゃねーか、こうなったらキスマークつけてやる」

その後、二人はお互いの服で隠れない部分にキスマークを残す遊びをして。

寝る時はベッドの中で抱き合つて、朝まで熟睡した。

——セックスしないと出れない部屋・四日目。

起床した二人がタブレットで保有ポイントを確認すると、そこには。

「……………は？ いやちよつと待った、なんでこんなにポイント入ってるんだ??」

「一気に1000ポイントっ!? えっ!? いったい何でっ!?」

昨日の倍以上のポイントに、仲良く首を傾げたのであった。

クエスト100／ポイント交換

ベッドの上で向き合って座る二人、それぞれが何度数えなおしても1000ポイントの表示が変わる事はなく。

いったい何が原因で、こんなにポイントが増えているのだろうか。

「えっと、どれだ？ どっかで内訳の表示出来たよな

……」

「あつ、ここっつ、このボタンじゃない？」

「ああコレか、……何々？ 日替わりクエスト報酬100ポイント、追加で100ポイント、——なあ理子、昨日の朝の時点で残ってたポイントってどんくらいだったっけか？」

「確か、6ポイントぐらいだったけど………はっ!? ちよっ、ちよっと待ったアキラ!! わたし達、昨日は日替わりクエストしてないわよっ!?!」

「うえッ!? そうだったか?? 日替わりクエストをしてない………??」

あれ? と考え込むアキラ、言われてみれば日替わりクエストをした覚えがない。

愛称で呼ぶ、というのが全ての発端ではあったが。

あれはクエストではなく、天使のオッサンのお願いだ。

「マジか……、そもそもしてねえじゃん。え? なんでクリア扱いになってる訳だ??」

「もしかして、何かの間違いで後からペナルティが来る可能性が………っ!?!」

「はあッ!? それヤベーじゃねえかつ!!」

例の超強力・一発必中子作り用催淫ガスが、とうとう使われてしまうのか。

二人が戦々恐々となる中、メールが届き。

『やあやあ、オッサンやでえ!! 昨日はホンマ尊いモン見せてもろて……オッサン感激やで!! 尊みエネルギー満タンになってもうたが

な、ガハハハ!! お礼と言っちゃなんですか？ 昨日今日の日替わりクエストはクリア扱いで、オッサンからのボーナスも含めてポイント振り込んでおいたさかい。有意義に交換してくれなー。追伸、交換の品で一番人気なのはベビー用品ですわ』

ほな、また、と締めくくられた文面を読み終えた後。

アキラと理子は、思わずお互いの顔を見て。

「はあくくくく、驚かすなよお……………」

「まったくよ…………冷や冷やしたじゃない…………」

どつと疲れた気分である、ぐったりとした二人はそのままベッドに寝ころび。

天井をぼやつと見上げながら、ほう、とため息。

危機はさった、そして手元には大量のポイントが。

「……………これだけあれば」

「ええ、これだけあれば…………」

双方、ニマリと笑い。

どうやら意見は一致したようだ、ここから先の答えなど一つしかない。

「持久戦用の装備を買い込むぞ!!」

「ぱあーつと豪華に使いましょう!!」

「…………」

「ちよと待て、例のガス対策とか他にも色々と備えが必要だろ」

「は？ 人生を生きていく上で大切なのは娯楽なんですけど？ 今の

ウチにゲームを買い込むべきでしょ？」

ガバツと起きた二人、早速火花を散らしあつて。

「娯楽も必要だが却下だ、却下、この部屋を生き抜く為の装備が必要だろツ!!」

「バツカねえアンタって、どーせそんなモノはクソ高いって相場が決まってるのよっ！ なら今だけでも楽しくするってもんが道理でしょがー!」

「は？ やんのか？ おうコラやんのか？」

「はー、これだからアキラは野蛮なのよ。もっとボードゲームとかし

て頭使ったら?」

アキラも娯楽が必要なことは理解している、そして理子も同じく備えが必要なのは分かる。

だが。

(コイツの意見を飲むのは負けた気がする!!)

である。

バチバチと火花を散らす二人、いつもならゲームで勝敗を付ける所だが。

(隙を見せちゃいけない、コイツは勝負を決めるゲームだけを買うと見せかけて大量購入するヤツだ)

(フン、わたしの隙を突いてタブレットを独占する。アンタはそれを狙ってくる)

(理子もオレも狙いはタブレットだ、先に手にした方が勝つ、——だから、タブレット以外を狙う!!)

(アキラは絶対に隙を見せない、そしてタブレットとは別方向から狙ってくるわ、なら——それを利用するまでよッ!!)

お互いを知り尽くしている故に、早期決戦を選んだアキラと理子。

先に動いたのはアキラ、彼はフツと小馬鹿にした笑みを浮かべると。

どうぞ、と言わんばかりにタブレットを指さして。

「——先に使えよ、食事のポイントを残すなら好きだけ使って良いぜ」

「は? 何? ……ああ、わたしに負けるのが嫌だから譲ると、あら〜、ごめんなさいねえアキラ。いえ、負け犬ちゃん、ぷぷぷぷぷぷ!!」

「何とでも言えよ理子、けどこれだけは教えておいてやろう」

「へえ、負け犬の遠吠えを聞いてあげようじゃない」

「オレは——自己目標を達成したぞ」

「っ!? そ、そんなっ!? 嘘よっ!!」

予想外の言葉に理子は動揺した、自己目標の達成、それは高ポイントの入手以外にも意味がある。

(くっ、もしそれがホントなら——アキラは天使に何でも一つ、お願いを聞いて貰える権利を持つ!!)

(おっしブラフに引つかかったな? ああ、そうだぜ、お前ならアレを読んでいるって信じたぜ)

(やっぱり見逃してなかったわねコイツ、自己目標のページの隅に小さく書いてあったヤツ、……ちっ、迂闊だったわ、計算に入れておくべきだったっ!!)

(相手の自己目標が確認できない以上、アイツは真偽が確認出来ない。ははッ、天使のオツサンが具体的な増加ポイントの内訳を書いてなくて助かったぜ!!)

理子もこれがアキラのブラフだと理解している、だが可能性が少しでもあるなら。

タブレットでゲームを爆買した瞬間、どの様な行動に出るか想像に難くない。

『自己目標を達成した者には、大量のポイントと共に専属天使に願いを一つだけ叶えてもらう権利を得る』

もし、今日の1000ポイントの中にその大量のポイントが混じっていたら。

彼女はアキラの読み通りに、その可能性を思いついてしまい。

手が止まる、タブレットへ延ばしかけた手を引っ込める。

「……………っ、う、く——っ!」

「ほらどうした? 使えよ、遠慮なくゲームでも何でも交換しろよ。

ああ、そうだちなみにオレの願いはな、——お前をオレの言いなり奴隷にする事だぜッ! ははははははははッ!! それが怖くなければタブレットを手にするといいいぜえッ!!」

(こ、コイツ~~~~っ!!)

理子はふるふると震えながら、ギロつとアキラを睨みつけた。

ブラフだ、絶対にブラフである。

だってそうだ、彼女の知るアキラならば——絶対にそんな事は願わない。

(けどっ、それで先にタブレットに手を出したらわたしの負けよっ!!)

先にポイントを使ったが最後、話し合わないで使うのか云々と文句を言ってくるに違いない。

そうなれば、非があるのは理子の方になり。

結果、アキラの意見が通る。

「んんんん？ どうした？ 使わんのか？ ならオレが先に使ってもいいか？ ほらほら、返事してみろよ。ああ、負け犬はどっちだろうなあッ!!」

（こぞとばかりに煽ってえっ!! あったま来たわっ!! こうなりやポイントなんかどうでもいいっ!! ——乙女の覚悟みせてやるってえのおっ!!）

その瞬間、彼女の雰囲気ガラリと変わる。

もじもじとし始めたと思えば、頬を赤く染めて、潤んだ瞳でチラチラとアキラを見る。

（コイツ……何のつもりだ？ はッ、いまさら色仕掛け何かで揺らぐとでも——）

「——嬉しい、アンタがそんなにわたしのコトを思ってただなんて……」

「……………んんッ？ 理子??」

「だって天使に願ってまで、わたしを自分のオンナにしたいんでしょ？ へえええ、ふうふうん、そんなにわたしが欲しいんだあ、アキラって、ふふっ、嬉しい」

「んんんんんんんんんんんんッ!!」

ぴとつとすり寄って彼の腕に頬ずりする理子、アキラは己の言葉を思い返しピシッと固まった。

（しまったああああああああああッ!）

（ほーら、何か言い返してみなさいよっ!! こっちは恥ずいの我慢してるんだからねっ!! とつとと負けを認めなさいったらっ!）

（これは演技だッ、演技なんだッ、なんて卑劣な……ッ!! 抱きしめてえよこのヤロウ!!）

（認めないなら——、えいっ）

次の瞬間、理子はアキラをぎゅーつと抱きしめて。

「アキラったら素直じゃないんだから、そんなにわたしと一緒に居たいってワケえ？」

「——あ、う、~~~~~て、テメエ!!」

「きゃーこわーい、怒った？ 怒っちゃった？ なら未来のご主人様のご機嫌が直るように、もつとぎゅつとしてあげる、どう？ 嬉しいでしょ？」

真つ赤な顔で強がりながら、楽しそうに勝ち誇る理子。

アキラは抱きつかれ、幸せな感触に脳を蝕む感覚。

何か、何か反撃の糸口は無いのか。

(力付くで抜け出す……いやダメだ、それだとオレが負けを認めた事になるじゃねえか!! どうする、クソツ、まさか逆手に取ってくるとは——……、いや、そうか、ならオレも!!)

こうなれば自爆覚悟だと、アキラはぎこちない仕草で理子を抱きしめ返す。

目には目を、歯には歯を、抱きしめ返して、そう、少しだけ素直になれば良いのだ。

「——ふえっ？」

「……………嗚呼、お前から抱きついてくれるなんて嬉しいぜ」

「ツ!? あ、アキラッ!? 何でアンタ、絶対に逃がさないって感じで——ツ!?!」

「だってオレは、お前を天使のオッサンに願ってまで手に入れたい男だからな。……もつと、お前をこうして感じていたいんだ」

「~~~~~っ!? あ!? え!? ううっ、ううううううううううっ!!」

「安心しろよ、抱きしめるだけだ……今はな」

ヤケツぱちな笑顔を向けるアキラに、理子はうゝと恥ずかしそうに唸るだけの可愛い生き物になって。

それがまた、アキラの心の琴線に触れる。

——離れたくないと、嘘が発端の言葉が本当になる。

「……………」

視線が会う、まるで吸い込まれてしまいそうな感覚。

先に顔を近づけたのはアキラか、それとも理子か。

吐息が顔にかかるぐらいの距離まで、唇は接近してしまつて。

(キス……しちゃうの？ 今度こそホントに……)

(するの catt、キスしちゃうの catt!? い、いやダメ catt、これは意地になつてただけ catt)

(——だ、ダメ catt、正氣に戻るのよわたし catt、流されてるから catt、雰囲気流されてるから!! ええい、一か八かよ!!)

(こつなつたら、無理矢理にでも空氣を変える——!!)

唇と唇が触れそうになつたその時、お互いの顔は急速に離れて。

ゴツン、と音をたてて痛みと共に視界が歪む。

そう、二人は同じタイミングで頭突きしたのだ。

「おおおおお catt、て、てめえ……これが狙いか、それ catt、ぽい雰囲気出してた癖 catt、思いつき罠 catt、たんだなクソオンナ!!」

「アンタ catt、そ catt、わたしを口説くフリしてから catt、か catt、た catt、んで catt、し catt、よ catt、つ!!」

これだからクソ童貞は!!」

がるがる、二人は額を押さえながら再び睨みあい。

「……………200ポイントまでゲーム買つても良いぞ」

「アンタも、200ポイントまでなら好きなように対策グッズでも何でも買いなさいな」

「じゃあ……先に使え」

「……………ありがと」

気まずさ故に、ぶつきらぼうになる二人。

奇しくも、あるいは必然か。

双方とも耳まで真っ赤にして、お互いの顔を見れず視線は泳ぐ。

その日は、どこかギクシャクした空氣のまま終わり。

——セックスしないと出れない部屋・五日目。

「……………は? え? これ、何 catt、事 catt、??」

理子が起きるとそこには、少女マンガの山と。

その中で、一心不乱で読みふけるアキラの姿があつた。

クエスト11／乙女心を理解せよ

時は、深夜まで巻き戻る。

隣で理子がくかーと気持ちよく寝息をたてている中。

アキラはむくりと起き上がり、ベッドからこつそり降りてタブレット片手にソファアーへ座る。

(足りねえ……嗚呼、全然足りねえなあ………乙女心の理解度がよオ!!)

この部屋に来てから、理子の魅力に押されっぱなしであり。

また彼女の心だって、良くも悪くも読み切れなくなっている。

今まで、そんな事はなかったのに。

(まあ、そういう色気のある関係でも無かったもんな)

つくづく天使のオツサンの言葉が刺さる、アキラと理子は高確率で結ばれない。

本当にその通りだ、そして今、幼馴染みとしての関係から脱出しようと足掻いている。

だからこそ、学ばなくてはならない。

(オレは——少女マンガを読んで乙女心を勉強する!!)

それこそが、理子に対抗する唯一の手段にして。

己を律する、一番の近道であると信じて。

(主人公に感情移入して女心を学び、ヒーローの振る舞いから女の扱いと口説き方を学ぶ)

そう、決して。

(オレが楽しみたいんじゃない、これは勉強なんだ、必要不可欠な出費だ、だから)

タブレットを操作して、アキラは読みたかった新刊と、金額的に手が届かなかった長編シリーズ、お気に入りの方々の数々などを、躊躇など少しも見せずに幾つも購入して。

ならば次の瞬間、ドサドサと大量の少女マンガが出現。

(時間はたっぷりある、ならここは——『三日月を探して』か『獅子王

陛下の花嫁』……それとも、『皇家の紋章』、ふふふツ、パラダイスだぜ!!」

彼は一心不乱にページをめくり、そして現在に至る。

少女マンガに没頭するアキラを見て、理子は思わずため息。

(あつちやくく、可愛そうにアキラ、ストレスに耐えきれなかったのね……)

こうなる事は希ではあったが、そう珍しい事ではない。

何かに大失敗したとき、受験のストレス、理子の日々の喧嘩に負け続けた時など。

アキラは心を守るように、少女マンガという壁を作り没頭する。

「おーいアキラ、ねえ聞いている？ 朝ごはんどうすんの？」

「……………あー、なんか適当に頼んどいて、オレ、今日はずっと読んでる」

「好きにすればって言いたいところだけど、日替わりクエストどうすんのよ」

「んー、任せた」

「……………ダメだこりや、——もう、アキラはわたしが居ないとダメなんだから」

やれやれと苦笑を一つ、理子は床に落ちていたタブレットを拾う。

今まで自覚していなかったが、どうにも。

(ダメなのはわたしもか、こんなアキラも守ってあげたいだなんて。ホント物好きねえ……)

鼻息混じりで、今日の日替わりクエストを確認すると。

『本日は手を繋いで累計12時間過ごしてください、食事やトイレなどの一時中断は認められますが、続行するとポイントボーナスがあります』

(……………あの天使、もしかして状況見て内容変えてない??)

今日も、そして昨日までも。

どうにも、二人の関係発展において都合の良い内容になっている気がする。

だがタブレットも、そもそもこの部屋自体が件の天使が用意した物

だ。

(多分、天使は天使らしく悪意はないんでしょよね)

これ以上は考えても仕方のない事だ、理子はアキラの隣に座ると早速と言わんばかりに手を繋ぐ。

「ああ？ どうしたいいきなり、クエスト始めるのか？」

「累計12時間、手を繋げっつてき。ま、折角だから一緒に読みましょ、

——ああ、その前に朝ご飯ね」

「おっけ、読んてるから食わせてくれ」

「はいはい、こういう時のアンタっていつもそうね」

彼女の口元が思わず緩んだ、ニマニマと変な笑みすら浮かんでくる。

理子はサンドイッチを注文すると、少女マンガに没頭するアキラの口元に運ぶ。

「はい、あーん」

「ん、もぐもぐ、んぐんぐ……」

「はい、あーん」

「あむあむ、あむ？」

「はいはい、わたしの指まで噛むんじゃないてーの」

思いもしなかった、こんな風に食べさせるのが嬉しいだなんて。

鬱陶しく面倒だと思っっていた筈だ、少なくとも今までは。

けど、悪くない、こんな時間も悪くないと今なら思える。

(さて、一緒に読む事になるだろうし。わたしは何を読もうかな——

——っつて!?! これちよつとっ!?!)

食べながら物色していると、多くの少女マンガに紛れて肌色多めの品が。

理子は思わずアキラの方を振り向いて、彼の視線が手元に手中している事を見ると。

恐る恐る中を確認する、そうあくまで確認なのだこれは。

(うわっ、うわあ~~~~~……。アキラってこんな好きなんだあ

……ええ……。うわ、ちよつと幅広くないっ？ 対応しきれないんで

すけどっ!?!)

貴族令嬢のヒロインが、王子に無理矢理迫られているというTL系から。

催眠アプリを使って美少女を陵辱するという男性向けエロマンガ等々。

実に多種多様なエロマンガが、所々に紛れている。

「……………スケベ」

「ん？ 何か言ったか？」

「いーえ、何にも。それより、わたしも食べ終わるから二人で読めそうなのチョイスしなさいよ」

「オツケ、後少して最終巻読み終えるから五分ぐらい待つてろ」

「はいはい、ゆっくり読んで良いわよ。食後のお茶飲んでるから」

そうして二人は、仲良くマンガを読み。

読み疲れたら手を繋いで昼寝し、夕食の時にはお互いに食べさせあい。

今日の日替わりクエストを難なくクリアしたのであったが。

「ふう〜〜〜、今日は楽勝だったなあ、気分転換にもなったし」

「ま、偶にはいいわよね。毎日こんなのだと飽きそうだけど」

「だなあ……………ツ!？」

その瞬間、アキラは気づいた。

（ヤツベえええええええええええ、エロ本混じってるじゃんツ!? 気づいたか？ 気づいてないよなツ!? そうだと言ってくれ!!）

正直な話、深夜テンションで思考が鈍っていたという理由もある。

もう少し言えば、こんな状況で性欲が溜まっていってつい、という側面もある。

だが、そんな言い訳が通用するのだろうか。

「ん？ どつたの変な顔して」

「い、いや何もツ!! ははッ、じゃあ寝るまでどうする？ 何ならゲームに付き合うぞ!!」

「今日はマンガって気分だし、今からは各自好きなのを読みましょ」

「あ、ああッ!! そうしようぜ!!」

セーフ、圧倒的セーフ。

朝の段階でバレているとは知らず、アキラはほっと胸をなでおろす。

そして、ベッドに寝ころんでマンガを読み始めた彼女を見て。

(……………ヤツベ、なんかムラムラして来たツ!?)

だってそうだ、アキラとて健全な青少年。

あれだけ性欲と恋愛感情を刺激するイベントがあつて、更には押し倒しそうにもなつて。

(いやこれは目に悪いだろ……………)

ダボついたTシャツは裾がめくれ、背中がチラ見えている。

短パンは臀部の丸みをはつきりと伝えて、しかもフリフリと揺れている。

当然、生足も同じであり。

(これ、角度によつては下着が見え……………ツ、ち、違うツ、オレは、

オレはそんな——ツ!!)

ぶんぶんと頭を振って苦惱するアキラ、だが一度発生した煩惱が消えることなく。

気を抜けば、襲いかかつてしまいそうだ。

(オナニーだ、オナニーをするぞ、ここは恥を忍んで見ないように……………いや今ならこっそりトイレで)

だがラブホ使用のトイレは丸見えだ、下手をしなくても気づかれる可能性が高い。

そして、何より臭いだ。

こっそりシタとして、もし彼女がそれに気づいたなら。

(イカ臭くない、とか言われたらさああああああ!! 死ぬ!!)

オレの心が死ぬう!!)

それだけは避けなければならぬ、だが性欲は発散させなければならぬ。

ではどうすれば良いか、マンガの山の周りをウロウロする彼の目にある一冊の本が写る。

(——女性上位つてのが微妙に興味じゃないが、絵柄が好みなんだよなコレ……………じゃねえ、そんな事より……………うん? そういえば

この中に——)

悪魔の様な発想が浮かぶ、これしかないとすら思う。

冷静になれば違うかもしれない、だがもはや、これしかない様に思えるのだ。

(……………確か、コスプレグッズは買うと逆にポイント増えるんだっ
たか)

ならば何も問題は無い、アキラは下半身に支配されつつある頭でタ
ブレットを操作。

途端、机の上には箱が出現し。

「——うん？ 何か買ったのアンタ？」

「安心してくれ、ポイントは増えた？」

「は？ ポイントが増えた？ 何をバカなコト——……………つて!?
何買ったのマジでっ!？」

マンガの世界に没頭していた理子の頭脳が、一気に現実に取り戻さ
れた。

ポイントが増える、それは実にアダルティなグッズを買ったとい
う事だ。

それはつまり、己に使われる可能性が高いのではないか。

(なんでそんな事になってんのよおおおおおおおおおおおお
おおおおっ!?)

戦々恐々とする中、妙に晴れやかな表情をしたアキラは理子に。

「安心してくれ、——ちよつとしたコスプレ衣装だ!!」

「安心出来ないわよ!! それで何するつもり——つて、何で土下座っ
!？」

それはもう、惚れ惚れするような見事な土下座だ。

「……………頼む、このネコ耳と尻尾を付けてくれ!! 後生だ!
頼む!! 一生のお願いだ!!」

「はあああああああああああつ!？」

アキラは、理子にコスプレを懇願したのだった。

クエスト12／猫とオナニー

「バカなのっ!? アンタってどこまでバカなのよっ!! どうしてわたしがそんなの付けなきやいけないのよ!!」

「ぐツ、蹴るなら気が済むまで蹴ってくれツ!! だが——この猫耳カチューシャだけでも!! 尻尾は諦めるから!!」

「あつたりまえでしょうが!! そもそもその尻尾どうやって付けるのよ!!」

「これか? そりゃアナルパールついてるしケツの穴にブスつと」

「うぎゃああああああああつ!? そんな変態なのわたしに向けてないで変態!! この変態があつ!!」

土下座するアキラの背中に、理子はドスドスと足裏で蹴りを入れる。

どうしてこうなったのだ、何がどうしてこんな事を頼む結論に至ったのか。

彼女は眉間の皺をほぐしながら、必死になって冷静さを保とうとした。

「あゝゝもう……、ほら、言ってみなさいよ。どーしていきなりこんなコト言い出したのか」

「……………怒らないで聞いてくれるか?」

「内容次第ね」

「……………ムラムラしたから、オレの好きなネコ耳と尻尾つけてエロいポーズとかして貰って、それをオカズにオナニーしようかと」
「……………あ、アンタねえ!! ちよつとは取り繕いなさいよっ! お、オナニーとか!! 恥じらいってモンはないの!?!」

顔を真っ赤にして叫ぶ彼女に、アキラは立ち上がって堂々と言った。

性欲に支配されつつある今、恥じらいなど明日まで出張中である。

「オナニーしないとお前を襲うがよろしいか?」

「よろしいワケあるかつ!! せめて何も言わずにこっそりしなさいよ

!! 見て見ぬフリしてあげるから!! その為にエロ本まで出したんでしょが!!」

「ツ!? ば、バカな!! 気づいてたのか temeエ!!」

「気づくわよ!! こんなに堂々と置かれたら嫌でも気づくわよ!! ああもうっ、見て見ぬフリしてたのにい〜〜!!」

地団駄を踏み始めた理子の生足を、嘗め回すように見ながら。諦められないアキラは、再度頼み込む。

今はただ、ネコ耳の彼女が見たい。

「スマン、お前の気遣いを無駄にしちまったな……だからネコ耳を付けてくれ」

「話が繋がってないっ!! 謝罪になってないわよおバカ!!」

「出来れば、上半身は裸でハートのニップレスを貼ってくれると嬉しいぜ」

「だれがするか!! 勝手にオナニーしてるバカ!! バカバカバカ!! アキラのド変態!!」

どうしてくれようかコイツ、と理子は睨むが。

アキラとしては、そんな姿ですらムラつとくる。

(頼むだけじゃダメか、なら——)

(コイツ……目が諦めてないっ!! 何か断る理由っ!! 何が悲しくて恋人でもないのにそんなコトしなくちゃいけないのよっ!!)

(誠意を見せなければ、そう、オレに差し出せる物は何か)

(——最悪は実力行使、……:……まあ、多少は妥協しても良いとしても、ネコ耳カチューシャぐらいなら、でもそれで調子に乗られるとヤバイし)

睨みあう二人、緊迫感が部屋を支配する。

理子が拳を握りしめた瞬間、アキラは服を脱ぎだして。

「——ちよつとっ!? 何で脱ぐのよ!!」

「これがオレの誠意だ、全裸で土下座しよう。そしていつの日か部屋から出られた時にはお前に一生忠誠を尽くす」

「いるかそんなもの!! 冷静になりなさいよ!! 今のアンタは性欲に支配されてるのよ!!」

「性欲に支配されるだろうが!! 理子テメエは自分がどんだけエロい体してんのか分かってんのか!!」

「逆ギレっ!!」

全裸でギラつく目をし始めたアキラに、その勢いに理子はたじたじとなる。

彼はその勢いのまま、ガシッと彼女の両肩を掴む。

「ひいっ!?!」

「良いか、良く聞け——お前は女性としてとても魅力的なスタイルをしてるんだ!!」

「ぎゃうっ!?!」

「そのロケットおっぱいはなあ、体育の度に男全員の視線を集めてんだぞ!!」

「し、知らないわよそんなの!! そりやあ見られてるぐらいには知ってたけど!!」

「いーやお前は知らん!! 普通の授業の時だってなあ!! 後ろの席のヤツからお前のケツとか太股とか、制服の上からでも分かる巨乳に欲情してんだよ!! オレがどれだけアイツらを牽制してだなあッ!!」

「そりやどうもありがとう!! そういう所は好きだから!! でもアンタはどうなのよ!! ——あ」

うつかり聞き返してしまい、視線を泳がせる理子。

アキラはうんうんと頷いて、あつさり告げた。

「欲情してないとも思ったか? 正解だ、お前の事はそんな目で見ちゃいけないと思ってたからな、今思うとエロ本のヒロインに理子の姿を重ねていたかもだ」

「聞きたくないーっ!! そんなの聞きたくなかったわよ!!」

「な、だから……エロビキニで良い、ネコ耳とエロビキニでおっぱいが揺れそうなポーズをしてくれれば良い」

「したらアンタ調子乗って襲うでしょーがっ!!」

「……………あー……………しないぞ? 多分、一発抜いたら冷静になるぞ? 多分」

「断言しなさいよそこは!!」

このままだと貞操のピンチだ、確かにこんな状況では性欲も溜まらう。

理子とて、それぐらいの理解はある。

だが、こんな形でなし崩し的にセックスまで行く危険性を受け入れる事なんて出来ない。

(で、でも……オナニーさせとかなないと、この先もつと危険になるかもだし、うううっ、なんでそんなに大きくしてんのよお!!)

ちらりと下を向くと、怖いぐらい立派になったアキラのアキラが。

(ああもうっ！ わたしだって性欲はあるんだからねっ!! 自分一人だけ辛そうにしてさあ!!)

だが、ここは女としてのプライドにかけても口が裂けても言えない。

「——少し、少しだけ考える時間をちょうだい」

「ああ、良い答えを期待してるぜ!!」

(おっし時間は稼げたっ、後はどうすれば、うー、どうすれば良いのよホントさあ!!)

るんるんと待つアキラは、理子を逃がすまいと肩を強く掴んだまま

で。

それが一層、彼女の危機感を煽る。

(だ、妥協案……ネコ耳をつければアキラは大人しくなる？ いいえ

違うわ、絶対に最低でも半裸まで要求する)

そもそも、オカズ云々で言うならここ数日の事でも思い出せば良い

のではないか。

でもそれを言ったとしても、何かと反論してくる事が容易に想像でき

きる。

(……腕力でこられたら、わたしに勝ち目はない。そしてアキラ

にはオナニーさせる、わたしは妥協しない、その為には何かでわたしが

上だと思いき知らせるコトが必要——)

そして今、彼は全裸だ。

(アキラは今、弱点をモロ出しにしているわ。……でも弱点はそれだけ

? コイツの弱点……)

必死に記憶を巡らせる、少女マンガもアキラの弱点と言えよう。
幼い頃のおねしよのエピソードなど、恥ずかしい思い出などもそう
かもしれない。

だが、効果が薄い。

(わたしが昔の失敗を知ってるように、アキラも同じくわたしの失敗
を知ってるわ、それに子供の頃だとノーカンとか言いかねない。なら
……最近?)

最近だと何があっただろうか、あるにはあるがどれも些細な事で。

——(違う)

その時、理子は気づいた。

この部屋に来たからこそ、露出した変化。

(アキラは……わたしのコトが好き、ええ、一度も面と向かって言っ
てくれないけど? ……わたしも言っていないけど)

惚れた弱みとは良く言うではないか、そして先日、理子が襲われた
のもきつとそういう事で。

なら今なら。

(アレが……通じる? うん、イケるかも、今のアキラになら……通じ
るかも)

確信半分、これは賭けに近い。

だが理子へ非常に分のある賭けだ、試してみる価値はある。

深呼吸をひとつ、女には武器があると瞳を潤わせて。

——まるで、恋する乙女のように、そしてとある決心をして。

「……………ね、ねえアキラ……その、オナニー、したいのよ、ね?」
「あ、ああッ」

その瞬間、肩を掴むアキラの手が緩んだ。

恥ずかしそうに頬を染め、ウルウルとした瞳でちらちらと上目遣い
をする彼女の姿を見てしまったからだ。

「そ、そのね、良いよ、オナニーしても、でも……条件があるの」
「何でも言ってくれ、何でもするから!!」

ネコ耳カチューシャの出番か、おっぱい丸出しとまでは行かなくとも
下乳だけ、或いはパンツとか拝ませてくれるのかもしれない。

恥ずかしがりながら、そんな姿を見せてくれるのかも。

そうアキラの心は期待に膨らんで、——その瞬間。

「あ、あのねっ……………えいっ」

「ひゅッ!? ッ?? あ?? え?? い??……………あ、あのお?

り、理子さん? 何をしているのでしょうか?」

「ふふふ、見て分からない? 油断大敵って言葉知ってる?」

「オレの予想が正しいのなら、はい、ちよつと止めて欲しいなって、ほら、危険な行為なら例のガスとかありますし、止めた方が良いかなど思うんですよオレは」

アキラは冷や汗を滝のように流しながら、必死になって懇願する視線を送った。

とてつもなく最悪な状況だ、思いもしなかった。

危機的状況過ぎて、性欲が一気に霧散する。

「——今からわたし、寝るから。アンタはトイレでオナニーしてきなさいよエロ本でも使つて」

「その、理子様? 断るとか、理子様のエッチな姿をオカズにしたいなあつて言ったら……………?」

「例のガスが効果を発揮するのと、アンタの金玉が握り潰されるのと、どっちが早いか試してみる??」

そう、アキラのゴールデンボールは理子の手握られていた。

しかも、程良い強さで。

もはや彼は青い顔で冷や汗を流しながら頷くしかなく、断れば男としての死が待っている。

「——アンタ一人でオナニー、出来るわよね? ええ、わたしも鬼じゃないから、わざわざ言わなきゃどんな妄想しても怒らないわねえ? オナニー、一人で出来るでしょ??」

「はい!! どうかオレにトイレで一人でオナニーさせてください理子様!! エロ本を持って行きます!!」

「よろしい、じゃあ行ってきなさい」

「ご命令の通りに!! たっぷり出してきます!!」

彼女が金玉を解放した途端、アキラは適当なエロ本を掴むとトイレ

へ走る。

やれやれと大きなため息を吐き出しながら、理子は背を向けてベッドに潜り込んで。

(な、何とかなかったあゝゝゝっ!! 危なかった、マジ危なかったわ、………わたしも隠れてオナニーしとかないとムラムラして危ないかもしれないわ)

だが、その方法を考えるのは後だ。

精神的な疲れからか、理子は睡魔に襲われあっという間に瞳を閉じて。

その後、すつきりした顔をしたアキラは後悔にまみれながら隣で寝た。

———とところで一方、全てを見ていた天使のオツサンと言えば。

「ふうむ、これはテコ入れが必要で？ この二人には娯楽の使用制限と……ぐふふ、アキラはんの性欲の暴走と、理子はんの愛欲を刺激すればもっと尊みエネルギーうはうはの可能性がありまんがな!! 面白くなって来たでえ!! 今夜は徹夜で色々考えなければ!!」

二人は天使のオツサンの企みなど知らずに、それなりにグツスリと眠っていたのだった。

クエスト13 / ちよつと古くない??

——セックスしないと出れない部屋・六日目。

朝食後の二人の前に、天使のオッサンの姿があつて。

三人でテーブルと囲み、神妙な雰囲気だ。

「どーもどーも、こうやって対面するのは数日ぶりでしたっけ？」

まあそんな事はかまへんのや、今日はお二人にお話があつて来たさかいに」

「もしかして、この部屋から出してくれんのか？」

「えっ、今日でこの部屋とはさよならなのねっ!!」

「そうやって勢いで流そうとしても、オッサンは流されまへんでえ……。今日は他でもなく、——仕様変更とルール追加のお知らせに来たんやわ」

不穏な言葉に、アキラと理子は目配せするとソファから立ち上がり。

「疲れてるだろオッサン、肩でも揉むぜ？ 今日リラックスしていいよ」

「何飲む？ ポイント余ってるから何でも注文してくれていいわ」

「ほな、お二人が今すぐイチャラブセックスしてくれまへん？」

「お帰りはアッチだぜ天使のオッサン」

「わたし、おまえ、ころす」

「お二人がセックスせーへんのが、いけんのでっしやろう!？」

手首をころすところと回転させるアキラと理子に、それはそれとして尊みエネルギーを満喫するオッサン。

天使は指ぱっちん空間転移で、二人をソファに座らせ直すと。

「まず一つ目は、娯楽は一日三回、各一時間まで！ それ以上はベロチューで実績解除でまんがな!!」

「非道えツ!? 天使のやる事かそれがツ!？」

「そーよそーよ!! わたしらを勝手に拉致監禁しといて娯楽まで取り上げるっての!？」

「いやね、オッサンは思ったんや。昨日の様なゆったりラブシーンも、その後のドタバタも悪くないけど……娯楽を制限した方がもっと楽しゆうなるって!! オッサン天使ぞ? 主導権はこっちにあるんや!! もっとオッサンにイチャラブとか嬉し恥ずかしとか見せてーやっ!」

「くツ……家主には逆らえん!!」「足下見やがってえ……っ」

悔しそうにする二人に、天使のオッサンは続けた。

これは二人の様なケースが初めてだった事に起因する変更であるが、ある種、仕方のない事でもあるが。

「娯楽の使用制限はベロチュー、これが追加ルールや。んで次の仕様変更なんやけど……」

「ん? 何を見て——ツ!? くツ、オレの少女マンガは渡さんぞ!! 部屋から持って帰るんだ!!」

「残念ながら、部屋から持ち出せまへんよ? それはタブレットに最初から書いてあるで?」

「あれ? アキラ知らなかったの?」

「えツ、マジ!? 見落としてた畜生!! だからこんなに交換したのにツ!! 具体的には三分の一ぐらいは持って帰ろうとしてたのに!!」

「三分の二は読破するだったんですアキラはん?? まあ、それに関係する事なんですがね。——本は基本的に電子書籍でおま、どうしても紙で欲しいなら倍のポイントになるんでよろしゅう」

「あー……………、そーいや本棚無いもんなあ。交換ページのリストにも無いし」

「それは仕方ないわね……」

「でっしやる?」

二人が納得した所で、山になつて本をタブレットに収納。

指先ひとつ振っただけで起こった現象に、アキラも理子もほへー、と感心したように眺めるだけ。

もはや、奇跡のような技にも慣れっこだ。

「以上や! ならオッサンはこれで退散するでー、次に会う時は部屋から出て行く時だと嬉しいんやけど。——あ、そうそう、今日は特別

に日替わりクエストかベロチューで娯楽解除かどっちかでエエで!!
選んでや!!」

「——は??」

「なんですってっ!!」

最後に小さな爆弾を一つ落とし、天使のオッサンはぱつと姿を消して。

残るは綺麗になった部屋と、ベロチューというワードが頭を駆けめぐっている二人。

(べ、ベロチューだつてッ!? そんな普通のキスだつてまだなのにッ!! それ、そんな事………してみてもえけどさあ!! ちよつと順序とかあるじゃんかッ!!)

(ベロチューつて、あ、アレよね、舌を入れる的………くくくっ、ううっ、す、するの? いやでも……)

(ッ!? こつち見てるッ!? なんで顔赤くしてんだよ!! そんな雰囲気!? そうなのか!? え? キスして舌入れる雰囲気なのこれッ!?)(なんでジツと見てんのよっ!? まさかするつもり!? こんな理由で!?! い、いえ落ち着くのよ、そういう雰囲気なってるのかもしれないし……い、いやでもっ!!)

無言、火花は散らず。

二人はもじもじと、視線を反らしたり合わせたり。

数分ほど、とても焦れたい空気のままであつたが。

「……………取りあえず、日替わりクエスト確認すつか」

「え、ええっ! そうしましょ!!」

「どれどれ、今日のは……………げッ」

「うゝっ、これするの……??」

二人は思わず苦い顔、今日のは少し趣が違う。

いつもなら双方向であるのに対し、今日のは。

『今日は男の方から迫ってみましょう! 壁ドンしてください、そして熱烈に口説くのです。※報酬ポイントは基礎報酬の10ポイントに、内容次第で上乘せボーナスがあります。是非とも高ポイントを狙ってください』

そう、壁ドンで、しかもアキラの方から口説けときた。

「いやちよつと古くない?? 今、令和よ? 壁ドンって平成の時代じゃないの?」

「いや、少女マンガでも現役だぞ壁ドン」

「ああ、そんなもんなのね。確かに言われて見ればそうねえ……」

「壁ドン……しかもオレから口説く……いや、どーすりや……」

頭を抱えるアキラの姿に、理子は悪いと思いつつも期待をしてみよう。

どんな言葉で口説いてくれるのだろうか、どんな風に壁ドンするのだろうか。

受け身で良いという点もあって、彼女としては傍観気分である。

「ま、わたしは何時でもオツケーよ、心の準備が出来たら言いなさいな」

「……いや、今からやろう。壁ドンして口説けば良いだけだ」

「言っておくけど、変に暴走したら殴るからね」

「………わかった」

「即答しなさいよっ!」

何はともあれ、理子は壁際に移動しようとしたが。

アキラの手によって引き留められる、いったい何だというのだ。

そんな疑問の眼は、すぐに呆れの視線に変わった。

何故ならば――。

「――これを着ろツ!!」

「え? 学校の制服じゃない、何で今更? アンタ、セーラー服が好きなの?」

「男としてそれは否定できないが――、ちよつとお前の普段着、男の視線を意識しなすぎ過ぎで辛いんだが?? 確実に暴走するがよろしいか??」

「セーラー服で暴走しない可能性は?」

「………少し?」

「だから即答しなさいよ断言しなさいよ!!」

理子としては頭痛がしてきそうだが、だがアキラにとつても譲れない

線であり。

少しでも布面積や体の線を隠したい所存である、だって今日はパーカーを羽織っているとはいえ、巨乳を強調してしまうブラトップに短パンだ。

「なんでお前の部屋着はそんななんだよッ!! もうちよつとオレに配慮しろよ!!」

「はあ〜?? いつもと同じでしょう、今まで何も言ってこなかったじゃんっ」

「そりゃこの部屋に来るまで恋愛対象から外してたから意識してなかっただけだろうが!! その時ですら体はエロいなって思ってたんだが?? 多少は我慢してたんだが!! 夜遅くまでオレの部屋に居る時は泊まらせてたり家まで送ってたのはテメエが魅力的だからだろうがッ!!」

「〜〜〜っ!? うあ、っ、あ、ご、ごめん……………」

「ッ!? あ、あ、ああッ、ちよつと言い過ぎたな、スマン…………」

理子とアキラは思わず俯いて、耳まで真っ赤に。

顔を上げられない、向こうの顔を見れない。

(ず、ズルいわよ…………そんな時からわたしを守って…………少し、そう、少しは意識してたとか、今言うなんて……………)

(言っちゃまったああああああああッ、うわあッ、なんで言ったんだよオレッ!! 言うつもりとか無かったのにさあ!!)

(で、でも…………そういうコトなら。セーラー服とか、他の服を着ても…………)

(ヤベエ、ここでセーラー服をアイツが着たとして…………今から口説くんだぞ? こんな気分でさあッ、暴走しちゃうだろうがッ!!)

甘い胸の痛みが、ときめきが、ドキドキが止まらない。

止まってくれない、心臓がばくばくと早鐘を打つ。

何かを言わなくては、そうアキラは焦って言葉が出ず。

「……………ちよつと待ってて、その…………セーラー服以外でも、いい?」

「お、おう、任せた…………」

何を着るつもりか、セーラー服以外って何だと、アキラが悶々とする

る中。

タブレットを持って、理子は風呂場の脱衣所へ。

ガラス張り故に、振り向けば見えてしまう誘惑を必死になって耐えながら十分後。

「——おまたせ、どう、かな……?」

「……………なんで猫の着ぐるみなんだよおおおおお
おおおおおおおおおおおおお!! オレのと
きめきを返せええええええええええええええええ!!」

「いやどんな服でもアンタの前では怖くて着られないでしょーが、バ
カなの??」

正しく自業自得、アキラはそれはもう見事な失意体前屈をみせた。

クエスト14 / キャスト・オフ

(オレは……この猫の着ぐるみを着たヤツを壁ドンして口説かなきやいけねえのか??)

余りのシヨックで体に力が入らない、アキラは立ち上がる事が出来なかった。

(そりゃあ、顔だけ出てるのは不幸中の幸いだけでも!! 色気も何もねえ!! そりゃ言ってる事は理解できるし自業自得だろうけどおやおおおおツ!!)

納得行かない、激しく納得行かない。

目に闘志を燃やし、アキラは顔を上げて。

「――交渉したい、それ以外を着てくれ、頼むから」

「交渉ってコトは、アンタは何を譲歩するワケ?? 話してごらんなきいな聞いてあげるから」

猫の着ぐるみ装備の理子はドカツとソファーにふんぞり返り。

負けてなるものかと、アキラは立ち上がる。

そうだ、脱がさなければならぬ、どんな手を使ってでも。

「自分で脱ぐなら手荒な事はしないぜ」

「この着ぐるみの中にスタンガンを隠し持つて言ったら?」

「……………いやそれ卑怯じゃね?? オレ、勝ち目なくね??」

「ほっほーっ! アンタはこの色気のない格好のわたしを壁ドンする運命にあるのよ!! 悔しいわよねえ……、少女マンガが好きなアンタが、初めての壁ドンがこんなのでえ」

「テメエ!! くっそー、ここぞとばかりに煽りやがって!! 今すぐ力付くで全裸に剥くぞオラア!!」

「ふーん、へー、そうく、暴力に訴えるんだアンタって……」

ニタリと笑って挑発する理子に、アキラとしては黙るしかない。

今ここで無理矢理脱がしにかかるのは、余りにも悪手。

今後のパワーバランスに大きく影響する、具体的にはアキラは理子の奴隷になる可能性すらある。

「……………どうだろう、オレが全裸になるからそれを脱ぎませんか理子様？」

「却下、アンタ昨日と同じコトを繰り返したいの？」

「じゃあオレがそれ着るから、そっちは普段着で良いから」

「そうねえ〜、アンタの方を動きにくくした方が効果的よね」

んー、と理子は楽しそうに考え込む。

実の所、この着ぐるみの下に他の服を着ているのだが。

イニシアチブを得る作戦は、とても上手く運んでいる。

(もう少し勿体ぶった方が効果的よね、でも焦らし過ぎると暴走するわ。何かトドメの一撃は無いかしら…………)

(くッ、何を考えてるんだコイツ!! —— 待て、そうじゃない、ああ、そうじゃない。これだ…………これを理由にして—— ツ!!)

(いえ違うわね、この中の姿こそが必殺! ふふん、噂の童貞を殺すニットワンピの威力を見なさいっての!!)

いつ脱ぐか、それが問題だ。

理子がお、思考に没頭しようとした時であった。

アキラは立ち上がって、理子をソファから立たせて壁に押しつける。

次の瞬間、ドンという音がして。

「——アキ、ラ？」

「お前は良いスタイルしてるしき、それに…………スゲエ可愛いからさ、そうやって警戒してくれ」

「っ!? ちよつ、かお、ちかい…………」

「キスされたくないや、黙れ、口を手でガードしとけ、でないと全部脱がしてキスする」

「……………っ!?!」

あわあわと理子は両手で己の口を塞ぎ、視線はアキラから離せない。

顔を背けたい、とても恥ずかしい、でもそれをしてたらキスされる気がして。

「良い子だ理子、もうさ、前みたいにお前を只の幼馴染みとして見れ

ねえんだ。だから……少しだけで良い、気を使ってくれ、もう少しだけオレの為に我慢してくれ」

「アキラ……、そんな、ズルい、アンタってズルいのよ」

こくんと彼女は頷き、それを見たアキラはとても柔らかく笑った。次の瞬間、理子はアキラの腕の中に居て。

「外に出ても、あんま過激な格好するな。可愛いお前を誰にも見られたくない、オレだけが独占したいんだ」

「ううっ、なんで今それを言うのよお……、ホントにそう思ってくれてるの？ それとも、この為だけに言ってるの？」

「オレは本気だ、日替わりクエストの為に言ってるんじゃない。――

――オレはお前を独占したい、多分……見て見ぬフリをしてたんだ。こんな気持ちをお前にぶつけるなんて考えられなかったから。……でも、今は違う、もつともつとお前を知りたいし、オレを知って欲しいんだ」

「……………わたしは、何を言えば良いのよ。ズルい、卑怯よアキラ、だから大嫌いなものよ、わたしの心をこんなにも乱すのに、アンタはわたしを――」

どうしたら、彼の言葉に何かを返せるのだろうか。

どうしたら、己の気持ちを伝えられるのだろうか。

理子は意を決して、弱々しくアキラの胸板を押し返す。

「理子……っ？」

「少し、少しだけ目を瞑ってて」

「ああ、お前がそう言うなら」

がさごそと衣擦れの音がする、恐らく着ぐるみを脱いでいるのだ。でも何故、とアキラが困惑する中。

「……………アンタにしか、見せないわよ。アンタの為に、選んだのよ」

「――あ、う、うん……良いぜ、スッゲー似合ってる……今すぐ、キスしたいぐらいに。閉じこめて何処にも行かせたくない、マジで」

耳まで赤くなってる事を、理子は自覚していた。

その上、彼の顔だつて見れない。

己は今、どんな顔をしているのだろうか。

「……………キス、しても良いわよ。壁ドンなら、……………するでしょ、たぶん」

「……………我慢できなくなるから、髪にだけ」

「そう……………好きに、しなさいよ」

「ああ、……………好きにする、だから、お前はしばらく喋るな、首輪とか鎖とか付けたくなるから、黙ってキスされてろ」

そう言いながら、アキラは酷く喉が乾いているのに気づいた。

口の中がカラカラで、彼女の柔らかかそうな唇に吸いついたら餓えが満たせそうなのに。

でも、それをしてはいけない。

「……………理子」

「っ！ あ、——っ」

恐る恐るアキラは右手を理子の頬にあて、彼女はその瞬間ビクツと肩を震わせる。

その姿が何より愛おしくて、アキラは強く抱きしめたい衝動を堪えるのが大変だった。

「……………ん、ああ、良い匂いだな、同じシャンプー使ってる筈なのに、どうしてこんなに艶々した髪でさ、良い匂いしてんだよ」

ちゅ、ちゅ、と理子のショートカットの髪にキスの雨が降る。

彼女はぐるぐると視界が揺れる錯覚を覚えながら、必死に立って。

「なんでこんなにテメエは可愛いんだよ……………、なあ、髪以外にキスしてもいいか？ 嗚呼、許してくれるなら手足を縛ってベッドで無茶苦茶してえ……………でも、お前に嫌われるような事はしたくねえんだ」

「……………はあ、ふう、あ、——ん……………、なら、手、うん、指なら好きにして良いから、今だけ、今だけは私の手を好きにして、それで……………我慢できる？」

彼女にとっては、とても過激な提案だった。

そこが妥協点でもあった、このままだと髪以外にも際限なくキスされてしまう、それは心臓が持たない。

なら、そう、手だけなら耐えられるかもしれない。

「……………ぐくツ、い、良いんだな？ 本当に、好きにして……………良いんだな？」

「……………するなら、早く、恥ずかしくて死にそうなんだから」
「……………いくぞ」

次の瞬間、くすぐったい感触が指先に発生した。

思わずアキラの顔を見ると、切なそうに、しかして欲情している瞳で理子を見ている。

ぞくぞくと、彼女の背筋に何かが走りそうになる。

(こんなアキラなんて……………)

独占欲にまみれた、でも必死に自制して。

ペロペロと丹念に指が舐められ、がじがじと噛まれていく。

息が荒くなる、理子もアキラも、何かいけない事をしているような背徳感に支配され。

「……………んっ、痛っ」

「うあッ、す、すまん!! あー、血が出てるな」

「あ、ああ、そうね、……………ならこれでお終いにしましよ、どこかで絆創膏を見たから、探してくるわ」

「……………スマン、ちよつとやり過ぎた」

数十分も続いたソレは、理子の左手の薬指の根本に付けられた歯形によって終了した。

まるで指輪のように鬱血し、少しだけ血が出て。

彼女はそれにキスしたくなる衝動を、頭を降って脳から追い出した。

(うおおおおおおおおおおッ!! ヤリすぎたあ!! またもヤリすぎたじゃねえか!! ああもうッ、理子に嫌われたらッ、い、いやそんな

風じゃないと思うけども!! しばらく顔が見れねえええええ!!)

(ううっ、まだ心臓がドキドキ言ってる……………顔が火照ったまま戻らないわ……………)

(土下座……………、そう、ここは土下座が必要かもしれん、いやでも普通にした方が良いのか？ うーん分からねえ!!)

「——でも、知らなかった。アキラがあんなに独占欲強めだなんて、アレ、マジで言ってたわよね……」

理子は考える、今までアキラが暴走していたのは、確かに性欲というのものもあるだろう、だがそれ以上に強い独占欲がそうしているのではないか。

（なら……何か手を打たないと、同じ事の繰り返しね）

身が持たない、あんな迫られ方を何度もされるなら。

不意打ちで唇を奪われた方が、告白される方がマシな様に思える。

「——独占欲ってコトは、わたしがアキラだけって思わせれば良いのよね」

なら、どうすれば良いのか。

理子は左手の薬指に絆創膏を張り終え、風呂場の脱衣所に置いたままだったタブレットに手を伸ばす。

そして交換ページを開きながら、ベッドまで戻り。

「り、理子——」

「ちよつと買う物あるから、しばらく放っておいて」

「あッ、はい、そうします……」

「うーん、何か良い道具か何かがあれば……」

その日、彼女はずっと考え込んでいて。

アキラは悶々としたまま、理子の顔色を伺って過ぎし。

——セックスしないと出られない部屋・七日目。

「……………何ぞ??」

朝起きたアキラが目にしたのは、テーブルの上に鎮座したゼクシイ一年分であった。

クエスト15／はぴまり？

意味が分からなかった、誰がどうして、何故こんなものが。

(まさか……天使のオッサンの仕業か??)

ゼクシイと言えば結婚雑誌、つまりは恋人の先にある物。

それを意識させる事で、二人の関係をテコ入れしようとしているの
だろうか。

(けどなあ、ちよつと迂遠過ぎる気がするんだよな)

セックスしないと出られない部屋に閉じこめておいて、そういう手
は今更ではないか。

日替わりクエストに使う品という可能性も残ってはいるが、そうで
はない場合。

(理子、か？ でも何のために……)

彼女は何のために、否、違う。

「……………結婚願望がある、或いは誰かと結婚を考えている」

とすれば筋が通るが、相手は誰だ。

そんな人物はアキラには一人しか思い浮かばない、彼女と近い人
物で、そういう将来を考えられる相手。

(——オレか!! も、もしやコイツはオレとの為にツ!?)

思わず口元が緩む、もしそうならどんなに嬉しいか。

しかし一方で、不安も付きまとう。

いつも一緒に居る幼馴染みで、お互いの人間関係だつて把握して
る。

(嗚呼……考えたくねえ、考えたくはねえがよお)

けれど、全ての時間を一緒にいる訳ではなく、アキラが知っている
理子の人間関係が不完全な可能性もあつて。

(ネットの知り合い、学校の誰か、はたまた……、あー、何でオレはコ
イツの全てを知らねえんだよ……)

すやすやと脳天気眠ったままの彼女を見下ろしながら、アキラは
じつと考える。

(もし、コイツがオレ以外と……)

隠れて誰かと付き合っていたのかもしれない、可能性は低い、ゼロだと信じたいが初体験を済ませているかもしれない。

——あの時、アキラを拒絶したのはその相手に操をたてている可能性だつて。

(止めろッ、止めろ止めろッ、考えるな——疑うんじゃない、理子は、理子を疑っちゃいけないんだ)

何故、己は彼女と恋人ではないのだろうか。

幼馴染みではなく、ちゃんとした関係ではないのだろうか。

この部屋に来て、自覚してから機会は何度もあった筈だ。

(——怖いんだ、お前に嫌われたらつて、好きじゃないつて言われたら、オレは……オレは、生きてはいけない)

こんな感情、気づかなければよかつたとすら思つてしまう。

彼女を起こして今すぐ問いただしたい、でも。

(答えがもし……、そんな可能性はゼロだつて、でもオレは……オレ達は曖昧な関係のままだったから)

絶対の自信が持てない、好きだと愛してると口に出せない男が。

いったい何の権利があつて、彼女を問いただすのか。

思考がぐるぐる回る、どうすべきか、こんな不安なんて無視すればいい。

(そうだ、こんな考えなんて無駄だ。起きたらさ、何ポイントを無駄遣いしてんだつて、オレと結婚したいのかつて言えばいいんだ、ただ、それだけなんだよ——ッ)

その一步が踏み出せない、勇気が出ない、己はこんなに臆病だつただろうか。

この部屋に来てから、信じられないぐらい心が弱くなっている気がする。

「結婚、するのか？ オレ以外のヤツと——」

悶々と苦悩するアキラ、そんな彼を彼女は。

(あ、やっべ、アプローチ間違えたあああああああああああああ
あっ!?)

寝たフリをして様子を伺っていた彼女は、内心とても頭を抱えていた。

だってそうだ、単に気を引く為の小道具だったのだ。

これを切っ掛けに、告白まで行かずとも一歩前進すれば。

(前進どころか、なんかマイナスイ入ってないっ!? え? なんでそっち方面行ってるのよアンタはっ!!)

まったくの計算違いだ、いつもの様に喧嘩腰のスタートで良いからと。

所謂、ツツコミ待ちでもあったのだ。

好ましい変化があればと考えて、なのに。

(ど、どうするっ!? このまま起きていいのっ!? まだ寝たフリして待つ? でも待って何か変わるのっ!?)

非常に起きづらい、気まずいどころじゃない。

起きた途端に修羅場は必須、冗談よと誤魔化せる雰囲気でもない。

ピンチだ、貞操とは別問題でピンチだし、ともすれば貞操の危機である。

(いや貞操はこの際、横に置いておくとしてっ。今はコイツのリカバリを、ああもうっ、ちゃんと考えてくれるのは嬉しいのよ? けどさあ!!)

自分達の関係を正しく認識して、その上でこちらを思いやってくれているのは理子はとても嬉しく思う。

不安になってるのは彼の誠実さの裏返しだと、そう思う。

(……………わたしもさ、何も言葉にしてこなかったもの)

だから、お互い様なのだ。

彼の全てを知っていると思っていたが、この部屋に来てそうじゃないと知った。

だから不安に思う部分もある、己の心を強く自覚した故に言葉にするのが気恥ずかしい部分も自覚している。

(わたしが——受け止めてあげないと)

かつて彼が命を救ってくれたように、今度は理子がアキラの心を受け止めて救う番だと。

だから、寝たフリを続けるのではなく。
だから、冗談で誤魔化すのではなく。

「……………はあ、なーに不安になってるのよバカアキラ」
「ツ!! り、理子ツ!! おまつ、何時から起きて——!?!」

「最初からよ、アンタの反応が見たくて寝たフリしてたの」
その言葉を聞いて、アキラは天を仰いだ。

最初から掌の上で転ばされていたのか、この不安も、彼女の計算の内なのか。

苦しそうに訝しげな視線を送る彼に、起きあがった理子は腕を広げて。

「ほら、抱きしめてあげるから来なさいよ」

「……………何ののつもりだよ、こんな仕掛けまでして」

「そうやって疑うからバカなのよ、わたしはね……アンタ以外とそういう関係になる気なんて無いわ、——ほら、落ち着きなさいって」

理子は彼の首に腕をまわし、ぐいと己の胸に引き寄せる。

（——あ）

ふわり、ふかふかと柔らかい感触と共に、アキラは一瞬だけ呼吸困難に陥る。

然もあらん、巨乳にむぎゆつと顔全体が包まれたからだ。

「くくくツ!! んぐツ、ぷはツ、なんで抱きしめたツ!?!」

「どう? 落ち着いた? 男っておっぱい好きなんですよ?」

「好きだけでも!! ぶっちやけ落ち着いたけども!!」

「なら良いじゃない、暫くそーしてなさいよ。大サービスなんだからね」

ふふん、と頼もしそうに笑う理子に。

なんとという現金さか、或いは悲しき男の性か、アキラは己の心が沈静化に向かっている事を自覚して。

「……………すまん」

「良いのよ、ちよつとアンタを読み違えたただけだから。ま、不安になるのも分かるわ、わたし達って何も言葉にしてないもん」

「……………それも、すまん」

「お互い様よ、それに——気になるなら、処女膜でも確認する？ 部屋から出たらわたしのスマホを見る？ 別に問題無いわよ、他ならぬアンタなら、ね」

くすくすと軽やかに微笑む理子の姿は、とても美しく見えて。

抱きしめられたままのアキラは、心が何処かに墜ちていくのを感じた。

(嗚呼……コイツには敵わないなあ)

人としての器が違う気がする、狡い、とも思う。

どんなに不恰好で、どんなに素直じゃなくて、どんな感情を抱いていても。

理子は、アキラを受け入れてくれる。

(側においてくれるって、そう思ってた良いのか?)

醜い嫉妬も、重みのある愛も、理子ならば倒れず抱きしめて、逆に支えてくれてる。

そんな確信めいた予感が、アキラの中に生まれてきて。

(好きだ、理子、お前が好きだ、愛してる)

今なら素直にそう思える、でも今それを口に出しても良いのだろうか。

こんな事は初めてで、何も分からなくて。

「———どうしたの、何か言いたそうな顔して」

「……………お前は、オレには勿体ないぐらい良い女だなんて」

「何それ、ふふっ、告白もまだなのに自分の女扱い？ ちよっと自惚れすぎじゃない？」

「自惚れされてくれッ!! じゃないと死ぬぞ？ オレ、お前が居ないと死ぬぞ!」

「うーん、誰かさんがちゃんと言ってくれないからなあ、ちよっと分かんないなあ、ね、ね、何かわたしに言う事ない？ 言ってくれたらさあ、何か言うかもしれないわよ?」

ニマニマと笑う理子に、アキラはぐぬぬと唸って。

今、告白するのは違う気がする。

なんかこう、もつと違う雰囲気であるべきだ。

「はあ〜?? それを言うならお前からじゃねえの?? ほら言ってみろよ、ちゃんと答えるからよッ」

「いーえ、アンタが先よ、わたしは後で、嬉しいでしょ? 男を立ててあげてんのよ?」

「レディファーストって知ってるか? テメエが先に言うべきだろ」

「ふふん、何言われても効果ありませーん! 今のアンタは恋人でもないのに、わたしのおっぱいに癒されてるダメ人間だもん、ねえ、おっぱい大好き赤ちゃんのアキラちゃん? 先に何か言うべきなのはドツチかなあ〜ッ」

「……………うぐぐッ!!」

楽しそうに煽る理子に、アキラは悔しそうにするしかなくて。

ここからの反撃、逆転、理子から告白させるにはどうすればいい。この勢いのまま言葉にしてしまった方が良いのか、それとも。

「———はい、残念! 時間切れね、そろそろベッドから起きて朝ご飯か日替わりクエストしましょ」

「……………嫌だッ!!」

「はい? アンタ何言ってるの?」

怪訝な顔をする理子に、アキラは正々堂々と言った。

こうなったら恥も何もない、今の己の欲求を素直に伝えるだけだ。

「後五分…………いや、三十分だけでも良い」

「何が?」

「お前の巨乳に———もっと顔を埋めさせてくれ!! 出来るなら『ぱふぱふ』して欲しいし匂いも嗅ぎたい!! 具体的には胸の谷間の汗とか舐めたい!!」

「……………へえ〜、そう……、アンタはそーくるんだあ」

次の瞬間、ゴゴゴと音が聞こえてきそうなぐらいの表情で理子は拳を握り。

「成敗!! いい加減にしろっ!! このダメ男っ!!」

「おがあああああッ!? や、やめッ!! こめかみをグリグリするんじゃないええええええ!! 痛いッ、脳味噌でるッ!? あだだだだだだだだだッ!!」

「はい、アキラちゃん、お望みのぱふぱふよろしく、後三十分ね」
「ごめん、すまん、謝るからッ!! 理子様マジで止めろオ!! あ、頭が
あああああああッ、畜生!! 倍返しだテメエのわき腹くすぐって
やるからなッ!!」

二人は子供の喧嘩なのか恋人のじゃれあいなのか、判別しがたい時
間を過ぎし。

結局、朝食を終えたのは一時間後。

そして。

「……………なあ、何で今日の日替わりクエストがクリアされてん
だ?? なあおい天使のオッサン? 見てるんだろ? 何か言えよお
おおおおおおおッ!!」

「うううううっ、天使のオッサンめえええええ!! 次に会ったら
一発ぶん殴ってやるうっ!!」

二人が目にした物、それは。

『ケンカップルが喧嘩しつつイチャイチャしてるの見たいです、報酬
は弾みます、貴方達にも悪い話ではない筈です。では良いケンカッ
ルぶりを頼みます』

等という、もはや趣味嗜好を隠さなくなった文言。

アキラも理子も顔を真っ赤にして拳を握り、ふるふると震える。

一通り文句を叫んだ彼らは、顔を見合わせると。

「……………取りあえず昼まで自由行動で」

「異議なし」

「オレは朝寝すつから」

「おつけー、じゃあタブレットは使わせて貰うわ。…………あ、ゼクシイは
勝手に読んでも良いわよ」

「……………気が向いたらな」

そして彼がベッドに潜り込んだのを確認すると、彼女はタブレット
を操作してメールを作成する。

(今朝のコトでよく理解したわ、ええ、もう間違えない)

ちゃんとした関係にならない限り、アキラの暴走は止まらない。

そして、アキラの言葉を待っていれば何時になるか分からない。

(わたしから告白しても良いけど……、ええ、それじゃあ不平等だわ)
彼が男として、理子からの告白を望んでいる節があるのは理解を示す。

だが彼女としても、女としてアキラからの告白が欲しい。
その両方を満たすならば、そして。

(——決めたわ、勝負をかける)

どうしようも無く、言い訳できない状況を作る。

その為には、天使のオッサンの協力が不可欠で。

(ふふふふ……、喜んで協力してくれるわよねえ天使のオッサン？)

アンタなら——出来る筈よ)

アキラがふて寝する側で、理子の企みが始動したのであった。

クエスト16 / 天使のお薬

——セックスしないと出られない部屋・8日目。

天使のオツサンは、理子から送られた要望に頭を悩ませていた。彼女の提案は、彼女とアキラの関係を進展させるのに有効であるように思えたが。

「しかし理子はん……ちよつと劇物でおまへんかコレ……??」

だが楽しい、実行すればとても尊いモノが見れるだろう。

天使はそう確信するが、一歩間違えれば関係の破綻に繋がる。

ここは、慎重に考えなければいけない。

「まったく……お二人には驚かされまつせ、いやーホンマ今まで一番楽しいお二人でんがな！ 何処までも粘ろうと拒否する癖に、一歩づつお互いの関係を深めていく……ああ、尊みエネルギーの後味がこんなにエエとは——!! でもそれはそれ、これはこれでんがな理子はん、………悩みますなあ」

もし彼女の要望を通し、そして良い結果が得られたのなら。

それは二人が、この部屋から出て行く事を意味する。

天使のオツサンにとっても喜ばしい事ではあるが、一抹の寂しさもあつて。

「でも、……ここは巢立つ所やさかい。うん、——ガンバやでお二人さん!!」

何組もの恋人達を成立させ、地道に人口を増やす事が天使のオツサンの使命。

別れの日に近い、また一組のカップルが巢立つ。

喜ばしい事ではないか、と涙ぐみながら天使は彼女の要望通りに手配をして。

「ぐふっ、ぐへへへへへっ、じゅるり、今度はどんな尊いもんが見れるんやろなあ……!!」

——そして朝、食事を終えた二人が見た物は。

『相手の心の声が聞こえる薬を飲みましょう、効果は一時間。グッド

ラック」

は、とアキラの喉から掠れた声が漏れた。

今日の日替わりクエストは、いつも以上に訳が分からない。

だが、天使のオツサンという超常的存在が用意した物なら本当に効果がある事であり。

「なんでッ、だあああああああああああああああああああああああああああああああッ!!」

「へー、ふくん、こんなのでねえ……」

「おい理子ッ、何でテメエはそう冷静にしてられるんだよ!! 相手の心の声だぞ?? うわあああああああああッ、マジかッ、マジかよお おおおおおおおおおお!!」

アキラとしては頭を抱えるしかない、だってそうだ。

もし飲んでしまえば、己の内側に秘めたアレやソレな感情がダダ漏れであり。

（——いや、つまりそれはコイツも同じ。なら……い、いやいやッ!? ダメだろそんなの!!）

何というか、そういう薬に頼るのはダメだと彼としては思うのだ。彼女から自発的に、或いは自分の言葉で聞き出すことが重要なのではないか。

「で、何時のむ? わたしは今からでも大丈夫よ」

「待て待て待て、早まるな、頼むから待ってええええええええええええええええ!!」

「面白いを通り越して、いつそ哀れなぐらいに必死ねアンタ」

「必死にもなるだろ!! だって心の声だぞ!? それって本音とかだろ!! お前だって嫌だろうが!!」

薬の入った小瓶を持つ彼女の手を両手で掴み、アキラは血走った目で理子に迫った。

しかし、彼女はさらりと。

「わたしは最終的に処女を喪うリスクがあんのよ? それなら心の声ぐらいどうってコトないでしょ」

「——う、ぐッ、そ、それを言われるとだな……」

黙りつつも飲みたくないと言ったと全身で告げる彼に対し、理子の態度は冷静に見えた。

だが。

(うとうとううとうとうつ、このバカアキラ!! 誰が誰の為に仕組んだと思ってるのよっ!! 心の声がアンタに聞こえちゃうだなんて、恥ずかしくないワケが無いでしょうがっ!!)

彼女とて乙女だ、いざ目の前にしてみれば躊躇いも恥じらいもあつて。

だが、飲まなければ関係は進まない。

理子は全身全霊で冷静さを保ちながら、余裕たっぷりに提案した。

「ま、楽しそうだし飲みましょ。どーせ一時間で終わるんだから」

「だから待て、待ってください理子様。こう考えようぜツ、一時間なら日付が変わる一時間前に飲んで、飲んだら寝る! これだ!!」

「それなら今から飲んでゲームした方が楽しそうじゃない?」

「——それだツ、理子、お前天才じゃ……って流されるかよ畜生ツ!! 飲んだら最後だぞ? 分かってんのか? 飲んだらお終いだぞ??」

主に、アキラの尊厳的な意味で。

この部屋に来てから、どれだけ彼女に対し邪な念を抱いているのか。

どれだけ、制御出来ない好意を、暴走してる恋情を、どれだけ、どれだけ、どれだけ。

そんな感情を知られるのは、出来るだけ少なくしたい。

(その意味では、ゲームすんのは有効かもしれねえがさあ……いやダメだろ)

仮にボードゲームをするとしよう、ならば確かにゲームの駆け引きが楽しくなるかもしれない。

だが。

(オレが対面に座るお前の胸の谷間とか、へそチラとか、おっぱい揉みてえとかキスしてえとか、ちよつとした拍子に考えた事が筒抜けになるって事だろ??)

仮に switchなどで対戦ゲームをするとしよう、当然、視線は画面かもしれないが。

(そっち系してる時の距離が近いんだよ teme は!!) なんて隣なんだよ肩は触れるし良い匂いするし!! 興奮したらバシバシ叩いてくるし!! リアル妨害しかけてきたり時には楽だからってオレの膝に頭を乗っけたり、オレの頭におっぱい乗っけたり好き放題じゃねえか!!)

耐えられない、色々ピンク色が溢れてしまう。

ならば当然、それが伝わる訳で。

「なら妥協案と行こうぜ、オレは寝る一時間前に飲む。お前は好きな時に飲めよ」

「え、嫌よそんなの。全然面白くないわ、それに、一度アンタの心の中を見てみたかったのよね、あー、学校で唯一の童貞はいつたいどんな思考してるのかしら?」

「は? 待て、待ってくれ、今、学校で唯一の童貞とか言ったか?」

「言ったわよ、男子は知らないでしょうけど。女の子には女の子のネットワークがあんのよ。——ウチのガッコ、童貞ってアンタだけよマジで」

「~~~~~ツ!? ば、バカなアイツらがツ!? 恋人いないって」

アキラ達の通う高校、生徒総数三〇人で廃校疑惑があれど何故か存続してるド田舎校。

同級生達に限っても、七人中七人が恋人はいない筈で。

愕然とする彼に、理子は呆れたように告げた。

「こっそり付き合ってたたり、町でナンパしたりとかで、マジでアンタだけみたいよ童貞は」

「……………ち、ちなみに、そう、いや、オレは信じてるぞ? でも

一応というかだな、うん、こんな事を聞けばお前は絶対に怒るだろうけど——」

「はつきり言えよ? ヘタレでダメなアキラだもん、どーせ予想はつくし」

「そのお……………理子様は、お付き合いなされてる方とか、以前交際な

さってた方とか、処女膜だとかは……?？」

「はあ………アンタねえ、いや分かってたけども、殴られても仕方ないコト言ってるの分かってるわよね?！」

予想通りとはいえ、腹立たしいものは腹立たしい。

額に青筋を浮かべながら呆れた顔で、拳を握りしめる理子にアキラは平伏するしかなく。

「殴っても蹴っても良いから教えてくれツ!!」

「嫌よ、ま、アンタがそれを確かめる方法は二つね。——わたしを抱くか、薬を飲むかよ」

「そこを何とか!! オレの全部やるから!!」

「そんな口約束なんて信じませーん、というかさ、その前に色々あるでしょうが、そもそもどれだけ一緒に居ると思ってるの? 何で不安になるワケ?！」

「そ、それは——」

不安になつてるとは少し違う、この部屋に来てから、彼女を意識してしまつてから。

他の男の、それも可能性があるだけで。

とても、否、かなり、非常に、狭量になっているのだ。

「不安じゃない? じゃあ嫉妬? 同じコトよ」

「でも——」

「——知りたいって気持ちは理解するけどね、アンタが本当に童貞かどうか知らないし。だから………飲もうって言ってるのよ」

「理子……」

頬を赤く染めて、ぶつきらぼうに言った彼女に。

アキラは、思わず抱きしめたくなくなった。

けれど、本当にそうして良いのか迷つて。

「………意気地なし」

「ツ! ああもうツ、分かってくれよ!! こんなに使わなくても言葉にしたいんだよ!!」

「はあっ!?! 分からないわよ!! こないだからそればっかじゃん!!」

何も言わないし強引に押し倒すワケでもないし!! 言わなきゃ分か

んないわよ!!」

「うぐツ~~~~!! そ、それは、それはだなあツ……………」

「ははっ、ほら、アンタは何も言ってくれないじゃない……………」

口ごもるアキラを前に、理子は俯いた。

彼は己の事を好きだと、愛してくれていると思っていた。

前まではそうじゃなくても、この部屋に来てからは確かにそうだと
思っていた。

(でも、本当に? 本当にアキラはわたしのコトが…………)

鼻の奥がツンとなる、目頭が熱くなる。

頬に一筋、水滴が流れるのを感じた。

きゅつと胸が締まって、逃げ出したいぐらい息苦しくて。

「理子、お前…………」

「ねえアキラ、わたしってアンタの何なわけ? どうして何も言ってくれないの? わたしじゃダメなの?」

「ちがッ、それは違うツ!!」

「何が違うのよ!! いやっ、わたしに触るな!! 嫌い嫌い嫌い、アンタなんて大嫌いなんだから!! 大嫌いなんだからあ……………っ
!」

泣きながら睨む理子は、右手首をアキラに掴まれ。

残る左手でポカポカと彼の胸板を叩く、力なく何度も何度も、啜り泣きながら叩く。

「ばか、ばか、ばか、嫌いよ、アンタなんか、アキラなんか…………大嫌い、大嫌いなよ」

(オレは——何をやってるんだツ?)

彼女のそんな姿を見て、聞いて、叩かれて、そのままいいのだからか。

否、否、否、断じて否。

今この時に言わなければ、何時、言うというのか。

——アキラが覚悟を決めた瞬間だった。

「嫌い嫌い嫌い、……………嘘、嘘よ——好き、ホントは大好きなの、アキラ…………」

「ッ、くくくくあ、理子!!」

「っ!?!」

その瞬間、彼女は目を見開いて驚き。

瞼をゆっくりと閉じ、叩いていた手は彼のTシャツをギュツと掴んだ。

アキラは、理子にキスをしたのだった。

クエスト17／心の証明

初めてのキスは、とても柔らかかった。

互いの唇を軽く触れ合わせるだけの、稚拙なキス。でも不思議と、心は満たされて。

(もつと……コイツと、オレはずっと、こうしたかったんだ)

(キス、あ、今、わたし……キス、されてる——)

とくんと、お互いの心音が重なるような錯覚。

思考が感触に支配される、今まで考えていた葛藤が吹き飛ぶ。

一秒、二秒、三秒、時が過ぎる、あるいは永遠にキスしていたのだろうか。

——二人は、そつと顔を離して。

「理子……」

「……アキラ」

名前を呼ぶだけで通じ合った、いつの間にかアキラと理子の指は絡み合い。

瞳の中にはお互い以外、何も写っていない。

そつと顔を近づけて、もう一度。

「——まだ」

「聞かないで、ばか……」

二度、三度、四度、五度、それ以外のやり方なんて頭に無い。

ただ、唇の先に相手の温もりを感じたくて。

——最後に一度だけ強く押しつけ、二人は顔を離した。

(言わないと、オレの気持ちをお前に……)

(アキラ……)

期待に濡れた理子の瞳、彼女は無意識に胸の前で祈るように手を組む。

その手をアキラは、宝物を扱うような手つきで優しく両手で包み込み。

「好きだ、愛してる理子。……オレの恋人になってくれ」

「くくくあ、う、そ、そんな、急よ、そう急なの、アンタは、いつも……」

「オレは言った、だから答えをくれ」

「わた、わたしは、わたしも——っ」

耳まで真つ赤にした理子は、ぱくぱくと口を動かした。

声は出ない、出すことが出来ないのだ。

(こ、こんなにつ、言うだけなのにつ、好きって、はいつて、恋人になりますって、そう言うだけなのに)

胸がいつぱいで言葉が出てこない、どうやって声を出していたかさえ分からない程、甘く苦しい。

「あ、うう、そ、その、……ううううくくく」

「ゆっくりで良い、素直な気持ちを聞かせてくれ……照れてるお前が可愛すぎてオレは何時までも待てる」

(なんでそんなにサラっと言えるのよアンタはっ!!)

「言えないか？ なら言えるようになるまで、落ち着くまでキスするぜ」

(それでどうやって落ち着けっ言うのよおおおおおおおおおおおにおおおおっ!?)

うーうーと唸りながら、これ以上キスされるなんてと理子はアキラに抱きついて。

そんな彼女の頭を、彼は微笑みながら撫でる。

(どうして、いきなりキスなんか……それに本当に？ わたしをす、好きだって、愛してるって)

信じられない訳じゃない、だがアキラからの告白は想像していたよりもっと威力があつて、破壊力抜群で。

ドキドキと胸のときめきが止まらない、バクバクと息苦しいぐらい心臓の音がうるさい。

(——嗚呼、素直になっただけでこんなに幸せだなんてな。まったく、何でコイツは可愛いんだ？ 天使のオッサンより天使だろ、理子マジ天使、オレだけの天使、ぜってー誰にも触らせねえ、こんな理子は誰にも見せねえ、オレだけのモンだ)

この可愛い生き物を、どうやって愛でようか。
アキラはニマニマと幸せを噛みしめながら、ふと気づく。
そう言えば、便利な物があったじゃないかと。

「——あ」
彼女から少し離れた瞬間、その寂しそうな表情にアキラは愛情を高ぶらせ。

テーブルの上にある天使の薬を、相手の心が伝わる薬を手にとつて。

「ちよつと待ってろ、お前にはオレの気持ちの全てを伝えたいからな、
——ぐく、ぐく、ふはッ」

「っ!? う、えっ、くくくっ!!」

「そんで、だ。——ん」

「くくくっ!? んんんんんっ!? ん、ーっ!!」

アキラは己の分の薬を飲み干すと、理子の分を口に含み。

彼女の所に戻ると、有無を言わさず口移しで飲ませる。

『ひぎやあああああああああつ、あ、ああつ、うううううつ、
飲んじやったっ!? 飲んじやったあああああああ!!』

『お、こんな風に聞こえるのか』

『なんでそんなに冷静なのよ!! とうか口移しって、何処でそんな
ん覚えてきたのよ!』

『少女マンガ』

『禁止いっ!! アンタ金輪際、少女マンガ禁止なんだからね!!』

うがーと半泣きで睨みながら抱きつく理子、すると当然の如く巨乳も押しつけられる訳で。

だからこれは、男として正常な心だ。

『うっほ、おっばい!! 理子のおっばい!! これから好きなだけ揉める理子のおっばい!!』

『だれが揉ませるかバカ!! ——はうあっ!? も、もしやアンタ、体目当てで……!!』

後ずさって胸を腕で隠す理子、しかして平均よりかなり大きい乳房を隠せる筈がなく。

むしろ反対に、強調させてしまう始末。

そしてそれが、ストレートに伝わってしまった。

『変態変態変態!! ばかばかばか!! なんて発情してるのよスケベ猿!!』

『男として当然だが? テメエのような美少女のおっぱいだぞ?? しかも巨乳だぞ?? 愛しい彼女の巨乳とか発情するしかねえだろ』

『まーだーでーすーっ、まだわたしは返事してませーん!! 超好きだし愛してるしキスしちゃったし恋人同然って思ってるけど、まだ返事してないもーんっ!!』

『じーん、愛してるって、超好きだって、オレに人生の春が来たああああああああああ!!』

『もおおおおおおおおっ!! 何なのよこの薬!! 筒抜けじゃない!! 両思いで嬉しいけど!! いや違うから!! まだ両思いじゃないから愛してるけど好きだけど!!』

『うんうん、愛してるぞ理子、世界の誰より愛してる、——恋人になつてくれ、オレと一生添い遂げてくれ』

『一生とか重いっ!? でも恋人になる!! アキラと付き合うわよ!! ……だからああああああああああ、言っちゃったじゃない!!』

崩れ落ちる理子、思わず万歳斉唱するアキラ。

こんなの思い描いていたロマンチックな告白じゃない、でも嬉しくて口がニヤけてしまう。

そんな顔なんて見せられなくて、彼女は衝動的にベッドに潜り込ん で防衛体制に入った。

『おーい理子? オレの理子く? 顔を見せてくれよー』

『見せられるワケないでしょ!! 嬉しすぎて変な顔になってるから!!』

わたしもアンタの顔見たいけどそれ以上に見せられないから!!』

見るなら強引にしてくれたら自分に言い訳できるから!!』

『いや可愛すぎないかお前?? 取りあえず抱きしめるぞ?』

『ひゃうっ!? なんで心と行動が同時なのよアンタ!! ドキドキしてときめき過ぎて死んじゃうわよわたしっ!!』

『あちやー、すまんオレが魅力的すぎてさ』

伝わってくる、伝わってしまう、どうしようもなく。

手遅れなほど、アキラの愛が伝わってくる。

理子の愛も、彼に伝わって。

『ううっ、くらくらする……アンタの愛が伝わってくるのが伝わる、わたしの愛がアンタに届いてるって……わたしがアキラを好きだって気持ちも伝わってるのが伝わってくる』

『オレもだ、愛が伝わるのが伝わるなんてさ、以心伝心っていうか、これが相思相愛って事なんだな……』

不意に、キスしたいと思った。

だが、キスしたいと思ったのは果たしてどちらだろうか。

そんな思考をする前に、自然とキスしていて。

『………ん、あ……もう、アンタしか、アキラしか見えない』

『オレもだ、でも、もっともっとお前を感じて、オレを感じるお前を知りたい』

こくと理子は頷いて。

ここから先は、もう一つしかない。

もっとも原始的な男女の愛の情交、即ち。

『セックス……するぞ』

『うん………でも、避妊はしてよね、コンドームあるの、こっそり交換してたのがあるから』

『え、ナマじゃダメか?』

『ナマとかあり得くない?』

『えッ?』『えっ!?!』

コンドームを挟んで、理子とアキラは仲良く首を傾げた。

クエスト18／そして部屋は開かれた（なお）

『ここでお預けは辛いんだが?? はよお前にディープキスしたりおっぱい揉みしだきたい』

『そりゃわたしもアンタに抱かれたいわよ? でもその前に意見は一致させておくべきでしょ』

『……………オレはナマでしたい!!』

『このおバカ!! 妊娠したらどーすんのよ!! 高校中退とか嫌だからね!!』

事態は緊迫していた、避妊したい理子と欲望オンリーのアキラ。

残念ながら平行線、セックスに至ろうとする今、欲情しつつある体で喧嘩が始まった。

『だいたいさあ、あの天使が作った部屋よ? うっかりナマでして命申したらどーすんのよ!! まだわたしもアンタも学生なんだし責任取れるって言うの!!』

『結婚は勿論するし金稼いで出産費用も養育費も稼ぐ!! その方法はこれから考える!!』

『実質ノープランじゃない!! ナマでしたいだなんて就職して結婚してから言いなさいっ!!』

『ええ………ナマでさせてくれよお、折角の初めてなんだし安全日とかいう大丈夫な日があるって聞かせ??』

『天使によつて安全日が危険日だったらどーすんのよ!! そもそも少子化対策の部屋でしょコレっ!! アンタとはセックスしたいけど……………今は妊娠する気ないっつーの!!』

然もあらん、初めてで妊娠とかちよつと人生激動すぎる。

正直な話、子供の少ない田舎暮らしだし、周囲にははよ結婚して子を産めという時代錯誤な風潮も一応はある。

実際、妊娠したら双方の両親親族ともにお祭り騒ぎで祝福してくれるだろう。

『……………確かに、お前の気持ちは分かる。オレにもちゃんと伝わってる、

けどな……伝わってるだろ？ オレの気持ちも』

『は?? いやアンタさあ……「無理矢理にでも孕ませてオレの女にしたい、骨の髄までオレの女にしたい、オレのチンコでメロメロにしたい、孕め、絶対に孕ませる、ナマでやったら絶対気持ち良い」って、——独占欲と性欲の固まりじゃないの!! わたしへの思いやりは何処やった!!』

『……………丁寧にくんニとかしてじっくり濡らしたら、処女を奪う時でも痛くない』

『そつちの思いやりじゃない!! このクソ童貞が!! 精子を頭に詰まらせてるんじゃないわよっ!!』

うがーと、彼女は怒っている。

だが言っている事は道理だ、アキラはとても反論出来そうにない。ならば、譲るのは誰かなんて明白だ。

『オレとしてはナマでしたい、だが……お前を傷つけたくない、妥協……すべきなんだろうな』

『当たり前でしょ、そりやあさ、わたしの体がアンタにとって魅力的で、誰にも奪われたくないってマーケティングしたいのは理解出来るけどさ。……子供はまだ、早いと思うの、だってまだまだ子供でしょアキラも、わたしも』

『スマン、ちよつと冷静じゃなかった。——嗚呼、理子は本当に良い女だな、こんな素晴らしいヤツを口説かなかったなんて部屋に来る前のオレはどうかしてた』

『ちよつ、ちよつといきなり口説かないですよ!? ……嬉しいけど、うん、あんま誉めると何でもしてあげちゃいたくなるから、その、誉めるなばーか』

コンドームを握りしめながら恥ずかしそうに視線を反らす理子に、アキラとしては至福しかない。

どうして彼女は、こんなにも魅力的なのか。

宇宙の最も大いなる謎である事に、間違いないだろう。

『好きだ。愛してる。この世で最も輝いてる女はお前だ。愛おしくてたまらない、嗚呼、どうして理子はそんなに可愛いんだ……』

『だ、だからあつ!?!』

『聞いてくれ、お前のその髪は美しく思える、綺麗に見えるように日々ちよつとずつ変化を付けたり、時には切りそろえたり、そうする努力は……オレの為だったって、誤解しても良いか?』

『つ!?! あ、う……』

『お前は胸が大きいから、だから少しでも太って見えないように体重に気をつけたり、可愛い下着を買う金を為に家の手伝いを頑張ってるの、凄く立派だと思う。——そんな、お前の努力の結晶である体に触れても良いなんてさ……お前に好かれてるって、自惚れてもいいか?』

ばすばすと理子は枕を掴んでアキラを殴る、彼はそれを甘んじて受けながら真剣な目をした。

まだ言い足りない、もつと彼女に伝えたい。

『前に化粧の濃さを聞いてきた事があつたよな、それってオレの好みに合わせてくれてるって、そうなんだろう? 嗚呼、綺麗だ、いつも手入れを欠かさないその肌は何より綺麗だ』

『うゝゝゝ………ばか、ばかばかばかあ』

『お前の瞳を気に入ってる、いつもオレを見て、喜びも悲しみも全部全部、まっすぐに伝えてくるその目が』

『言葉に……しすぎ、ね、もう恥ずかしくて死にそうだから止めよ?』

嬉しくて死んじやうから、もうこの世で最高の女なんだって勘違いしちゃうから、ね?』

潤んだ目で懇願する理子の手を握り、アキラは首を横に振った。

まだだ、まだ色々言いたいことがある。

『声も好きだ、実はさ……今まで言わなかったけど、オレはもう目覚まして起きれないんだ、お前の元気な声で起こされないとダメなんだ、嗚呼、お前がオレの名前を呼ぶその声色が好きなんだ、時に甘く、時にとげとげしく、でも、親しみある温もりで呼んでくれる声が、……愛してる』

『………新手の羞恥プレイよこれ、へんたい、アキラのへんたい』

『何より……お前の心が好きだ、いつも前向きでオレを励ましてくれ』

るお前の心が、オレを受け止めてくれるお前の心が、オレの側にいてくれる理子を何より嬉しく思う。——オレは、お前に愛される資格があるのか?』

嗚呼、とため息が漏れた、だつてそうだ。

アキラが理子にしてやれたのは、どれだけの事だっただろうか。

ただ漫然と側にいて、側に居てくれる事に甘んじて。

何もしてこなかった、そう彼は認識していて。

『……………ばかね、アキラは。本当にばかよ、資格なんて必要ないの、アンタがアンタだから、わたしは側にいるし好きなのよ』

『理子…………』

『だからさ、もっと胸を張りなさいよ。アキラが隣に居るから、今のわたしが居るの、アンタを好きになった、愛してるわたしが居るの』

アキラに微笑み、繋いだ手に軽くキスをする。

こんなに愛の言葉を受けて、自分も言わないのは嘘だと。

どうしようもなく、手遅れな程に己を愛する彼に少しでも答えるように。

『ありがとう、あの事故のお陰でわたしは生きているの、こうして今、笑つてアンタの側に居られるのよ』

それだけじゃない。

『いつも喧嘩してくれて嬉しかった、ありのままのアキラをわたしに見せてくれて、突然押し掛けて徹夜で遊んでもアンタと一緒に楽しんでくれた…………』

依存していた訳じゃない、けれどアキラに理子は。

『甘えてたの、アキラは何でもわたしと一緒にしてくれたから、夜中に何キロも離れたコンビニにアイスを買に行つた時もさ、自転車の後ろに乗つけてくれて。学校でも他の男子の視線から守ってくれてるの……………実は知ってた、気づかないフリをしてただけよ』

『……………嬉しい、ああ、嬉しい、幸せだつて言葉しか出てこねえ』

『アンタが好きになるのは、わたしだけって……………違う可能性だってあったかもしれないのに、そう思いこんで、今に甘えてたの、アンタの気持ちに甘えてたの』

だから。

『これからは、わたしに甘えなさい、ううん、甘えてよアキラ。アンタがダメな時は一緒に考えたい、アンタが望むならさ、それはわたしの望みなの』

『——ッ、理子!!』

『ふふっ、ちよつと苦しい……強く抱きしめすぎよ。でも……嬉しい、こうやってアンタに抱きしめられると安心する、ドキドキする、アンタを感じたい、何処までも行けるってそう思うの。——だから、愛される資格だなんて言わないで、そんなもの何処にも無いんだから、わたしはアンタを愛してる、アンタもわたしを愛してる……それだけで良いのよ、きつとさ』

なんて嬉しいのだろうか、アキラは語彙力を喪っていた。

この喜びをどう言い表せばいい、この感謝をどう伝えればいい。この愛を、どうやったら伝えられる。

『……………わたしも同じ、アンタに伝えたい』

今のアキラには、理子の気持ちも伝わってくる。

彼と同じく、でも強いから、しっかり言葉で伝えてくれる。

その事実が、とても愛おしい。

『これ……付けてよ、……………違う、わたしが付けるから……………もう今は言葉は要らないから、ね？ めいっばい愛してよアキラ——』

その言葉を切っ掛けに、彼は愛欲で動く獣になった。

余す所なく理子という存在を丁寧に丹念に貪り、愛する獣になった。

やがて、部屋に蜜のような甘く粘った空気が満ちた時。

『——これで、いいわ』

『なら、行くぞ……………ッ!』

アキラと理子は、本当の意味で初めてを交換した。

何度も何度も、時の進みを忘れて。

どちらも、愛欲のみが支配する野獣のように。

そして、いつの間にか泥のように二人は眠りに落ちた。

見れば見る程に、理子の姿が美しく感じて。

(……………待て、こんなに綺麗すぎると他のヤツが視線を向けるんじゃないかねえのか??)

気づいてしまった、こんなに魅力的な女の子を放っておく男が存在するのだろうか。

守らなければ、独占しなければ、危機感がアキラを襲う。

今すぐ行動しなければと、心を突き動かす。

「——理子は、誰にも渡さない、触れさせない、コイツの声を聞いて良いのはオレだけだ、コイツを見るのはオレだけだ、コイツの目に写るのも、コイツが触れるのも、コイツが聞くのも、……………全部、オレだけだ、嗚呼、オレだけにしなきゃ」

彼はぶつぶつと呟きながら、タブレットから交換ページやルールを読み込んでいく。

独占するにはどうしたら良いか、考えを練り上げていく。

——セックスしないと出られない部屋・九日目。

「……………え?」

朝起きた理子は、あくびをしつつ扉が開くかどうか確かめて。

開くはずである、タブレットのメッセージも見た。

だが、ガチャガチャと動かしてもドアノブは動かさず。

「何でまだ開かないのよおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおお!!」

理子は思わず、大声で叫んでしまったのであった。

クエスト19／セックスしても出られない、セックスしないと出られない部屋

何度がちやがちやと捻つても、ドアノブは一向に回らない。

脱出できる筈なのに、出来ない。

その事実が理子に焦燥感を与える、苛立たせる。

「——ちよつとアキラっ、起きなさいって!!　ぐーたら寝てる場合じゃないわよ!!」

「ん……………あー…………、朝っぱらからウルセーぞ理子…………??」

「ほらもうっ、起きてっ、起きてっば!!　わたし達出られなくなってるのよ!!」

「ああん??　いやセックスしただろ…………あー…………おっさんが気づいてないとか」

「ほらこれ見なさいよ!!　ちゃんとメッセージ来てるじゃない!!」

「どれどれ?」

タブレットに送られたメッセージをじっくりと読むアキラ、理子は同じく憤慨してくれるものと思っていたが。

予想に反して、彼はとても冷静に。

「ま、開かないのはしようがねえ、取り敢えずメシでも食ってクールダウンしようぜ?」

「……………アンタ、意外と冷静ね」

「いや焦ったってしようがないだろ、——ああ、もしかしてそういう名目でセックスの続きするか?」

「っ!?　ば、ばか!!　そういう事は部屋から出てからよっ!!」

「嬉しいぜ、戻ったらまたお前と愛せるのか。ま、オレとしてはさ、もうちよいこの部屋でゆっくりとお前を可愛がりたいけどな」

童貞を捨てると、こうも余裕があるものだろうか。

動揺一つ見せず、理子をからかうアキラを彼女はジトっと見据えて。

「——変よ、何でコイツはこんなに余裕たっぷりっていうか、むしろ歓迎してる雰囲気まであんのよ」

男には賢者タイムがあると聞く、もしそれが本当ならば。

「昨晚、かなりの数のコンドームを消費した彼はとても冷静であると言えるが。」

「……………あれっ？ コンドームちゃんと捨てたっけ？ それに

——ベッドも綺麗よね」

違和感がある、何か見落としている様な。

知らない所で、何かが起こってしまった様な

見渡すと、部屋は妙に綺麗で何故か角に缶詰の山が。

「——コイツ、何か知ってるわね」

「あー……気づかれたか？ いや、まだ確証は無い筈だ」

アキラと理子の間で、見えない戦いが始まる。

「知っていて知らんぷりする理由って何？ 天使のオツサンに何か言われた？ 或いは——」

「悪手だつて分かってんだよ、でも……いやしょーがねえだろう??」

「——犯人はアキラ、でも……その理由は何？ セックスしちやつたし、恋人にもなったんだから……」

「絶対に怒る、確信できる、……………勢いややんなきゃ……でもさ、冷静でもきつと同じだろ」

素知らぬ顔で朝食を選ぶアキラに、理子はズカズカと近づく。

考えていても仕方がない、ならば。

「言え、言いなさい、天使のオツサンね？ どーせまた変な日替わりクエストでもあるんでしょ」

「い、いやあ?? オレは何も聞いてないぜー」

「嘘。何年幼馴染みやつてると思ってたんだよ、それに……………ここ、恋人になつたんだしつ、それぐらいお見通しなのよっ!!」

「り、理子……ううツ、スマン、で、でも言いたくねえツ!!」

「はあっ!? 何よそれっ!!」

彼女の言葉は嬉しかった、だがアキラとしては言えるわけがない。だつて。

「アキラはんは、独占欲と嫉妬を拗らせて理子はんをこの部屋に監禁したんや、まー、許すなどは言いまへんが。ちよつとは汲み取ってやってください」

「ッ!? 天使のオッサンんんんんんんッ??」

「ちよつとアキラなによそれっ!? というか天使のオッサン!? なんでアンタそんなの許可してんのよっ!! それに急に出てこないでビックリするから!!」

「すまへんなあ、いっつも見てるからつい前もって知らせるの忘れてなあ」

突然の暴露に、アキラは顔面蒼白になった。

ヤバイ、これはヤバイ。

あわあわと震える彼を横目に、天使のオッサンは理子に説明した。

「いやね、最初はちやーんと扉が開いたんよ。でもアキラはんが自己目標クリアのお願い使うって言い出してな?」

「それで普通でする!? 止めなさいよ天使でしょうが!! このままだとシンプルに人口が二人分減るでしょうが!!」

「まあまあ、一応新しいルールがあるんですわ」

天使のオッサンが語ったルールは以下の通りだった。

- ・アキラが心から願うまで扉は開かない
- ・危険時の催淫ガスは以前のまま
- ・ポイント交換のレートは倍増
- ・今まで取得したポイントとアイテムはリセット、ゼロに戻ります
(※取得した一部のアイテムはそのままです)

・日替わりクエストの廃止、セックスしてポイントを入手してください

・生命の危険の際は、担当天使が責任をもって対応します

この事を知った理子は、ぷるぷると怒りに震えて。

「このクソバカアキラああああああ!! アンタ何してんの!? 本当に何してくれてんの!? ばっかじゃないの!? ねえ、何か言いなさいよ!!」

「正直すまんかった、でも後悔してない、だって——オレは!! 理

子を!! 独占してえ!!」

「ほな、オツサンは監視ルームに戻りますさかい。仲良うしてえなく。いやあ追加で尊みエネルギー貰えるなんて嬉しいですわあ!! お二人の幸せを願ってるさかいに、ほな!!」

「……」

険悪な雰囲気を感じて、大慌てで天使は消える。

残るは冷や汗ダラダラのアキラと、怒髪天で般若の形相な理子。

「アンタねえ……恋人になってもまだわたしが信頼ならないっての?」

「違うツ!! お前の事は心配してない……これは、オレの、オレの心が弱い所為なんだ……」

「……言ってみなさいよ」

「オレはな……お前が愛おしすぎるんだ、お前が考えている何倍もお前の事を愛している、耐えられないんだ、お前が誰かに目に写っただけでソイツに殴りかかってしまいそうで……」

「本音は?」

「もう外の世界なんていらねえぜ!! オレはこのまま理子と一生イチャイチャでドロドロなセックスして暮らす!! 世界にはオレとお前だけ居れば良いツ!! ——……あ」

ヤベツ、と口を塞いだが後の祭りだ。

アキラは怒号が飛んでくる事を覚悟したが、理子からは返事が返ってこず。

恐る恐る様子を伺うと、彼女は妙に体をクネらせ。

「ええ〜、もー、アキラったら……そんなにわたしのコトがす、好きだなんて……、愛してるだなんて……——こほんっ!! んんっ!! ち、違うわよ、ちよつと嬉しいだなんて思ってたんだから!! そりやあわたしもさ、もう何日か二人っきりの時間をゆつくり過ごしたいなあって思ったけども!!」

「——ツ!? じゃあ!!」

「許すかおバカ!! 家に帰ってからでも良いでしょうが!! 行動に移す前にわたしに言いなさいよ却下してあげるから!!」

「いや却下されると思ったから、お前が寝てる間にな?」

「良い仕事したと言わんばかりの顔の彼に、理子は頭痛がしてくる思
いだ。」

どうしてくれよう、本当に手の掛かる恋人だ。

(ま、まあ? それぐらいアキラにとつてわたしは魅力的だったつて
コトだし? でもねえ、家に帰れないのはちよつと……何時出られる
か分かんないし、ホント一発殴つても許されるわよね? というか
殴つてないわたしは偉いわよね?)

最悪、セックスし続けて彼を満足させて。

という手段があるのは幸いではあるが、問題はそこではない。

このまま部屋から出ても、彼の嫉妬や独占欲で問題が起こるのは明
白だ。

(何か……罰を与えなきや、意識改革もさせないと……)

黙り込んだ理子の姿に、アキラは判決を下される罪人そのものの顔
で神妙に待ち。

(うーん、罰はアレにするとして……)

彼の独占欲と嫉妬を抑えるには、何が必要なのだろうか。

(誰かに盗られるって不安よね、つまり。わたしが幾ら靡かないつて
言つても無駄ね、確たる証拠がいる筈)

幾つか候補はある、恋人というお互いの愛で繋がる関係より強固
な、法でも繋がる夫婦、つまり結婚など。

だが、それを重石にするには足りないかと理子の本能は訴えていた。

「——はあ、答えを出すにはまだつて感じね」

「そのお……理子さん?」

「あ、そうそう。罰としてセックス禁止だから」

「あつ、はい。……うん?? え? ちよつともつかい言つて
くれ」

「聞こえなかった? ねえアキラ、この部屋に居る限りセックスしな
いから、分かった?」

とても晴れやかな笑顔で言われた言葉は、アキラにとって理解した
くない類の物で。

数十秒の間、ポカンと大口を開けた後。

「どおしてだよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおッ!？」

彼は、盛大に膝から崩れ落ちたのだった。

クエスト20 / 尽くす男

——セックスしないと出られない部屋・十日目。

空気は、昨日から引き続き重かった。

セックス禁止令を出した彼女は、アキラと一言も口を聞かず。

(気不味い……メシが缶詰なのがいつそう……くッ

どうにかしないと!!)

(あ、意外と缶詰だけイケるわね。でもそろそろカップ麺も恋しい……、そーなるとセックスしなきゃなのよね、悩ましいわ)

今までの暖かな食事から、部屋の角にどつきり置かれた缶詰へ。

理子が当初予想したより様々なバリエーションがあり、その上で美味だったのは嬉しい予想外ではあったが。

問題はやはりある、アキラの事もあるが。

(娯樂が無くなったのは痛い……、本の一冊でもあれば楽にコイツを無視できるのに!)

無言で無視するにも限度がある、退屈は人を殺しかねない。

寝るにも限度があるし、二人きりの部屋には視線を遮る所が皆無に近く。

(そろそろ、喋るコトぐらいはしてあげましょうか)

(どうする、どうすれば理子の機嫌が治るッ! 死ぬぞ? オレは死ぬぞ?? リコニウムを接種しないと生きていけないんだが??)

飴を与えようとする彼女に対し、アキラは彼女の機嫌をどうやって治すか。

昨日から何度目か分からない、脳内会議を開催した。

(オレに残ってるのは言葉とセックスと、そして……オレ専用のポイント残高だ)

天使のオツサンの説明には無かったが、自己目標達成で得られたポイントは、それぞれの専用ポイントであり。

実の所、それで暖かい食事を出せたのだが。

(どれだけ居るか分からない以上、節約は必須だもんな。アイテムリ

セットに缶詰が含まれない様に交渉して正解だったぜ)

缶詰にかかったポイントは、リセット前の共有ポイントから。

つまり現在の出費はゼロであり、更に言えば。

(理子も自己目標を達成できていたら、ポイントとお願いが残ってるんだよな……でも、使った形跡は無いし)

達成できていないか、そもそも気づいていない、のどちらかだ。

ならばアキラとしては、ルールをひっくり返されない為にも言及する事が出来ない。

(気になるが……今はしかたねえ、オレの手持ちのポイントで何が変えるか、それが問題だ)

アキラは真剣な目で、タブレットの交換ページを調べ。

そして一時間後。

(こ、これだあ~~~~ツ!!)

目当ての物を理子の背後で手に入れたならば、後はどうやって渡すかだ。

機嫌が悪い相手に、口を聞いてくれない相手にどうするか。

今のアキラには、欲望にまみれた秘策があつて。

「……………だーれだツ!!」

「……………——はあ、アンタって本当にバカねえ」

「うおおおおおおおツ!! 理子が喋ったツ!! オレの女神が喋っ

てくれたぞおおおおおツ!!」

「はいはい、嬉しいの分かったから手を退けなさい、凄く邪魔だから」

こころも喜ばれると、戦意が薄らいでしまう。

惚れた弱みとはよく言ったものだ、アキラがそうであるように理子もまた確かに彼を愛している。

誰にも邪魔されず、もう少し恋人になった余韻に二人つきりで浸りたい気分だつて否定できない。

「んで、何なの? セックスはしないわよ」

「そうじゃない、実はちよつとな……プレゼントを用意してたんだ」

「ふっくん、へえ、そーなの、ご機嫌取りに来たってワケ? そのプレゼント代、どつから出したのよポイントはゼロでしょうが」

「勿論、リセット前にだ。事前に天使のオツサンと交渉しといたんだぜ!!」

「あっそ、好きにすれば」

素っ気なく返した彼女であったが、それは嘘だと確信していた。

何故ならば、彼女は彼をずっと監視しており。

(リセット対象に化粧品がなくなくて良かったわ、ま、これも天使のオツサンの想定の内なのかしらね? ——でも、お陰で手鏡を使ってコイツの行動は全て見えてた)

そう、彼がタブレットを操作して交換していた一部始終を。

理子は確かに、その目で目撃していたのだ。

となれば、当然の様に疑問は出てきて。

「んで? 何をくれるって? ま、何をプレゼントされた所でセックス禁止は解かないけどね」

「それを期待してないとは言わん、でも……お前が口を聞いてくれないのは……スゲエ辛いんだ、だからさ、機嫌を取ろうって訳なんだけど、でもそれ以上の事もあつて……いや、オレが先走ってるだけなんだけど」

口ごもるアキラに、理子はおやと眉を動かした。

幼馴染みとしての経験が、恋人としての勘が、女としての嗅覚が、期待しても良いのではと囁く。

(な、流されちゃダメよ……、冷静にならないと、アキラは確かに今、0ポイントなのに何かを交換した)

それは、彼がポイントを保有している事を意味する。

アキラだけが使えるポイントがあつて、理子と共有しているポイントは0のまま。

ならば、その存在とは。

(——ああ、自己目標達成のポイントね。お願い以外にもあつた筈だわ)

確認してはいないが、己にもそれがある筈だ。

自己目標も達成している筈、彼がそれを言わないという事は。

つまり、イニチアシブを取ろうとしているという事で。

「……………ねえアキラ、何を渡そうか当ててみましょうか」

「ツ!? はツ!? 分かるのか!?!」

「分かんないわよそんなもん、——でも、推測なら立てられる」

「……………ハツタリなのは、見え見えだぜ理子」

アキラは彼女の鋭い気迫にたじろいだ、そうだ、これはハツタリに決まってる。

彼が今から渡そうとしているのは、早まったとも言えるが不意打ちであるとも言えた。

きつと彼女ならば、喜んでくれると確信しているが、絶対に予想出来ないとも踏んでいて。

「この部屋に来てから、恋人になってから、見えてきたモノがあるの」
「……………何を」

「アンタの性質よ、わたしのコトとなると途端に臆病で、嫉妬深くて、全てを独占しないと気が済まない弱虫」

「よ、よわッ!?!」
「ホントのコトでしょ? ——そして今、アンタはこう言った『先走ってる』って」

ビクンとアキラの肩が揺れる、その一瞬を理子は見逃さなかった。
正直に言えば、彼の言うとおりハツタリである。

だが、必要なハツタリだ。

(考える時間はあったもの、ええ、痛感したわ閉じこめられたから、——コイツに対抗するにはわたしの方が上だって刻みつけるしかない) だから、何が何でもプレゼントの品を当てなければならぬ。

考えろ、考えろと理子は必死に脳を回転速度を上げる。

「アンタはわたしと恋人になるだけじゃ満足しなかった……………だから閉じこめた、そうね?」

「それが? 何の関係があるんだ?」

「最後まで聞きなさい、——アンタはわたしとの関係をもつと強固にしたい、そして喜ばせたいと思ってる、同時に独占したいとも」

「……………それが? 理解してくれて嬉しいぜ」

二人の間でバチバチと火花が散る、アキラはズボンのポケットに入

れたプレゼントが妙に冷たく感じた。

理子はその雰囲気を感じに読みとって、冷徹に推測を重ねる。

「わたしが喜ぶ、……つまり女性にとって嬉しいコト、そしてアンタにも利益がある、その上で関係を強固に出来て……今、アンタが手に入られるモノは」

「わ、分かるわけがねえッ!!」

「——ポケットを意識したわね? ええ、答えは指輪、ならプロポーズリングね、ペアリングだとアンタは満足しないもの、ピアスはわたしの体を傷つけるから嫌、だからプロポーズリング、ね、間違ってるかしら?」

「~~~~~ッ!?!」

悠然と微笑む理子は、凄みと美しさがあつて。

ゴクリと唾を飲み込んだアキラは、項垂れてため息を一つ。

そしてポケットから、指輪を出して。

「……………当たり前だ、なあ理子、オレとこの先もずっと一緒に居てくれ、結婚して欲しい」

「え、嫌よ。嬉しいけど今のアンタじゃ嫌、恋人関係を解消されなければマシって思いなさいな」

「……………結婚してくれ理子ッ!!」

「だから嫌、いやナイわ、うん、監禁してそれ渡すとか喜ぶ女が居ると思ってるの?? 頭沸いてない?」

バツサリと切られて、アキラの涙腺は思わず緩む。

即座に滂沱の涙を流しながら、彼女の足下に縋り。

「おろろろろろおとおおおおおん、結婚しれくれよ理子おとおおおおおおお!! お前に捨てられたら生きていけないんだよおおおお!! ここからは出せないけどさあ、お前の将来全部オレにくれよ、オレもオレの全てをやるから!!」

「うわっ!?! ちよつと足にしがみついて泣くんじやないわよバカ!!」

ああもうっ、今は受け取れないって言うてんでしようが!! ちよつとは汲み取りなさいよ!!」

「……………なる、ほど?」

それはつまり、違う時であれば大丈夫なのか。

アキラが一抹の安堵を覚えた瞬間であった、彼の手から指輪は奪われて。

「はい、没収」

「いやそりゃねえよ理子ッ!? 受け取らないなら返してくれよ!!」

「は? 女心を無視したペナルティとして没収するの当たり前でしょ、あー、残念だわあ、プロポーズリング欲しかったのになあ、このデザイン良さげだし、ちゃんと受け取りたかったのになあ……」

「おいしいおいしいッ!? なら返せよッ!? もう一度プロポーズせろよおおおおおッ!?」

追いかけてつこが始まる、広いとは言えない部屋の中を二人はぐるぐると走り回って。

とはいえ、理子は女でアキラは男だ。

体格差もあり、彼は彼女のTシャツの裾に指をかけて。

(ははんっ! 奪い返せると思わないコトねっ!! —— アンタが悪いのよアキラ、わたしを本気にさせたアンタがねえっ!!)

次の瞬間、理子はTシャツをするり脱いでデコイにした。

アキラの手には、脱ぎたてホヤホヤのシャツが。

そして目の前には両手をブラの代わりにし、ニヤニヤと笑う彼女の姿。

「——ッ!? ちょッ、理子ッ!? お前なにやってんだよ!!」

「えー、誰かさんがTシャツ持って行ったから手ブラしてるんだけど? ああ、欲情した? ごめんなさいね巨乳美少女で、でも安心して、……この手のどつちかに指輪はあるから」

「ッ!? え、あ、う、くくくッ!! お、おまッ、お前ッ!?」

「いやーピンチだわ、すっごいピンチ、今無理矢理に襲われたら、指輪を取り替えられちゃうし犯されちゃうなー、ピンチだわあ」

あからさまな挑発に、アキラは声無き叫びを上げた。

これは誘いであって誘いではない、無理に取りに行けば彼の理性はぶちんと切れて襲うだろう。

となると、理子は軽蔑どころか恋人解消さえ言い出しかねない。

「くッ、お、オレはどうすれば——」

「もしアンタが紳士なら、わたしが愛してるアキラなら、どっちか片方だけ選んで取り返すコトも出来る筈なんだけどなあ〜」

「ぐうううううッ、狡いぞ teme!! オレはッ、オレはッ!!」

「ほらほら〜、愛しのカノジョが風邪引いちやうわよ〜」

理子は暗に言っているのだ、どっちか片方を選んで正解だったら指輪を返すと。

当然、無理矢理にセックスしない事が大前提であり。

（か、考えろ……、選ぶだけじゃ済まない、あの手ブラを、あの凶悪なわがままオツパイに触れるという事で、そこに隠された指輪を……、ともすれば確実に乳輪も見えるつてのに生殺しでえッ!!）

はあ、はあ、と呼吸が荒くなる。

なんて息苦しいのだ、こんな二者択一が、プレッシャーが存在するののか。

もし間違えれば、理性を保てる自信なんてない。

（だが……、正解でもそれはく〜く〜嗚呼、オレに理性を保てる自信は無い!!）

なんとという、なんとという挑発、誘い。

ここで押し倒せば、もはや二人の関係がどうなるか分からない。

（どうする……どうすれば良いッ!!）

（ふ、ふふふっ、迷え、迷うのよアキラっ!! こっちはノープランなんだからね!! ま、例え押し倒されてセックスになっても事後にワザと泣くからね!! そうじゃなかったらへタレって罵ってやる!!）

そう、これは公平な勝負ではない。

アキラは絶対に理子に無理強いできない、それを計算に入れた圧倒的に彼女に有利な二者択一。

数十秒間、彼は悩みに悩んだ挙げ句。

「……………それは預けとく、目に毒だからとつととシャツ着ろ」

「ふーん、へえ、そーう来るのアンタは」

「ウルセエッ!! 犯されたくなければとつとと着ろよ!!」

「据え膳があるのに押し倒せないへタレ、恋人の手ブラも剥がせない

へタレ、チンコ付いてるワケ??」

反撃したい、大声で言い返したい、だがそれをすれば理子の思う壺だ。

アキラはぐぬぬと唸って、じつと耐えるしかなくて。

その時であった、シャツを着た彼女はさらりと告げて。

「罰として、アンタ明日の昼までご飯抜きね」

「ッ!？」

「なんか文句ある?」

「……………ねえよ畜生!! これで勝ったと思うなよ!!」

捨て台詞を吐いて、アキラはふて寝を開始。

(くそッ、くそくそくそッ、ゼツテエ、ゼツテエに理子とセックスしてやる、強引にでも合意をもぎ取って——滅茶苦茶セックスしてやるッ!!)

(なーんて考えてるんでしょうね、ま、最悪の場合に備えて缶詰を咄嗟に投げる練習でもしておきますか)

かくして、部屋は戦争状態に陥った。

——セックスしないと出られない部屋・十一日目。

その昼である、ようやく食事を許されたアキラは食べ終わった後で。

「————これを見る理子ッ!! 交渉の時間だオラアアアアアアッ!!」

血走った目で、勝負を仕掛けたのであった。

ええ!!」

「うええ……、ちよつと必死過ぎないアンタ??」

余りに必死な様子に、理子としてはちよつと引いてしまう。

己の体が男に、特にアキラにとって魅力的に写っているのは自覚している。

だからこそ禁止令を出したのだ、だが、今の彼は予想以上にギリギリな感じで。

「お前に理解できるか? 超絶美味いご馳走の味を覚えてしまつて、さあ腹一杯食つて良いぞつて時に取り上げられた気持ち……!!」

「わたしを食事に例えるのが気に入らないので却下」

「ごめん、失言だった!! けど聞くけどな、——お前はどうかんだよ、オレとセックスしたくないのかよ!! ちなみにノーつて言われると泣くぞ?? ああん?? 良いのか? みつともなく泣くぞ??」

既に半泣きであるアキラに、理子は地獄より深いため息を吐き出して。

確かに一方的に否というのはフェアではない、何より言葉にしなかつたから部屋に来るまで幼馴染のままだったのだ。

彼女は苦笑をこぼすと、彼の頭をよしよしと撫でる。

「バカね、わたしもアンタとセックスしたいわよ。もつとアキラと一緒にに居たい、だから……こうして誰にも邪魔されずに二人つきりて居たいって気持ちも多少は理解するわ」

「理子!! お前は世界一良い女だ〜ツ!!」

「でもね、それとこれとは別。断りもなくそうしたのは怒ってるし、何より……恋人といえど物で体を許す安い女じゃないわ。——ねえアキラ? アンタが言う世界一良い女って、玩具と引き替えに抱かれる女かしら?」

「それは……」

もつともな話だった、アキラには食い下がる言葉が出てこない。

出てくるはずがない、もし言葉で食い下がるといふなら理子が世界一良い女という己の言葉を、評価を嘘にする事だからだ。

それは己にとって、何より彼女にとって侮辱である。

（――ならどうする、大人しく引き下がって何か変わるのか？）
やり方が間違っていた、それを否定する事はできない。

己の性欲に、愛に負けた、それも否定できない。

その結果が今なのだ、プロポーズを断られ挙げ句の果てに物で釣ろうとし失敗。

（言葉に……しなかったんだな、理子の意志を無視してた）

だから、今からする事はシンプルだ。

アキラは立ち上がると、彼女を抱きしめて。

「うわっぷっ!! ちよつとアキラっ!!」

「――オレが間違ってた、だから正直に言う」

「な、何よ……、色仕掛けなんか通用しないんだからね……っ」

「セックスしたい、何よりも愛おしいお前とセックスして愛し合いたい、お前を……感じていたい、気持ちよくさせたい」

「っ!! す、ストレート過ぎるのよばっ!!」

とくん、と甘い痛みを出してしまった心臓が恨めしい。

己はこんなに簡単な女であったかと、理子は自問自答しかけてしま
う。

流されてはいけない、付き合い立てだし昨夜は控えめに言っ
て悪くなかったが。

「ダメ、か……? なぁお願いだ、オレの女神……どうかオレにお前を
愛する権利を与えてくれ、頷くだけでも良いんだ、なぁ……」

「――ううっ、流されない、流されないんだからねっ」

「いいさ、お前の許可が出るまでオレは辛抱する、お前がセックスして
も良いって思えるまで我慢して……、耳元で愛を囁き続けるし指とか
舐めるし足だって舐める、安心しろ……あくまでそれだけだ」

「どこに安心する要素があるのよっ!! どう見てもエロい行為が混
じってるじゃない!! ああもうっ、離せっ、離れろったら!!」

アキラの抱擁から力付くで脱出した理子は、顔を真っ赤に染め、
ふっ、と荒い吐息と共に彼を睨む。

己の体を守るように自分自身を抱きしめ、いつでも逃げ回れるよう
に距離をとる。

——その姿が、彼の劣情を誘うとも知らずに。

「ぐおおおおおおおッ、なんだテメエ!! エロい事するんじやねえッ!! 股間が痛いほどエロいじゃねえかああああああああ!!」

「なんでいきなりソツチに振り切れるのよバーカ!! 知らないわよエロいとかエロくないとか!! もう!! もう少しあの調子で迫ってくるんなら、仕方ないなあって思えたのにつ!!」

「え、マジ??」

「……………悔しいけど、マジよ」

「——お前の手にキスする権利だけはくれないか?」

「今更遅いわよばーかっ!! ばかばかばかアキラのばくくくかっ!!」

恥ずかしそうに悔しそうに罵る理子の前で、アキラはぐしゃつと膝から崩れ落ちた。

己は本当に愚かだ、なんと愚かすぎて涙が出てくる。

千載一隅のチャンスだった、今のはゴールを決められた絶好の機会だったのに。

「ぐううう、あああああ、ぐああああああッ、おろろろろーろーろーん、おろろろーん!!」

「ガチ泣きっ!? アンタどれだけセックスしたかったのよ!」

「オレッ、オレは…………オレはああああああ!! せ、せっく、セックスしたかったのにッ、うわああああああん、理子とセックス、セックローースッ!!」

「うわあ…………うっわあ…………マジ? これマジなの? えええ…………??」

わんわんと大声で泣きだすアキラに、理子はどん引きした。

これが恋人か、こんなのが恋人なのか、長年幼馴染みとして一緒に居て初めてみる情けなさ過ぎる姿。

(で、でも…………それだけ愛されてるってコト、よね?)

彼の号泣姿を見ていると、心に不思議な気持ちが生かび上がる。

に、と口元が歪む感覚、これはダメだ、いけない扉が開いてしまっ

たかもしれないと。

本当にどうかしてる、恋人のそんな光景に。

(わたしが居なきやダメなんだからって、それダメンズの思考よねえ……、嗚呼、でも何か分かつちゃう、アキラはわたしじゃなきや、わたしが居ないと生きていけないって、必要とされてるって思っちゃう)

愛もあるだろう、だが性欲だ、性欲で彼は泣いてる筈なのに。

(そんなアキラが、愛おしいって、胸がきゅんきゅんするの……こんなの間違ってるって思うのに)

抱きしめたい、よしよしと慰めてあげたい。

理子の心に、そんな衝動が沸き上がって。

否定しなければならぬ、ただでさえ異常な状況で、彼の不器用で異常とも言える愛をぶつけられているのに。

(でも……アキラがそうなら、わたしも少しぐらい、うん、少しだけ変になっても)

不思議ではない、むしろこの状況においては正常な反応かもしれない。

己への言い訳が積み上げられていってしまう、一つ、また一つと、仕方ない。

彼女はそれをストンと受け入れて、彼の前にしゃがみこむ。

「——ね、アキラ……顔をあげてよ」

「理子お……」

「ダメねえ、アンタってホント、わたしが受け入れてあげないとダメなのねえ」

「うううッ、理子ッ、理子……!!」

「アンタみたいに愛が重くてさ、わたししか見えないダメな男なんて、他の誰が喜んで受け入れるのよ」

「おおおおッ、理子!!」

「はいはい、抱きつく前に立って……そう、手を引いてあげるから、ね？ ベッドで愛してよ」

アキラは首が千切れそうぐらい何度も頷いて、素直に誘導されて

ベッドまで行く。

理子は彼に微笑みかけると、ベッドに倒れて両腕を彼に伸ばした。「おいで、ダメダメなアンタでも愛してあげる」

「——理子」

彼はTシャツを乱暴に脱ぎ捨てると、彼女に覆い被さつて。本能のままに彼女の服を脱がそうとして、ピタッと止まる。

(……………あれッ!? 今のオレ、スゲー情けなくね?? 超哀れま
れてる上にさ、慰めックスしようとしてね??)

違う、何が違うかと言われれば返答に困るが。

待望のセックスではあるのだが、こう、男の沽券に関わる気がするのだ。

もう少し言えば、このままセックスしてしまえば己の理子も駄目になつてしまう気がして。

「……………どうしたの? 脱がさないの?」

「……………あー、スマン、ちよつと今回のセックスはキャンセルで頼む」

「……………?? え? は? ちよつ、なんで服着直してるのよっ

!?! セックスするんじゃないのっ!?!」

「いや駄目だろこんなの、うん、スマン、ちよつと頭冷やして明日また口説き直すわ、晩飯の後でガイスターと一緒に遊ぼうぜ」

そう一方的に言うと、アキラはシャワーを浴びに行き。

理子はベッドに取り残されたまま、ぷるぷると震える。

(な、なんなのよおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおお!!)

屈辱だ、折角こうして慈悲をかけてセックスに誘ったというのに。あれだけ望んでおきながら、キス一つせずつ止めるなんて。

理子の心にふつふつと怒りが沸き上がる、どうしてくれよう、この怒りをどうすればいいのだ。

「——わたしが、間違ってた」

シャワーの音をBGMに、理子が座った目でアキラを睨む。

彼がどういう気持ちで、どういう理由でセックスを断つたのか知ら

ないが。

「売られた喧嘩は、買うわよアキラ……………っ!!」

彼女は拳を握りしめ、ベッドから降りる。

これは喧嘩だ、いつもと同じ喧嘩で、恋人になってから初めての本格的な喧嘩。

「ボコボコにしてやる」

彼が愛によって迷走するなら、己は愛により殴って道を正すのだと。

理子はそれはとても寧猛な笑みを浮かべ、彼がシャワーから出るのを待った。

クエスト22／よしっ！ ボコりましたよ！！

「ぬおおおおおおおッ？ は、話せば分かるって教科書で習わなかったかッ!？」

「うっさいアホっ!! くのっ!! このっ!! ていつ、ていつ!! 一回ぐらい当たりなさいよアキラ!!」

「全力で殴って来てんのにワザワザ受けるかよッ!? つーか落ち着けッ、落ち付けてッ!!」

「安心なさい、これ以上ないってぐらい冷静よっ!! 冷静に考えた結果殴ってんのよ!!」

部屋に戻ったら途端、理子の襲撃にあつたアキラはかれこれ五分ぐらい逃げっぱなしであった。

話せば落ち着いてくれると思ったが、一向に彼女が拳を収める気配などなく。

(いや少しは理解できっけども!! オレだつてセックス誘つて始まつた途端にやっぱ止めたつて腑に落ちない案件だけでもさあッ!!)

ひよいひよいとパンチを避けながら、アキラには理子を説得に足る言葉を見つけられなかった。

然もあらん、冷静に考えれば自分だつて憤慨する。
暴力までいかないが、問いつめたくなる。

「謝るからッ、オレがマジで悪かつたから!! 一回止まってくれえ!!」
「打つべしっ! 打つべしっ! 臍物を抉るように打つべしっ!!」

「蹴ってんじゃねーかッ!? うわッ?? 缶詰を投げるのは止めろおッ!？」

「アンタがまともになるまでっ!! とりま殴る!!」

キシヤー、ウケケケと笑いながらアキラを追いかける理子、全力で動いているので体力など尽きそうなものだが。

今の彼女は脳内物質がドバドバで、疲労感など吹き飛んでいる。

あるのはただ、アキラへの愛だ。

(わたしは証明する——アンタの愛に負けないって!!)

彼が本気になれば、理子なんてあっという間に押し倒されるだろう。

だが、アキラは一度も反撃せずに。

「舐めてんのアンタっ!! ちよつとは反撃しなさいよ!!」

「お前を殴れる訳ねえだろうがッ!! 例えお前に殺されたとしてもだ!! 絶対にテメエだけは傷つけない!!」

「それが気に入らないって言うてるのよ!! ズルいのよアキラは!! そうやって一方的に愛を押しつけて!! わたしの愛なんて受け取ってくれない!! 見てくれないんだから!!」

「——ッ!? そ、それ……ぐはッ!? おつつごおッ!? あがッ、ギブギブギブギブッ!! 参った、降参するから!!」

動揺した一瞬、アキラの腹部に拳が入り後ろに倒れ込む。

幸いにして背後はベッドであったが、そのまま馬乗りになれ、ばしと額やら頬やら叩かれて。

流石に疲れていたのか、その打撃は軽かったものの。

(痛え、ああ、体じゃねえ、殴られる度に心が痛えんだ……)

痛みの一つ一つに、彼女の悲しみが、怒りが伝わってくる気がする。どれだけ彼女を傷つけていたのか、何度も何度も突きつけられて。

「——なん、で……ねえ、何でよ……、どうしてアンタは反撃してこないのよ……、わたしと、喧嘩さえしたくないっての?」

「……………」

いつの間にか拳は止んでいた、その代わりに彼の頬に大粒の水滴が落ちる。

泣いているのだ、理子が。

アキラは思わず彼女の涙を拭おうとして、その手を止めた。

(今のオレに……そんな資格があるのか?)

けど、心に嘘はつけない。

躊躇した手を動かして、彼女の頬を伝う涙を怖々と指ですくい取る。

「ごめん理子、口では喧嘩できる、でも子供の頃のように殴るなんて出来ない、お前を殴ってしまったら、お前の前に立つ事なんて出来なく

なる」

「それじゃあわたしがガキつて言うのっ!! ええそうよどーせガキよわたしはっ!! アンタの全てを受け止めたいのに受け止められないっ、恋人なのにアンタの暴走を止められない!! ねえ……わたし達つて、ホントに恋人なの?」

「くくくッ、恋人だッ、お前が悪いんじゃない、オレが悪いんだッ、ガキなのはオレだ!! 幼稚な独占欲を振り回して、お前を悲しませて……、オレが、オレがガキなんだ……」

自己嫌悪で傷ついた目をし、顔を背けるアキラに理子は、嗚呼と湿った声を出した。

どうかしてる、本当にどうかしてる。

悲しいのに、どこか嬉しいだなんて。

「……わたしは、そんな顔をさせたいワケじゃないのよ」

「ごめん……」

「アンタのそんな姿なんて、見たくないのよ」

「……ごめん」

「見ちゃうと……悲しくて、胸が苦しくて、でも——嬉しくなる」

「はい?? ちょっと理子さん?? 理子??」

思わぬ言葉に、アキラは強制的に正気へ戻された。

今、彼女は何と言っただろうか。

聞き間違いであればいい、だが現実には残酷で。

「アンタが目覚めさせたの、アキラが余りにもダメ過ぎるから、みつともない姿をする度に、……嗚呼、アンタはわたしが居ないと生きていけないんだって、優越感を感じちゃう、うん、アキラが身動きできないほどの重石になって、可哀想なアンタを抱きしめてあげたいって、そう思っちゃうの」

「……くくくッ!! なんか変なのに目覚めてるうううううううッ!」

「ねえアキラ? アンタはわたしがもつと殴れば、もつとダメな男になるの? わたしがアンタをレイプすれば、ダメダメな男になるの?」

ねえアキラ——、アンタを骨の髄まで甘やかしたら、ダメになるの？」

やっべ、超ヤバイ、どげんかせんといけん、アキラの脳内で警報ベルがけたたましく鳴る。

(オレがダメ過ぎて理子が変わになったあああああああああああッ!?)

どうすればいい、ここから何が出来る、この先どうなるかが全く分からない。

アキラは焦りに焦るが、口がパクパクと動くだけで言葉が出てこず。

「んふー、ダメねえアンタは……何も言えないの？ よしよし、じゃあこれから……そうねえ、さっきの続きといこうかしら、——んしよつと」

「あ、くくくッ!? ぬ、脱ぐんじゃねえよ!? は? 何しようとしてんのお前ッ!」

「何ってセックスだけど? アンタが同意しないなら逆レイプになるけど?」

「ちよつとして欲しかったシチュだけど、この状況じゃ嬉しくねえよッ!」

にたあと笑いTシャツを脱いだ理子は、そのままブラも外し。

となると、上半身裸で短パンという非常にフェティッシュな格好となる。

それは必然的に下から見るアキラにとって、流されても良いんじゃないかね? と思ってしまう程に魅力的だ。

(———けどなあ、違う、それは違うんだよッ!!) 唇を噛みしめて、血の涙を流す勢いで目を見開き。

アキラは理子の両肩を掴んで押し返す、同時に起き上がり視線の高さを合わせると。

「違う、それは違えんだよ理子……」

「———それは、また勝手にわたしを守ろうと?」

そうであるなら許さない、無理矢理にでもセックスすると彼女は冷

え冷えとした空気を出して。

しかし、それで揺るぐアキラではない。

譲れないモノがあるのだ、男として。

「違う、……………逆レは趣味じゃない、押し倒されるなら超エロい下着とネコ耳で、大人の玩具を用意した上で、未開封のコンドームを口で加えて欲しいんだ——ッ!!」

「……………はい?」

「ああ、聞こえなかったか? おっぱいを強調させながらデカケツをエロく振ってだな…………」

「どーしてそうなるのよ!! そこはオレがしつかりするからとか!! セックスさせて欲しいって懇願するのが筋ってもんでしょーがっ!!」

ぎゃーすと火を噴く勢いで理子は怒り出す、だがアキラとて言いたいことはあるのだ。

「ウルセエ!! テメエがダメなオレを受け入れるならなあ——」

もつとダメになってやるよ!! オレはお前に愛されたいんだよ!! そりゃあ、まともな関係の方が良いってお前には綺麗でいてほしいって思うけどなあ!! セックス出来なくて脳味噌に精子詰まってるんだよコツチは!! 思う存分好きなシチュでセックスさせてくれ!!

出来れば避妊して!! そしたら冷静になるから!! ちゃんとまともになるからッ!!」

「あ、アンタってヤツはあああああああああああああああああああああああああッ!!」

逆ギレにも程があるし、何より凶々し過ぎる、ダメ人間の極みとも言える要求だ。

いったい恋人を、愛しい彼女を、長年連れ添った幼馴染みでもはや内縁の妻で若妻同然の存在を、何だと思ってるのか。

（——ダメだ、わたしが間違ってた…………）

殴って本音を晒しながら喧嘩なんて、アキラの大きすぎる理子への愛への前には無力だった。

逆レして甘やかして、ダメになる方に導けば逆にまともになると思ったが、むしろダメな面を引き出してしまった。

どうする、何ができる、彼の愛は巨大で重くて、理子一人では振り回されてしまう。

(……………わたし、一人?)

ズガン、と何かが音を立てて繋がった気がした。

彼女の思考がズンズンと進み始める、ぼやけた像が焦点を結ぶ。

彼女一人では無力かもしれない、だが今この状況下では一度だけ使える手段があつて。

(嗚呼、そうね、残ってたわね、——天使のオッサンへお願いが)

(あ、なんかヤベエ、さつきとは違う意味でヤバくないツ!?)

(あははははははははは、足りなかった、わたしには『覚悟』が足りなかったつ!!)

(くそツ、嫌な予感しかしねえツ!! でも——オレに何ができる??)

何ができるか分からなくても、今は行動しなければ。

口を開いて言葉を紡いで、何としてでも止めるのだ。

アキラがそう決めた瞬間だった、理子は天井を見上げて。

「天使のオッサン、見てるんでしよう!!」

「お、おい理子ツ!」

「自己目標達成の『お願い』を使うわっ、出てきなさい——っ!!」

慌てて彼女が彼女の口を塞ごうとするも、既に時は遅し。

体はピクリとも動かず、耳は聞き覚えのある声を捉えて。

「お、理子はんも使うのですな『お願い』をつ!! ええでっしやる!!」

何でも言ってくれてエエで!! オッサンが叶えたるさかい!!」

実に楽しそうに、天使のオッサンは出てきたのであつた。

クエスト23 / 人生全て

「いやー、アキラはんのお願いを聞いたときはエライ驚きでしたが、理子はんはどんなお願いを？ 流れて的に単に外に出るってワケじゃって感じでっしやる?」

「……その前に、なんかコイツ変なポーズで動かないんだけど？ 何かした?」

「そら人間はんの動きを止めるぐらい朝飯前ですがな、安心してくだせえ健康に害はない天使パワーでんがな」

「ふーん、便利なのねえ……」

関心したようにアキラを見た理子であったが、彼としては予期せぬ事態だ。

このままでは不味い、幼馴染みとしての、そして男として、恋人としての勘がそう訴えていて。

(うおおおおおおお!! ど根性おおおおおおお!! 動いて阻止してやるううううう!!)

だがピクリとも体は動かない、単に動こうとするだけじゃダメだ。窮地により思考が明晰になったアキラは、方針を変えて。

(うっごけえええええええええ!! まずは指先一つだけでも!!
こんのおおおおおお!!)

「——ねえ天使のオッサン? 今、アキラの右手の人差し指が少しだけ動かなかった?」

「オッサンも見ましたわ、いやー、普通は一ミリも動かない筈なんですがね? これは……愛でんがな!! そう!! 動機や理由はどうあれ——愛!! 理子はんへの愛の力!! 尊みパワーというより少年マンガスピリッツって感じやけど……ふおおおおおおお!!」

「ええ……?? それで良いの??」

天使のオッサンの節操のなさに首を傾げる理子であったが、アキラ

に邪魔される可能性が出てきた以上。

確実にそして速やかに、願いを聞いて貰わなければならない。

彼女は咳払いを一つ、天使の気を引くと。

「お願いともう一つ、それに関係した提案があるのよ」

「ほう！ 提案ですか！ エ工でえ理子はんの提案なら聞きましょ！！」

（全然動かねええええええええええ、第二関節ぐらいまで動くようになっただけとおおお！！ 根性おおおおおおお！！）

アキラが超人的な精神力で、超常現象パワーを打ち破ろうとしている一方。

理子は深呼吸を一つ、このお願いと提案はとても覚悟がいる事で。覚悟が出来ても、不安はつきまとうだろう。

——それでも、やるのだと。

「お願いの方はルール変更、アキラが満足したら出られるって今のルールから………、わたしが孕んだら出られるって事にして」

（何ですとおおおおおおおおおおおおおッ!? は? え? はああああああああッ!）

力の限りアキラは叫んだが、喉は言葉を禁止され出てこない。

天使のオッサンは彼女のお願いに、キラキラと目を輝かせて。

「ほう!! ほうほう!! 願ったり叶ったりでんがな!! 喜んで変更させて貰うでえ……!! ほな提案の方は?」

「例の一発必中で孕むとかいう催淫ガス、そのスイッチが欲しいの。理由は言わなくても分かるでしょ?」

「——おお……、ううっ、この天使のオッサン!! 今まで生きてきた中で一番感動してっ!! うおおおおおおお!! 尊い!!

子供を孕む覚悟!! 昔ならいざ知らず今の時代にこんな若さで、愛する者と人生を愛する共にする覚悟!! 愛する者の愛を全身全霊で受け止めるという覚悟!! オッサンも受け取ったでええええええええええ!!」

天使は喜びを表すように光り輝き、エンジェルスマイルと共に彼女へ小さな箱を渡す。

彼女がの箱の蓋を開けると、中には赤く丸いボタンが。

そのボタンには『孕』と書かれていて。

「……………確かに受け取ったわ、世話になったわね天使のオッサン、次にあう時は妊婦だから祝福して見送ってちょうだい」

「新たなる子に祝福あれ!! その時を楽しみに待つとりますでえ!!

ほな、また!!」

(待てえツ!! 消えるなツ!! 行くんじやねえよオッサンんんんんんん!!?)

次の瞬間、天使が消えると同時にアキラの金縛りは解けて。

「おい理子ツ!? テメエ何を考えてんだよツ!?」

「悪い? むしろ喜びなさいよ、アンタにわたしの全てを捧げてあげるんだから」

「そうだろうけどツ!! そうだけどさあツ!!」

「何が不満なワケ? 女の子を孕ますのって男の本懐みたいなモンでしよ?」

胸をはって威張る彼女に、アキラは頭を抱えるしか出来なかった。

だってそうだ、余りにも予想外すぎる。

「どーすんだよ!! もうオレはお願い使っちゃったし取り返しがつかねえじやねえか!!」

「ふふん! 後戻りする気なんてないわ、——ねえアキラ、アンタがパパになるのよ!!」

「まだ早すぎるううううううううううう!!」

つい数日前まで幼馴染みだったのだ、恋人として一週間も過ごしてないのだ。

それがいきなり父親、そう父親なのだ。

結婚を通り越して、子供の親になる覚悟などアキラには出来ていない。

「つか理子!! お前、そんな感じで子供作るとか何考えてんだよ!! オレが言える立場じやねえけど!!」

「は? そんなの生まれた経緯とか話さなきやいだけの話でしょーが、だいたい普通さ、自分の子供にこの日にセックスして産まれたの

よ、って言う？ 言わないでしょ」

「そこに愛はッ!!」

「愛？ そりゃあ愛情をもって育てるわよ、わたしとアンタの子でしようが。……それとも、アキラ——愛さないとか言う気？」

「愛して育てるに決まってるだろ!! お前とオレの子だ!! 全力で愛して可愛がって、男だったスゲエやつに育てるし女だったら心まで美しいヤツに育てる!!」

「なら大丈夫じゃない、何が問題なワケ?? 恋人が覚悟決めてんのに、アンタはどうなの??」

「~~~~~ッ!? ず、ズリい!! ズルいぜ理子!!」

そんな事を言われては、アキラは何も言えなくなる。

責任、その二文字が彼の肩に重くのしかかった。

彼が苦悩する一方、彼女もまた。

(うわあああああああつ、やっちゃったつ、やっちゃったああああああああ!!)

覚悟は決めた、決めたつもりだ、だが若い身空で子を孕むのだし産むのは己なのだ。

いくら愛する男との子だとしても、不安も動揺もする。

(こ、これで拒否されたら……ううつ、考えたくもないわ!!)

ちゃんと育てられるのか、家族は反対しないだろうか、不安はどうしてもつきまとう。

(そりゃわたしだってさあ!! 自分の子を道具みたいにするって嫌よ!! ——でも決めたの、アキラはわたしへの愛が大きすぎてダメになるもの、そしてわたしはアキラを諦めるつもりなんて、ない!!)

もしかしたら間違った道を選んでしまったのかもしれない、もっと良い方法があったのかもしれない。

だが、今の理子にこれ以外の選択は思いつかず。

何度繰り返ししても、同じ結論を出すだろう。

(不安はあるわ、後悔だってするかもしれない、でも——覚悟したの、この先もアキラと幸せになる為に)

諦めない、譲れない、彼が理子を守るように。

ならば彼女はアキラの心を守るのだ、そして子供の幸せも諦めない。
い。

(何か……何か言いなさいよアキラ……、このボタンをしちやえば、それで終わるのよ？ アンタが覚悟する間もなく、終わっちゃうのよ？)

彼女はじつと手の中のスイッチを見つめた、まだ押す時ではない。
これを押す時は、アキラが決断した時だ。

すうはあと大きく深呼吸をひとつ、理子は頭を抱える彼に告げた。

「アンタが私を愛してる様にね、わたしもアンタを愛してるの、……わたしはアンタの愛を受け入れるわ、——ねえアキラ、どうするの？」

「オレは……」

「アンタはわたしの人生を奪ってでも独占しようとした、わたしはアンタへの人生の責任を増やした、——これってさ、一緒に背負うものでしょ？」

「……………ッ!!」

一方的に押しつけた愛の報いが来たのだ、だがこれは罰ではない。
一方的な愛の押しつけであり、アキラのそれと違って。

(理子は……オレに手を差し伸べてくれている)

欲望を優先した己と違って、彼女は二人の未来を考えて愛を押しつけた。

だが、責任という二文字が今は何より重く感じる。

彼女一人、合わせて二人だけじゃない、もう一人分で三人分、もしかしたら四人分の可能性だってある。

「……………ごめん、少し考えを整理する時間をくれないか」

「はあ……分かった、ま、即答してたら一発殴って問いただしてた所よ」

「……………ありがとう、オレを見捨てないで愛してくれて、他の選択肢を見つけてくれて、本当にありがとう。——だから、しっかり考

えたいんだ、考えてもお前を孕ませないと出れない事は変わらないけど、それでも……ちゃんとお前の愛に向き合いたい、だから——」

「ええ、時間をあげるわ。でも……あんまりウダウダ考えてるなら、わ

たしにも考えがあるから」

「わかった、そうならないように努力する」

その後、二人は静かに凄し十一日目は終わる。

——セックスしないと出れない部屋・十二日目。
アキラと理子は、まだ苦悩の中に居たのだった。

クエスト24 / ポイント・オブ・ノーリターンは過ぎ去った

子供が出来るとは、どういう事だろうか。

ベッドの上で背中合わせ、二人は言葉を交わさず。

（結婚があるだろう？ 理子がオレの家に来るかオレが理子んちに行くか、出産まで金稼がないといけないし、それから育児の本とか読んで勉強……）

いったい、幾らの金銭が飛んでいくのだろうか。

親に援助を頼んで受け入れられたとしても、男として夫として一年で百万以上は稼ぐ必要はあるだろう。

（オレ、ウチの手伝い以外で働いた事がねえんだよな……）

その上で、受験勉強をする可能性も考慮しなければならぬ。

大学、進学という問題があるのだ。

（親としては……大学は出てって気持ちはあるだろうなあ……）

そしてそれは、きつと理子も彼女の親も同じで。

子を孕む、それだけでどれだけの影響があるのか。

ただ、これだけは言える。

（どんな事があっても……オレは理子を諦めない、産まれてくる子も諦めない）

けれど考えてしまうのだ、どうしても、考えてしまう。

（オレは……親になれるのか？ 良い父親になれるのか？）

何より。

（取り返しの付かない後悔を、理子に与えてないか？）

ぎゅっと拳を握る、バカだバカだと彼女から言われてきたが。

本当に自分は愚かだ、彼女にこんな選択をさせてしまった。

嫌われて当然、憎まれて当然、部屋から出てた途端に縁を切られても不思議じゃない。

——でも、お前はオレを見捨てないって、オレの側にいてくれ

るって。今なら心から理解できる)

信じられる、当たり前と言つても良い。

リンゴを落としたら地面に落ちる、それと同じぐらい当たり前のことだ。

今なら言える、きつと彼女も同じ気持ちだろうと。

(理子との子供……可愛いだろうなあ)

どちらに似ているのだろうか、男でも女でも彼女に似て欲しい気がする。

でも自分と似た子も悪くない。

(男なら、ベタだけどキャッチボールとかしてえよな。女なら……ままだととかしてえ)

それを、理子が側で暖かく見守っているのだ。

彼女と我が子が一緒に昼寝している所に、タオルケットをかけるのだっていい。

きつとそれが幸せで、でもそれは。

(理子も……同じだと嬉しいよな)

同じ幸せを共有できるのなら、これ程に嬉しい事はない。

けれど、現実を考えてしまえば乗り越えなければならぬ壁が、責任が大きくて。

足が竦む、このまま踏み出しているのか確信が持てない。

(ねえアキラ……アンタはわたしの子供を望んでくれるの?)

それは理子も同じだった、覚悟はした、道を選んだ。

だが、どうやっても不安は消えない。

どうやって踏み出しているのか、スイッチを押すことが本当に正解なのか。

(もし無事に産めたのなら、きつと幸せなんだろうな)

今が幸せではない、とはいわない。

妙な状況に陥ってはいるが、結ばれたことは本当に幸せで。

でも、選んだ事とはいえ。

(展開が早いよね、いつかはってそりゃあ少しぐらい考えたことはあるけど……、結婚してからって、もつと大人になってからだって

思ってたし)

子を孕む選択をした、だから何としてでも産む。
必要なら両親とだつて縁を切るだろう、だけど。

(幸せに……みんなから祝福されて産まれて欲しい)

法的には成人になるのだろう、けれど子供だ、自分達はまだどうしようもなく子供なのだ。

もしもの場合、二人でちゃんと育てられるだろうか。

子供に苦勞や不便はさせたくない、アキラにだつて無理はして欲しくない。

(――最悪の事態は覚悟しておかないとダメよ)

結婚式なんてしてゐる余裕なんてない、どこか遠い地で二人と我が子だけで。

でもそんな厳しい生活も、彼と子供がいれば乗り切れると思うのだ。

それがどんなに甘い考えでも、少なくともそうであつて欲しいと。

(アキラとの子供、可愛いだろうなあ……男の子がいいかな、女の子がいいかな……ああ、双子つてのも悪くないわね)

双子は出産が大変と聞くが、何となく懂れてしまう。

自分もアキラも、それぞれ一人ずつ我が子を抱えて散歩をするのだ。

我が子を抱えて食料品を買い出しに行つたり、時には公園でピクニックをするのも良い。

(そんな未来になれば良いつて思うの、アンタはどうなの？ ねえアキラ――)

背中合わせに未来を思う二人、一方、天使パワーでそれを見守つていた天使のオッサンと言えば。

「ふおおおおおおおおおおお!! 尊いっ!! 尊いですわお二人さん!! 天使のオッサンは……オッサンは嬉しい!! 我が子の事を真摯に考えて!! 愛する相手の事を思つて!! 繋がっている!!

お二人は言葉を交わさずとも繋がつてんがな!!」

尊みエネルギーが限界を越えて満ちあふれていくのを感じる、これ

は使わなければならない。

次のカップルの仕込みに使う予定もあった、だが天使として、それだけに使うのは矜持が許さない。

「悩んでくんない!! 盛大に悩んで答えを出すんやでお二人さん!! 子供を孕む事が決まってるとはいえ、悩んで答えを出す事に、二人で答えを出す事に意義があるんや!! オツサンがなあ……天使の名にかけて幸せにしてやるわい!! だから今は——もっと尊い姿を見せてえやっ!!」

天使のオツサンが二人から見えないところで、感動と興奮で叫んでいるその時。

彼らは、ふと気づいて。

「——いや待て、土壇場でコイツがヒヨったらどうする?? そのまま突き進むのか?」

「アキラの事だから、間際でやっぱ無しとかもうちよい考えさせろとか言いだす可能性があるわね……」

「最悪、スイッチを奪って押さなきゃいけないのか……、ならコイツが正気のままだと抵抗される」

「——精神的にチンコ勃たない、そこまで考慮するべきね」

双方、襲う気ガン決まりで思考する。

対話をする気はある、だが最後の最後にどうなるかは分からない。

ならば、その時にノーと言えない状況を作っておくべきではないのか。

「確かエログッズはポイント消費無かったよな、——インパクト重視で攻めるか?」

「……ああ、アキラも同じコトを考えてる可能性があるわね、そうなった場合……、勝った方が部屋を出た後の主導権を握る」

「ネコ耳は目的に気づかれかねないし諸刃の剣だ、となれば……むしろ子作りセックスとは正反対の方向から、だな」

「——前に雑誌で読んだコトがあったわね、恋人とのセックスにマンネリを感じた時の対処法、ええ、あの時はくだらないって流してたけど……」

妙な方向に全力で突っ走る二人に、天使のオッサンといえば。

「癖になりそうやわあ、お二人の迷走っぷり。まだこの状況下でもケンカツプルが見れるんかあ……ううっ、オッサンは、オッサンは実に楽しいでえ!! 心境の落差に風邪引きそうやけど、見守るに楽しすぎる!!」

ビール片手に枝豆と、もはや野球観戦するオッサンそのものだ。

天使のオッサンに面白がられてるとは露にも思わず、アキラと理子はお互いを出し抜こうと必死に思考を巡らして。

「——ねえアキラ、前立腺って知ってる?」

「はいッ!? い、いきなり何言ってるんだテメェ!」

「雑誌で読んだんだけどね、こうやってコンドームを指にはめて、あ、ローション出しといて」

「いやいやいやいやッ!? 待って、マジで待って、何でいきなりそうなるんだよ!!」

激しく動揺しながらも、ベッドから慌てて降りて尻を抑えるアキラ。

理子はそんな彼に、にっこりと微笑んで。

「歴史の教科書に書いてあったでしょ? ——鳴かぬなら鳴かせてみせようホトトギス、ま、鳴くのはアンタなんだけど」

「それ鳴くっていうより強制的に勃起させられるヤツだろおおおおおとおおおとおおおッ!」

彼は交換ページから取り寄せた、後ろの穴用の大人の玩具を握りしめながら。

先手を取られた、と唇を噛んだのであった。

クエスト25／フエアに行こうぜ！（滝汗）

（どうするッ、オレのケツの穴の処女がピンチだ!!）
（用心して正解だった、——アキラの手のやつ、そっち用の大人の玩具よね）

新たななる目覚めの危機に、二人は臨戦態勢だ。

所謂、異常性癖やら特殊プレイやら、そういう意味では市民権を得ている事かもしれない。

だが自分達には早すぎるし、何よりそうするなんてゾツとする話だ。

「……………会話の余地はあるか?」

「アンタがそれを捨ててからね」

「テメエこそ、指のそれを外せ」

「その手には乗らないわ、この変態ッ、異常性癖者!! なに考えてそんなもの持つてるのよ!!」

「前立腺とか言い出したテメエに言われたくないんだが?? オレの大切な処女をどーする気だッ!」

後ろの貞操は守ってみせる、そう意気込むアキラに。

理子は極めて冷静に、事実を指摘してみせる。

何か忘れていないだろうか、この幼馴染みのバカ男は。

「は?? わたしの処女を奪ったヤツが何言ってるの??」

「——うぐッ!」

「処女を奪った上に? 監禁して? 幸せ家族計画してあげたのに?

こんどは後ろの?? 頭沸いてるんじゃないの??」

「それだったらお前はオレの童貞奪ったし、そもそもお前の処女は同意の上じゃねーかッ!!」

言われる筋合いなんてないと言い返す彼の姿に、彼女はニヤリと笑った。

処女の事は同意した、確かにそうだ。

——だが。

「他は？ 他の事についてはどうなの？ ん？ 何か言いなさいよ??」

「……………フン、オレが全て悪い。それは事実だが——、土下座でもさせてケツを狙う気だな？ 生憎だがその手には乗らねえぜッ」

「悪いけど、わたしはアンタみたいに卑怯じゃないから、そんな不意打ちなんてしないわよ。あーあ、家に帰れると思ったのになあ……、まさか寝てる間に最愛の彼氏に裏切られるなんて、なんてわたしは可哀想なの？」

「——良いのか？ そんな事を言つて、後悔しねえか？」

「凜猛な笑みで理子を睨むアキラ、彼女はどんな反撃が来るのかと警戒心を強める。

（まったく理子……：テメエはオレの弱点を突くのが上手だよなあ、つたくよお、オレを追いつめたら、どーなるか分かってんだろかなあ……!!）

（手のアレを握りしめてるし何か変な気配出してるしっ!? 何っ!? 何するつもりなのアキラっ!?）

緊迫の一瞬、アキラは堂々を胸を張って告げた。

「あまりオレを責めるな、——泣くぞ、大泣きするぞ!!」

「むっっちゃプルプルしてるっ!? メンタルどーなってんのよアンタは!! もうちよい強気で来なさいよ!!」

「は？ 分かってんのか？ オレは理子に嫌われたら死んじやう生物なんだぞ?? 望むなら全裸土下座すつぞ？ 見たいか？ 彼氏が泣きながら全裸土下座して謝罪を繰り返すのが、————本当に見ていいのか？」

「どんな脅迫の仕方よ!! 止めなさいったら!! ばっかじゃないのっ!?!」

慌てふためく彼女に向けて、アキラはゆっくりと一歩踏み出した。

理子はそれを見て、即座にベッドから降りて距離を取る。

ここで負けてはいけない、触れさせてもいけない、ダメメンズ気質を刺激される事も流される事も避けなければ。

「それ以上近づくな——スイッチを押すわっ!!」

「何いッ!? て、テメエ理子オ!! それは反則だろ!! いやマジで反則だろう!!」

「そっちの方が反則でしょうがッ!! 何よ全裸土下座で謝罪って!! ノーガードを武器にするんじゃない!!」

「ノーガードにもなるだろうがッ!! 他ならぬお前だぞ!! 世界で一番愛する理子だぞ!! —— お前に対して防御する心なんて、ないッ!!」

「——アキ、ラ……」

力強い愛の宣言に、理子の胸はきゅんと甘い痛みを訴えた。

だが彼女は即座に首を横に振る、流されてはいけない。

その証拠に、彼の手にはまだ。

「……………その手のやつを捨てたら全裸土下座の謝罪を受け入れても良いわ」

「——なるほど、舐めろって言うんだな? 良いぜ、覚悟決めてやんよッ!!」

「そんな覚悟なんて決めるんじゃないバカ!! やつたら殺す!! 二度とキスなんてさせないからね!!」

「絶対にしない事をここに誓うッ!! だからキスッ、キスは勘弁してくれ!! ——いや待て、オレはお前がアレした後にキスしたが??」

「それ男の甲斐性でしょ、むしろそれでキス拒否したら殴ってたわよ??」

奇妙な沈黙が訪れる、天使が通ったというには二人の頭にはオツサンの姿しか浮かばない。

ならばきつと、これは墮天使が通ったとでも言うべきか。

(ど、どうする? ここからどうやって理子に諦めさせる?)

(——アキラに諦めて貰うには……、向こうが武器を捨てないとダメね、ええ、それがある限り対話の道は開けない)

(向こうにはスイッチという抑止力がある、いや最終的には押す事になるだろうが、今はまだコレが必要だ、コレを捨てたらケツが……)

(コイツに対抗する手段は多ければ多い方がいいわ、それに捨てた途端、いえ、でも——)

じりじりと張りつめた空気が再び戻ってくる、気分はまるで決闘している荒野のガンマン。

勝負は一発で決まる、そんな錯覚すら二人は覚えた。

「……………一つ聞かせてくれ、なんでお前は前立腺を攻めようとする」「アンタも聞かせなさい、その手にもってるソレを何で使おうとするか」

「……………」

「……………土壇場で臆病風に吹かれた時の為!!」

瞬間、空気がいつそう刺々しくなった。

お互いに考えている事は同じ、それはつまり。

「信用してねえのか理子ツ!! 少し時間を貰えれば自分の意志でスイツチ押すだろうが!!」

「アンタこそ信用してないでしょっ!! この選択をしたのはわたしよ、間際で狼狽えるワケないじゃない!!」

「はッ、言ったな? なら証明してみせろ——子作りの前に、アブノーマルで度胸試しといくか?」

「別に良いけど、……………その行為にアンタの欲望が一ミリでも混じってないって誓える? わたしと、そして天使のオッサンによ」

アキラはふつと笑うと、手に持った大人の玩具を投げ捨てて。

「……………絶対に土壇場で怖じ気付かないから、前立腺だけは止めてくれませんか理子様?」

「やっぱそうだったじゃないっ!! この変態!! どーせ卑猥で自分勝手な妄想とかしてたんでしよう!!」

「お嫁さん奴隷プレイまでは考えた」

「……………あ、アンタねえ……………わたしを何だと……………いえ、プレイで済まそうとした事を逆に誉めるべきなのかしら」

理子は頭を抱えて悩んだ、プレイではなく本当にそうするつもりならグーパンも辞さない構えであったが。

プレイと言ったあたり、進歩が見られる、とはいえ進歩と言っていないのだろうか。

深く悩む彼女に、アキラは近づくとその肩をポンと叩いて。

「ドンマイッ」

「ぶち殺すわよアンタっ!! もういい押す!! このスイッチ今すぐ押ししてやるんだから!!」

「あー困ります困りますツ、理子様困りますからマジでもうちよっところう手心をお願いしますうううううううううううううう!!」

「監禁したやつが言えたコト? じゃ、押ししましょうか」

「待って待って待ってえッ!! 話し合おう!! 真面目に!! な? な? 部屋から出たらオレの貯金を全部渡すから!! マンガも全部売り払って貢ぐから!! お願いです理子様!!」

必死すぎる形相でペコペコと頭を下げて懇願する彼の姿に、理子は満足そうに頷く。

だが、許した訳でも油断した訳でもない。

「なら、話し合うとしましょうか」

「おお!! 分かってくれたか理子!! 流石は良い女! オレの愛する人よ!! フェアに行こう! なッ、フェアに行こうぜ!!」

「フェアねえ……、言うのは簡単よねえ、ま、アンタは孕ませるだけだし? 実際に産むのはわたしだし?」

「それを含めて話し合おう!! あ、椅子になりましょうか理子様?

デヘヘヘ、愛の奴隷と呼んでください、肩こってませんか? お揉み致しませう……!」

彼女は溜息を一つ、そして苦笑すると。

「はいはい、じゃあ椅子になりなさい。ベッドに腰掛けてわたしをお姫様抱っこしなさいな」

「——ツ!? 喜んでえッ!!」

そうして、話し合いが始まったのであった。

クエスト26 / “らしく”行こう！

「じゃあ提案するけど、後ろはナシ、いいわね？」

「なら当然、お前も不意打ちでしないな？」

「勿論、この部屋に居る限りは誓うわ」

この部屋に居る限り、それはつまり外に出たら違うという事だ。

後ろの穴の危機は去っていない、だが。

(このままだと平行線だ、子供が出来るかどうかの瀬戸際つつーか、孕ませる決意と覚悟しなきゃいけないのに後ろの不安まで抱えたくねえ)

(アンタが引くならわたしも引く、けど外に出た後はまた別の問題だしね、……まあ、妊娠中に性欲を溜めさせちゃうかもしれないし？

うん、そう、アキラが望むなら、その時に土下座するなら、か、考えないコトもないからねっ??)

(——いや待て、つまり……帰った後は要相談って事か?)

(い、言わなきゃいけないかしら、でも……そこまで言う都合の良い女って思われちゃうかもしれないし……)

理子がぐるぐると悩み出したその時だった、アキラは彼女を抱きしめる力を少し強くして。

「——ありがとう理子、お前には感謝しかない」

「はあっ!? い、いきなり何よ……耳元で言わないで、くすぐりたい……」

「この先の事を考えて、お前は可能性を残しておいてくれたんだな？」

嗚呼、オレはなんて出来た嫁を持ったんだ……、愛してる、超愛してる理子……」

「ううっ、嬉しいけど言葉にするな、嬉しいけどお……」

「誓うよ、フェアに行く、お前の提案通りにこの部屋に居る限りは狙わない、いや、帰ってから無理強いしない、絶対にお前の同意を得る」

「~~~~~っ!? わ、わかったから耳を甘噛みするんじゃないっ!!」

ぺしぺしとアキラの頭を叩きながら、理子は顔を真っ赤にして視線を反らした。

こんな可愛い女性が、自分には勿体ないぐらいに出来た女性が嫁になり、己の子を産んでも良いと言ったのだ。

「——ごめん理子、お前が勇気を出してオレの全てを受け入れてくれたのに。オレは……まだ決心がつかない」

「アキラ……」

項垂れる彼の頬を、理子はそつと撫でた。

心がかもつと欲しがっている、アキラの言葉が聞きたい、だから。

「聞かせてよ、アンタが何を考えてるか、何が不安なのか……わたしにも聞かせて、一緒に共有したいの」

「くっ、ありがとう……ありがとう理子……」

彼女が幼馴染みであった事に、恋人になれた事に、これからも共に居られる事に感謝と安堵しながら。

アキラは、静かに語り始めた。

「怖いんだ、ちゃんと父親になれるのかって、子供を育てられるのかって」

「うん」

「家族の反対だってあるかもしれない、そうなった時にオレには何も無い、お前を養う手段すらないガキだ……」

悔しそうに顔をしかめ、彼は項垂れるように彼女の肩に顔を埋めた。

理子はそれを優しい顔で受け入れ、続きを待つ。

「ごめん理子、お前に負担をかけるだろうって、嫌われたら、それでお前がダメになってしまったら……違う、どうなるか分からないから、お前と離れてしまかもって、嬉しいんだお前がオレとの子供を産んでくれるのはッ、でもッ、でもオレは——」

ああ、と理子の心は震えた。

同じだ、同じ悩みをアキラは抱えていたのだ。

責任を、将来を、今の二人はまだ自立していない子供で。

——衝動のまま、理子は彼のシャツを心細そうに掴んで。

「わたしも、不安なのっ、アンタの子供が産めるのは嬉しいし、幸せな家庭を望んでる、いつまでもアキラと一緒に愛し合いたい。——でも、不安なのよ、アンタの負担になってないかって、ちゃんと母親になれるかって、家族にだって受け入れて貰いたい、でも……此処に留まっている限り、何も答えは出ないのよっ!!」

「ごめん、ごめん理子、オレは……ッ」

「違うの、違うでしょアキラ、今そんな言葉は聞きたくないの」

「——ありがとう、ありがとう理子、オレ、自分の事ばかりでお前の事が見えてなかった、お前だって不安なのに、部屋を出ないと何も分からないのに……」

涙を流さんばかりに震える彼に、彼女は告げた。

時には歩く前に、空を飛ぶ必要があると。

「じゃ、これ押す?」

「いや待て?? なんでいきなり飛んだ?? 結論早すぎない??」

「だって外出なきゃダメでしょ? 不安はお互い同じだし、なら二人で協力して解決しましょうよ、なら——」

「分かるけども!! そりやそうなるけども!! 心の準備がッ! もうちよいオレ、パパになる準備とお前の夫として恋人として相応しい算段をだな」

「ふーん、それって実際に産むわたしより重要なコト??」

アキラは絶句した、それを言われると辛い、非常に辛い。

何も言い返せなくなる、だってそうだ、出産というのは現代においても命懸けだ。

それを出されたら、何もかも飲み込まなくてはならない。

「お、お慈悲を……、な? もうちよつとだけ、あと数日だけ心の準備をすつから、な? 今すぐ押すのは止めてくれませんか??」

「うーん、どーしよつかなあ……、催淫ガスって言うぐらいだからスツゴイエッチが出来ると思うんだけど……? 試してみたくない?」

「誘惑するんじゃないやねええええええええええッ!? は? そんなノリで、うううううううッ!!」

「実際問題、やるしかないじゃない? なら前向きに行くべきでしょ

？」

可愛く小首を傾げてみせる理子、絶対にそれがアキラのハートを打ち抜くと踏んでの所行だ。

断じて屈してはならない、いくら愛していても、可愛くても、その先に極上のセックスが待っているとしても、だ。

「し、慎重に考えようぜ!! 実際そんなでも無いかもしれないし、もしかしたら重大な後遺症とか残るかもしれないし!! そ、そう! どうせ外の時間の流れは超遅いんだから、地道にセックスしても良いんじゃないかねあツ!!」

『天使のオッサンがお伝えするで〜、催淫ガスは心も体も後遺症ナシやでえ!! けど効果はバッチリや!! お望みなら過去の使用者の映像とレビューを渡すでえ、勿論同意の上の提供や!! 安心して使つてや!!』

「だってよアキラ?」

「ド畜生ううううううううううツ!! オレのせめてもの抵抗を潰してそんなに楽しいか? なあ楽しいのかよツ!!」

『楽しいんや……お二人がそうやって仲を深めていくのが超絶楽しいんやオッサンは……!! ほな、声だけ失礼したで!! 頑張つてやお二人さん!!』

「ふーん、なら期待に答えなきやねえ〜」

ニマニマと挑発する彼女に、退路を絶たれたアキラは青い顔。

だが、ここで押ししてしまうと彼は暴走するだろうし、禍根が残るかもしれない。

それを理解している理子は、とある提案をした。

「ま、わたしも鬼じゃないわ、アンタの気持ちを汲んであげましようっ」

「ほ、本当かツ!？」

「ええ、けどそれってフェアじゃないわよね?」

「……………ああ、そ、そうだな、フェアじゃ、ないよな?」

何を言い出すのか、戦々恐々とするアキラに。

彼女は、実に楽しそうに笑って。

「今日が十二日目だっけ？　なら後二日、その日の夜まで待ってあげる」

「……………その間、何もナシ?！」

「まさか、——アンタを誘惑してあげる、ね？　嬉しいでしょ？　愛しの可愛い彼女が、お嫁さんにしてって、子供が欲しいのって誘惑してあげるの、最高でしょアンタにとっては」

「~~~~~ツツ!？」

究極の二択がアキラの前に訪れた、今すぐスイッチを押して理性を蒸発させるセックス。

心の準備をしながら誘惑される二日間で、最後は同じ。

(今すぐは論外ツ、だが…………耐えるしかないのかツ、耐えられるのかツ、れ、冷静に考えれば結末が同じなら今すぐの方が楽かもしれない、けどそれって逃げじゃねえのかツ!?)

はあはあと息が荒くなる、追いつめられている、今、人生の岐路に立たされている実感がある。

決断しなければならぬ、それも今すぐ、答えなければ理子はスイッチを使うかもしれない。

アキラは、大きく息を飲むと。

「……………分かった、誘惑してくれ、だから二日間だけ時間が欲しい、必ずオレの意志でそのスイッチを押すから、だから——」

「——ええ、なら時間切れになる前にアンタの意志でスイッチを押すように誘惑するわ、…………全力でねっ!!」

そうして、セックスしないと出れない部屋での最後の戦いが訪れたのだった。

クエスト27 / 誘惑すると言う事

誘惑に耐える、それはとても過酷な二日間になると考えた。

そもそも彼女はスタイル抜群の美少女だ、日替わりクエストの時ですえ理性がギリギリであったのに。

彼女が当初積極的ではなかったから、セックスまで一週間という時間がかかったのに。

(……………勝負って、始まったんだよな)

開始一時間、過激な衣装で攻めてくるのか、それとも激しいボディタッチか、或いは実にはアダルティで直接的な誘いか。

アキラとしては激戦を予想してたのだが、現実はどうだ。

(おかしい……………静かすぎる、大人しいと言うべきか、いつその事、聞いてみるか？ いやでも藪蛇は困るし…………)

そう、理子に目立った動きは無かった。

敢えて言うなら、常に寄り添って密着しているが。

それも過激なモノではなく、片手を繋いだり、肩を寄せ合ったり。

(くツ、何が目的だツ!? 心理戦? オレを焦らせて心理戦を仕掛けているのかツ!?)

(ふふっ、焦ってるわね、わたしが動かないコトに焦ってる…………でも残念、ちゃんと聞くまで教えてあげない)

(だが…………これが心理戦だって言うなら甘いぜ…………ああ、何せ――)

―何か超安心出来るっていうか、むしろこう、無言でと言うか、自然体で無理せずイヤイヤしてるみてえで心癒されてるもんな!!)

(いつ聞いてくるかしらねえ…………、ま、この様子じゃわたしの術中に既にハマってるって気づいてないみたいだけど)

ゆったりとした時間は続く、故にアキラは気持ちを整理する時間があると思われたが。

「――好き、好きよアキラ」

「お、おう…………ありがと、オレも好きだぞ」

目と目があった瞬間、理子は必ずアキラに好意を告げ、機嫌良さそ

うに彼の手を握るだけだ。

(いやー、集中出来ねえって!! 数分に一回、目があつて好きって言われるかと思えば、十分に一回のペースだったりさあ!! しかも幸せそうに言われてツ、オレも嬉しいっつーの!!)

何だろう、凄く幸せだ、特段何もしていないのに。

側に居て、愛を囁かれて、囁き返して。

それだけなのに、心が満たされていく、彼女の事をまるで初恋みたいに意識してしまう。

「……ね、暇だからアンタの手、少し貸してよ」

「何する気だよ」

「別に? 暇だから手でも繋いでようかと思つて」

良いでしょ? と断られる事など微塵も考えてない瞳に、アキラは何も言えなくなつて。

ただ、こくりと首を縦に振るだけ。

「ん、——ああ、やっぱアンタの手つてわたしより大きいよねえ……」

「そりゃあ男だからな」

「こうして指を絡めるのが恋人繋ぎだけど、上から重ねるのもアリよね、アキラ、アンタが上ね、なんかこう、映画見るカップルみたいに」
「……………別に良いけどよ」

るるんと鼻歌交じりで、彼女は指と指を絡める。

ただそれだけなのに、謎の気恥ずかしさがアキラを襲つて。

(悪くない……いや違う、スツゲー良い、こういうのって、恋してるっていうか、マジで恋人っぽくない!? オレら恋人だよな正に!!)

これが彼女の温もりか、少女マンガの世界はここにあった。

恋人達の静かなイチャイチャは存在したんだ、と考えた瞬間であつた。

(——いやいやいやツ!? なんか流されてねえかつ!? な、なんて卑劣な女なんだツ、オレの意識が理子を感じる事でツ、幸せで何も考えられなくなる!!)

(うん……たぶん、こーゆー時間が足りなかったのねわたしとアキラ

には)

(考えろ、考えるんだッ、コイツは何を企んでいるッ、こんな幸せな時間の無駄遣いを演出して、何が目的なんだッ!! 理子にとってどんな特があるんだ!)

(もつと早く、恋人になつてれば……放課後の教室とかで、こんな感じに過ごせたのかしら……)

アキラが理子を疑う一方で、彼女はこの雰囲気満喫していた。

幼馴染みで他愛ない喧嘩をする日々も楽しかったけれど、こうした関係にもつと早くなつていれば。

そう、思ってしまった。

(高校生活も最後の一年に入ってるのよね、これから忙しくなるだろうし、こうした時間は貴重なのかも)

ふと思う、天使のオッサンは未来を予測出来ると言っていた。

ならば、二人がこうする事も或いは見えていたのではないか。

という事は、もしかすると。

(……感謝しなくちゃいけないのかも、天使のオッサンはわたし達に二人っきりの、何もしないで二人つきり、ゆっくり出来る時間をくれた。……そうなのかも)

かの天使は、その外見や言動ともに本当に天使か疑わしい所であったが。

本当に、天使の名に負けない善良な性格の持ち主であったと。

真の天使であったと、理子は素直に感じた。

——時計を見れば、夕食時で。

「そろそろ、ご飯にする?」

「……………ああ、もうそんな時間か」

「じゃ、用意しましょうか」

部屋の隅の缶詰の山へ行くのにも、理子はアキラの手を離さず。

缶を開けるのも、手を繋いだままで共同作業だ。

そして。

「一応聞くが、なんで箸が一つしかないんだ?」

「食べさせ合いますよ、ああ、手を繋いだままじゃ不便よね。は

い、あーん」

「……………あーん」

ニコニコと楽しそうに彼女はアキラに食べさせて、これも罫ではないか、そう思う彼であったが。

愛しの嫁（内定済み）からの、あーんには勝てず。

結局、食べさせあつてしまう。

「——いやいやいやツ?? この時間マジで何ツ!? いや充実感ハ
ンパなかったけども!!」

疑心暗鬼のまま、やはり夕食後だつて何も起きず。

バスタイムには、それこそ睨みつける勢いで警戒していたアキラであつたが。

ガラスの壁越しに目が合うと、ひらひらと手を振られた挙げ句、上
がったら髪を乾かしあつてしまい。

（もう我慢ならねえ!! マジで何考えてんだコイツツ!!）

就寝前、アキラは理子を問いつめる覚悟を決めた。

誘惑すると言つたのに何もしてこない、もしかすると、全ては想定
済みなのかもしれない。

だが、どうして聞かずにいられようか。

「——答えてくれ理子、何でなにもしてこないんだ……情けをかけた
つもりか? それともオレを焦らして遊んでるのかツ!」

「あ、やっと聞いたわね。このままずっと聞かない気かと思つたわ」

「は? 聞けば言うつもりだったのかテメエツ!」

「ええ、だつて言つても問題ないもの」

あつけらかんと答える彼女に、アキラとしては戸惑いしかない。

聞けば答える、聞いても問題ない。

どんな策略なのか、既に手遅れではないのか、焦りと共に彼女の答
えを待ち。

「わたしね、思つたのよ。……着飾ったり、無理してえつちな誘惑して
アンタに抱かれても、それは意味がないじゃないかって」

「意味が……ない?」

「アキラの意志でスイッチは押して欲しい。アキラの意志で孕ませて

欲しい、……だからね、待つことにしたの」

「それ、は……ッ」

「これは私の責任でもあるんだから、わたしの我が儘でもあるんだから、待つの、アンタが好きって愛してらって言い続けて、うん、わたしは待つの。——今日のゆっくりした時間、嬉しかった、アンタとゆっくりしていられてさ……」

恥ずかしそうにして、はにかむ理子の姿に。

アキラは衝動的に抱きしめたくなくて、でもしなかった。

そうしてしまえば、ぷつりと理性の糸が切れてしまうと思ったからだ。

（お、お前ええええええええええええッ!? 反則だろ理子ッ!? は? なにそれッ!? ——惚れ直しちまうだろうがアアアアアアアアアアッ!!）

「何ヘンな顔してんの? 寝るなら寝ましょ?」

「……………あ、ッ、あ、う」

「——ああ、お休みのキス! ……………んっ、はいお休みっ」
（おでこにチュウとかあああああああああああッ!!）

ヤバイ、これはとてつもなくヤバイとアキラは実感した。

誘惑、これこそが本場の誘惑だ。

理子は彼を、もつと惚れさせようとしているのだ。

アキラは、己の心がぐらりと大きく傾いていくのを感じた。

——セックスしないと出られない部屋・十三日目。

（ここからが地獄だ……）

目覚め直後に、おはようのキスをされた彼は。

今日はキス曜日、という彼女の眩きに戦慄するのであった。

クエスト28 / 所有権

「にへへ……また、キスしちやったわよ？」

(だから一々可愛いつつーのツ!! なんだよもおおおおおおお
おおおおおツ!!)

アキラは今、とても追いつめられていた。

理子が可愛すぎて死ぬ、理性がガリガリと削られていく音がする。
朝からずっと、事ある毎にキスされているのだ。

(なんでこう、幸せそうにキスするんだ……、ベッドに座れば頬にキスするし、立ち上がったなら唇にするし、寝転がったら膝枕しておでこにするしツ!!)

繰り返し言おう、理子は美少女だ。

アキラとしては、ショートカットが勝ち気な性格に似合っていて堪らない。

肌は健康的な艶があつて、手足もすらりとしている。

(……その癖、コイツ薄着なんだよな……タンクトップに短パンとか、いやヤベエって、その癖マジでキスした後に嬉しそうに笑うしさあツ!!)

想いを確かめ合うような、情熱的なキスをしている訳でもないのに。

唇を一瞬、そっと押しつけるだけの軽いキスなのに。

ざわめく、どうしようもなく心がざわめくのだ。

(もう昼だぞ? 何回キスされたんだ? オレ……明日の夜まで保つのか??)

上目遣いで左手の薬指にキスされながら、アキラは苦悩する。

反撃しなければならぬ、彼女の幸せそうな顔が曇るかもしれないが。

手を打たなければ、こっちな流されてしまう。

「……………なあ理子、流石にキスし過ぎじゃないか?」

「んー、そう? わたしは結構スキなんだけど」

「いやスキとか嫌いとかじゃなくてさあ……」

「あ、もしかして……ぐらつと来てるんでしょ。わたしの魅力に
くっ」

ニマニマと笑う姿さえ愛おしい、このまま理性など忘れて襲ってしまいたい。

だが、後悔はしたくないのだ。

(何かッ、何かキス魔になったコイツを止める手立てはないのかッ!!)
(そろそろ変なコト考えて反撃してくる頃よねえ……、ま、今のわたしは無敵だし? 何来ても余裕、だ・け・どっ!)

(好きか嫌いで論じればオレの不利ッ、何故ならばオレもキスされて嬉しいしキスしてえ!! ならどうする、他の理由が必要だ、牽制だけで良い、少しでも止められるなら——)

(このままラストまでキスしてイチャつくのもアリね、凄くアリだわ、むふー……、幸せってこういうコトよねえ……)

アキラに対して優位で居られる上に、人目をはばかりる事なくキス出来る。

とても満足気になっている理子に、彼は血の涙を流しながら告げた。

「——決めた、ルール追加だ、明日の夜までにキス一回につき五百円取るからな」

「……………はっ??」

「オレだって苦渋の決断なんだ、……キスされて嬉しいしキスしてえ、けどな……キスされると幸せ過ぎて何も考えられねえじゃねえか!!」

「開き直ったっ!? ええくく、五百円? 五百円も取るの? 愛しい彼女から? うわあ……愛する妻から搾取するって最低な男じゃない?」

「何とでも言えッ!! 徴収した金は今後の費用にする!! 文句は受け付けないッ!!」

歯を食いしばりながらそっぽを向くアキラを、理子はジトつとした目で見で。

誘惑するという勝負なのだ、キスして当たり前ではないか。

そう口に出そうとしたが、ふと。

(——待って、コレ使えない?)

もしかすると、とても画期的なアイデアかもしれない。

アキラの提案を受け入れる事で、一度油断させる。

その上で。

「……………んー、ちゅっ」

「ほわッ!! おおおおおおッ、おまッ! お前えええええええええッ!? 何で今キスしたッ!! キスすんなって、一回五百円って言うただろうが!!」

右の頬を手でガードしながら、彼はズザザと彼女から距離を取った。

不意打ち過ぎる、本当に理解したのだろうか。

「あー、照れちゃってえ、アキラは可愛いわねえ……」

「後で金取るからなッ! 絶対だからなッ!!」

「問題ないわよ? ええ、幾らでも払ってあげるわ、だから……キスしても良いのよね? そうでしょ? アンタはわたしに合法的にキスの許可を与えた、そうでしょ?」

「~~~~ッ!? んなッ、理子テメエッ、なに考え——ンンンンンンンンッ!? ぷはッ!? 何で舌入れたア!」

突如過激になったキスに、アキラは動揺を隠せない。

そんな彼の隙に付け入るべく、理子は追い打ちをかけた。

「もしかしてディーブなやつは料金上がる? 一回千円にする? 良いわよ、払ってあげるから」

「うおおおおおおおッ、こんな所に居られるかッ、オレは逃げ——
—おわあッ!」

「はーい、つつかまえたっ、動揺すぎよアキラ、だからこんなに簡単に押し倒されちゃうのよ。——ちゅっ、ちゅっ」

「どんだん払う金が——んんッ!」

ベッドに押し倒され、アキラは顔中をキスされた。

その上、何度も深いキスも。

馬乗りになった理子は、嗜虐的な笑みを浮かべてキスを繰り返す。

「んふっ、はあ……………、ねえアキラ、今のでどれぐらいになったかし

ら？ わたしは幾らお金を払えばいいの？」

「とつくにお前のお年玉も小遣いも貯金も空になっつてんだよッ!! お前もしや踏み倒す気かッ!!」

「まさか、ちゃんと払うわよ。でもこれからもずっとするし……全財産を売り払ってもお金は足りそうにないわよね」

「な、なら——」

これでキス攻撃が止む、そう思った一瞬であった。

彼女は実に邪悪な笑みを浮かべ、己のたわわに実った胸を下から両手で持ち上げてみせる。

そして。

「わたしのおっぱいの所有権をアンタにあげる、嬉しいでしょ？ わたしにキスされるだけで、アンタがいつも熱い視線を送るこの巨乳を好き勝手にできるのよ」

「ッ!」

「そうねえ……キス五回分にしましょ。そしたら次は……お尻にするわ、その後は腰、足、髪の毛、ええ、これからはキス五回毎にわたしをあげちゃう」

「ちよつとそれ反則過ぎないいいいいいいッ!」

アキラは思わず動きを止めてしまった、だってそうだ。

一方的にキスされるだけで、何もかもが手に入ってしまう。

こんな事があっても良いのか、否、彼女が許したのだ。

(どどどどどどッ、どーすりゃ良いんだッ!? 考えがまとまらねえッ)

「んちゅ、……はい残り四回」

(うおおおおおッ、動けッ、動けオレッ、今すぐ理子を上から退かすんだッ!!)

「——はあ、残り三回……」

ただキスされているだけだ、丁寧に唇を押しつけるだけの。愛情の籠もったキスをされているだけだ、それだけなのに。

(くらくらする……、ダメだ、この感覚はダメだ……)

(惚れた弱みって言うものね、ええ、徹底的に分からせてあげる、わたしがアンタを愛してるってコトを、キスだけで——)

唇に、頬に、指先に、首筋に、キスは続く。

(嗚呼、ダメだ、抜け出せない、オレは……理子から逃げられない……) ぐにやりと視界が歪む錯覚までしてしまう、彼女に身を任せるだけで。

その彼女の尊厳の全てが、手に入ってしまう。

なんとという倒錯感、恋人の扱いじゃない、支配する者と支配される者のそれ。

(また……またキスされた……ッ)

とうとう、彼女の巨乳が手に入ってしまった。

己の物になったと言うことは、何の遠慮もナシに揉みしだいたり吸ったりしても良いという訳で。

例え彼女が嫌がつても、正当性はアキラにあるのだ。

(——本当に、そうなのか?)

キスの雨は続く、また一つ、また一つとアキラは理子を手に入れていく。

彼女の望むがままに、彼女を支配していく。

(それって、つまり……)

アキラが、理子に支配されていくという事だ。

彼女の愛に、アキラが溺れていくという事だ。

それは正しく、アキラが理子をそうする為はこの部屋に閉じこめたと同じで。

「……………あはっ、わたしったらダメねえ、アンタに全てをあげちゃったわ。どうする? もうアンタの許可がないとキス出来ないんだけど」

「——勝てない」

「ふっふん、もう一度言っつて?」

「オレの負けだ理子、……オレはお前に勝てない」

そうだ、アキラは本当の意味でもう二度と理子には勝てない。

この先に喧嘩する機会があつて、彼が勝つことだつてあるだろう。

だが、彼が彼女を愛している限り、彼女に愛されている限り。

「お前がオレを愛してくれる限り、オレがお前を愛する限り、オレとい

う存在はお前の愛に支配されてしまおうんだ——」

「……………ならさ、どうするの?」

幸せな敗北感がアキラを襲う、のろのろと体を起こすと理子は彼の上から退き。

彼がベッドの上から降りると、膝について彼女の手を取って懇願した。

「結婚してください、オレにお前を幸せにさせてくれ、オレの子供を産んで欲しい、——絶対に幸せにするって誓う……………ッ!!」

それは生涯における絶対服従の言葉だった、理子にとって何よりも甘美な望んでいた言葉。

(アキラ……………)

思わず目頭が熱くなる、幸せすぎて涙が出そうになる。

愛は確かに、そう、理子の愛は確かに今、アキラに伝わったのだ。

思い溢れ言葉に詰まる彼女の返答を、彼はそつと待て。

「……………バカ、ね。アキラはホント、バカなんだから……………」

「ああ、オレはバカだ、そんなオレでも——」

「違うわよ、そんなオレでも、じゃないの。そんなアンタだからよ。——

——幸せにさせてくれ、じゃなくて……………一緒に幸せになろう、でしょ?」

「ッ!? あ、ああッ!! 幸せになろう! 理子と一緒に幸せになりた

いんだッ!!」

「はいっ、喜んで。……………アンタのお嫁さんになるわっ」

言葉にした瞬間、理子の笑顔から涙がこぼれて。

同じく、アキラの目からも大粒の涙があふれ出す。

二人は抱き合いながら、わんわんと泣いた。

——そして、どのくらいの時間が経っただろうか。

とても長い時間そうしていた気もするし、ほんの十分ほどという気もする。

だが、今の二人に時間の概念はない。

「……………なあ、スイッチ押すか?」

「ええ、押しましょ」

「ならオレが……………」

「ううん、わたしが言い出したんだもの、押させてよ」

「……………わかった」

アキラが見守る中、理子はスイッチをポケットから取り出すと、その蓋を開けて、ボタンに人差し指を添える。

「……………」

彼は、静かにその時を待って。

「……………」

彼女が、ボタンを押す瞬間を待ち望んで。

「……………」

しかし、何も起きない。

それもその筈だ、道理でもある、だって。

「いや何で押さねえんだよ理子ッ!?!」

「しょうがないでしょっ!! 何かすつごく緊張するのよっ!! 押すからっ、ちゃんと押すからもうちょっと待ちなさいったらっ!!」

理子はガチガチに固まりながら、必死にボタンを押そうとしていたのであった。

クエスト29 / 催淫ガス！ スイッチ・オン！！

「押す……押すから……、うん、はあ、はあ、押すわよっ！！」
「押すならとつとと押せ??」

「それが出来たら苦労してないのよっ！ 仕方ないじゃん!! なんか緊張するのよコレ!!」

後一步の所で、状況は停滞していた。

スイッチを押しさえすれば、後は野となれ山となれ。

確定孕ませックスして、堂々と出て行くだけなのだが。

「どうどう、怒るなつて。……なあ、何でそんなに緊張してんだよ」
「何つて、そりや……」

アキラに問われ、理子は黙り込んだ。

むむむと唸り、数秒考えたあと。

「……………まず、なんかハズい」

「恥ずかしいと」

「だつてさ、これを使うと獣みたいなセックスするつてコトでしょ？
理性と失うつて訳で、もう何を言っちゃうか何するか分かんないワケでしょ?」

「それだけか?」

「まだあるわ、——正直、普通のセックスとか、ナマでするとかより、
確定なだけあつて精神的ハードル高くない?? いやね? わたし
だつて前言撤回する気なんてないのよ? でもね? ………………勇氣、
出ない??」

なるほど、とアキラは重々しく頷いた。

確かに奇妙な気恥ずかしさはあるし、勇氣だつている。

だが同時にこう思うのだ、彼女が押せないというなら。

「分かった、オレが押そう」

「……………いいの?」

「夫婦になるんだからさ、助け合わないとな」

そう言つて、彼はスイッチを受け取る。

ボタンに指をかけ、後は押すだけだ。

「——行くぞッ!!」

「……………」

「さあ行くぞッ!!」

「……………」

「こんどこそッ、行くぞおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおッ!!」

「アンタだって押せないじゃないのよっ!? 何がオレが押すよっ、
とつとと押しなさいよ!!」

ウキーと理子が眉を釣り上げる中、アキラは愕然としていた。

自分なら押せる筈だと思つてた、覚悟も勇気もある、気恥ずかしさ
だつて耐えられる、なのに。

(オレが……押せないだどッ!?)

指が不思議な力で固められたみたいに、びくりとも動かない。

「——ッ、ま、まさか天使のオッサンは止めてるのかッ?!」

「そ、それはあるかもしれないわねっ!! 天使のオッサンが止めてる
のかもっ!」

『ぴんぽんぽんぽーん、天使のオッサンからお知らせするでー。当
方、何もしてまへん、お二人揃つてヘタレなだけですな、あ、ビール
が進むんで暫くそのままでもエエで?』

「ド畜生おおおおおおおおおッ!! はつきり言うんじや
ねえよッ!! そんなこつたらうとは思つてたけどッ!!」

「ヘタレ……わ、わたしが——ヘタレっ!? そ、そんなバカなっ!?」

突きつけられた真実に、ずずーんと項垂れる二人。

情けなくて恥ずかしくて、小一時間転げ回りたいぐらいだ。

だが隣には愛する者がいる、その一線のみで耐えて。

「くッ、オレ達は重大な問題にぶち当たつている……これが神々の試
練だとも言うのかッ!! なんて残酷なんだッ!!」

「わたし達は……獣ックスすら出来ないなんて……運命つて何て、鳴
呼、なんて非情なのっ!!」

『神はんは試練なんて与えておまへんし、運命も非情どころか温情で、

後押ししてるぐらいでっしやる??』

天使のオッサンのアナウンスを、二人は耳を塞いで聞かぬフリ。見たくない、信じたくない事だつてある。

自分達が、こんなにも——意気地なしだなんて。

「すまん、すまない理子……オレ達はどうかやら此処までみてえだ……」
「アンタの所為じゃないわ、きつと……わたし達はここで二人で餓死するまでイチャイチャする運命だったのよ……」

『おーいお二人さん?? テンション変になってまへん?? とうるか天使のオッサンは把握とるんよ? ——アキラはんも理子ははんも、実はオッサンと別れたくないんやろ??』

「ない、ないな」

「ないわね」

『ちよつとは肯定してーなっ?!? オッサン傷つくでっ?!?』

ノータイムシンキングで否定した二人は、思わず冷静になって。

オッサンと別れるのに一抹の寂しさはある、だがそんな事で躊躇ってる訳ではない。

「わかった……正直に話そうぜ」

「ええ、正直によ、分かってるわね」

実の所、もう一つあるのだ。

躊躇う理由が、とてもバカバカしい理由だ。

だが、自分でもどうしようも無い理由であつて。

「——お前とケダモノの様にナマで出し放題、男の欲望全部叶えますみたいなセックスが楽しみでツ、楽しみ過ぎてツ、興奮しすぎて、なんか始めるのが惜しいんだツ!!」

「分かるっ、分かるわアキラっ!! グチャグチャドロドロで、我を忘れるまで超絶気持ちいいセックスするの実は楽しみで、でも人生で一度つきりよっ……押ししてしまったが最後、二度と出来ないと思うと!!」

「おおっ!! 流石はオレの理子!! 分かるっ、分かるぞその気持ち!!」

「アキラっ!!」 「理子ッ!!」

二人はガバッと抱き合つて、例えるならば初めての遊園地に浮かれ

て寝付けない幼子の様に。

快樂へ膨れ上がりすぎた期待と、生涯で一度しかないという事実が。

彼らの、スイッチを押すその手を止めていたのだ。

——その様子を楽しんでいた天使のオッサンは苦笑をひとつ。

『まったく……ホンマ手が掛かるお二人やで、ま、そんな所もオッサンとしては尊みエネルギーに変換されて嬉しいやけどなっ!! ところで提案なんやけど、聞く気あるかいな??』

「提案? 代わりに押ししてくれんのか?」

「あ、良いわねそれ、やってよ天使のオッサンっ!」

とうとう他人に放り投げた二人に、天使のオッサンはニマッと笑った。

『くっ、お二人の心遣いが染みるでえ……ビールが美味しい!! あゝ、光栄やでえ……新たな夫婦の、子供の誕生の後押しする事が出来るなんてっ!! でもな……その提案、却下して欲しいんやろ? 分かってんねんでオッサン、そこまで折り込み済みで提案したんちゃうん、自分達の手で押す事ができるように、選択肢を潰すためにオッサンに提案したんやろ? 嗚呼……人の子よ、自分達で歩むための努力、天使は嬉しいです、己が子の為に、お二人自身の手でスイッチを押すのです……受胎告知は任せてください……』

「お、オッサン—— ツ!? 妙に解像度高い解説したと思ったら、なんか普通の天使っぽい事を言い出したぞッ!」

「なんて理解度が高いの……っ、流星はわたし達をデバガメしてた天使っ、声だけでも分かるわ、今の天使のオッサンは……」

本物の天使っぽくなってる!!」

尊みエネルギー充填率1000パーセント、天使としての格が上が

りつつあるオッサンの様子に二人はゴクリと唾を飲む。

「へッ、オレ達でアンタをそんなに満たされてるなんてな……期待には答えなきやいけねえよなあッ!!」

「そうよっ!! 天使のオッサンへの最初で最後の恩返しよ——必ずっ、孕ませックスを試してみせるわっ!!」

一見、天使のオッサンに感化されて燃え上がっている様に見えるが。

実の所、九割ぐらいは性欲が溜まって変なテンションになってるだけである。

セックスを覚えてたての若い二人が、セックスしても良い状況で誘惑という生殺し状態であったのだ。

(おほー、お二人の脳味噌が良い感じに茹だってるでえ!!)

天使のオッサンはそれを見て、いつそうハッスル。

ぐびぐびとビールを飲み干し、枝豆をぱくり。

実に酒盛りが進む、なんという美味か。

「——行くぞ理子、いっせのーせで一緒に押すぞ」

「勿論よ、一人じゃダメでもわたし達二人なら——」

「いっせのーせ!!」

「……」

しかし、ボタンは動かず。

二人は静かにお互いを見る、まだだ、そうまだなのだ。

自分達にとって、まだ話すべき事がある。

「ダメじゃねーかッ!! ああもうッ、今度こそオレが押すからなあ!!」

理子ッ、テメエはストリップしてエロいポーズしながら、赤ちゃん

孕ませてください旦那様ってしろッ!! オレの支配欲と劣情を煽れ

!! 必ず押すから!!」

「はあ~~~~っ?? アンタこそねえっ、どうか赤ちゃんを孕ませる為にナマ中出しさせてくださいって、全裸になってチンコおっ勃てながら腰を惨めにカクカク振って懇願しなさいよっ!! わたしの優越感を煽りなさい!!」

「はッ!? やるかテメエ!!」

「その喧嘩、買ったわよアキラッ!!」

衝動のままに二人は同時に立ち上がり、バツと離れるとファイティングポーズ。

喧嘩だ、喧嘩が始まる。

天使のオッサンが、ガス使わなくても良い感じにセックス出来るん

じゃね? と思った一瞬であった。

「これでもっ、くらええええええええええつ!!」

「そんなもんだたるかよチョーツプツ!!」

理子はアキラの顔面めがけてスイッチを投げる、アキラはそれを思いつき叩き落とす。

すると、どうなるだろうか。

勢いよく床にぶつかったスイッチは、ガツンと音を立てて押され。

「あ」

その刹那、ぷしゅーとピンク色のガスが部屋に充満し始める。

「あああああああああああッ!? 何してんだよ teme!! スイッチ入ったじゃねーかッ!」

「それはコッチのセリフよっ! どーすんよ、もうセックスするしかないじゃんっ!!」

「……」

「くそッ、理性がある内に服を脱ぐぞ!!」

「もおおおおおおつ、こうなるんだったら色気のある下着にすればよかったっ!!」

「いや、そのスポブラもエロいと思う。始まったら破いて荒っぽいプレイしても良いか??」

「……まあ、アンタのトランクスを破いていいなら」

合意はなされた、二人はキリっとした顔で固い握手を交わす。

そして、一発秘中・超強力、気持ち良いケダモノセックス保証催淫ガスに、理性を蝕まれていき。

——セックスしないと出られない部屋・十四日目。

「……………ふッ、見えないけどきつと太陽が黄色いぜ」

「あー……………叫びすぎて喉痛いし腰くっそダルいわ……………」

朝遅くまでぶっ続けでセックスしていた二人は、夕方前によく起き出したのだった。

クエスト30 / 扉の外にある未来（終）

外に出るなら身なりを整えないといけない、それに空腹で倒れそう
だ。

二人は一緒にゆっくりと風呂に入り、イチヤコラしながら最後の食
事をして。

その一時間後、扉の前に立っていた。

「なんか……こうなってみると名残惜しいな」

「そうねえ、何だかんだで二週間も居ちやったしね」

「オレもパパかあ……あー、どう説明すっかなあ……学校もどうする
よマジで」

「ま、なるようになるでしょ。一緒にさ、親に頭下げましょ」

アキラの右手と理子の左手は、しっかりと結ばれて。

いざ家に帰らんと、彼がドアノブに手をかけたその時だった。

その手は、何故かピタッと止まって。

「どうしたのよ、帰りましょ?」

「ちよつと待った……帰る前にやって欲しい事があった」

「ええ……今更何よ?」

「その服と一緒にプロポーズリング入ってるだろ? ——オレとして
は、付けてくれないかなあと?」

理子の右手の紙袋には、日替わりクエストの報酬でプレゼントされ
た服と。

指輪の入った赤い小箱が、確かに入っていた。

彼女はニマニマと彼を見ながら、それを取り出して。

「ふーん、ロマンチックな所があるじゃない」

「なんだよ、悪いかよ……」

「拗ねないの、付けてあげるけど……折角だしアンタが付けなさいよ」
「何ッ!? 良いのか!!」

途端、満面の笑みを浮かべるアキラは。

いそいそと指輪を箱から取り出し、片膝をつく。

もう一度やり直すのだ、しっかりとしたプロポーズをすると意気込んで。

「くぅ〜くぅ〜、まだ見せてくれますのっ!! オッサンは……オッサンは感激やでえ!! これぞ二人の新たな門出!! な? な? 写真撮ったるか? いや撮るで! ムービーのほうがエエ? あ、ライン交換しよか、撮ったの送るさかい」

「何でテメエが居るんだよっ!? 空気読めってんだッ!!」

「ああ、そういえば挨拶まだだったわね。じゃあライン交換……って、スマホは家じゃなかったかしら?」

「ほな、出てから交換しましよ、着いていきますさかいに」

「来んなよっ!? つかこの部屋の外に出て良いのかよテメエッ!」

思わず叫んだアキラに、天使のオッサンはもつともらしく頷くと。「むしろ、この部屋に居る時間の方が短いんやで? そもそもオッサンは普段、パトロールしながらお二人のような関係のカップル捜してる訳やし」

「そんな事してたのかよオッサン……」

思わぬ情報にアキラは、納得半分の呆れ顔。

天使の癖に、そんな地道な事をしていたのかと理子は苦笑して。

そんな二人、天使のオッサンは微笑んだ。

「プロポーズやり直すのもエエんやけど、子供の名前はどうしますんで?」

「あッ」「そういえば……」

顔を見合わせる二人、確かに何も考えていなかった。

すっかり頭から抜け落ちていた、考える時間は幾らでもあったというのに。

「——女の子だったらアリコ!! 男だったらリコラ!!」

「頭沸いてんじゃないわよバカアキラっ!! なんでそんな安直な名前なのよっ!!」

「いやだって、お前の名前とオレの名前、合体させたくないか?」

「理解するけど限度ってモンがあるんでしようがっ!!」

早速と言わんばかりに喧嘩を始める二人に、天使のオッサンは尊み

を感じながら仲裁した。

折角の門出、ケンカツプルの光景も悪くはないが満面の笑みで部屋から旅だつて欲しい。

「ま、ま、そないに喧嘩せんと、な？　こんな事もあるうかと命名辞典を渡しに来たんや!!　アフターフォローは任せてえな!!」

「そもそも、オツサンがこの部屋に拉致監禁しなかったら……いや、でもそれだと……」

「はいはい、好意は素直に受け取りなさいよアキラ。——ありがとう、天使のオツサンっ」

「理子はんは素直なエエ子やなあ……アキラはんもオツサンにデレてエエのんで??」

んー、と顔を覗きこむ天使に、彼はうぐつと悔しそうにしながら。
「……………ありがとう天使のオツサン、これでもスゲー感謝してる、オツサンが居なけりや理子と一緒に居る未来は掴めなかった」

「聞きました理子はんっ!?　アキラはんがデレた!!　とうとうデレたでえ!!」

「うっさいそんな喜ぶんじゃねえツ!!　恥ずかしくなってくるだろうがツ!!」

「おほーっ!!　これだから天使のお仕事は楽しいんや!!　人口も増えて少子化解消で一石二鳥!!」

「なんか悔しいけど、…………ふふっ、今なら許せちゃうわ」
二人と天使は、別れを惜しむように。

否、別れを惜しんでるのだ。

濃密だった二週間、色んな事があつた、恋人になり、結婚の約束に、そして理子のお腹に宿った新たな生命。

「ああ、バイバイしとうあらへんなあ……」
「……………なら、今後も会いに来いよ。歓迎するからさ」

「そうよ、天使のオツサンなら歓迎するわ」
「気持ち嬉しいけど、天使にもルールがあるさかいに。地上では姿が見せられへんのや……ま、偶にラインで会話するぐらいは許されてるんやけどな」

帰ったら、天使のオツサンの姿が見えなくなる。

その言葉に二人はしゅんとなった、何ともなしに今後もうやつて騒げるものだと思っていたのだ。

「……………考えてみりゃ、天使には天使のルールがあるよなあ」

「残念だわ、いっぱい相談しようと思ってたのに……………一緒にゲームもしようって思ってたのに」

「ありがとうアキラはん、理子はん、ま、姿は見えんでもオツサンはいつもお二人を見守ってるさかいに、ちゃんとおアプターフオローもするさかいに勘弁したってや……………」

「オツサン……………」

「天使のオツサン——っ」

感極まった二人は、天使のオツサンを両隣からヒシつと抱きしめる。

これで最後、そう最後なのだ。

「ありがとな天使のオツサン、オレ、忘れないから、産まれてくる子にも伝えるからッ」

「わたし達の愛の天使として、子孫代々伝えるわ……………」

「ううううっ、ありがとなっ、ありがとさんなお二人さんっ!!」

天使の目にも涙が浮かぶ、ああ、とオツサンは心の中で寂しげな声をあげた。

これ以上、二人の声を聞いていると彼のように閉じこめてしまいうになる。

永遠に、二人を眺めていたくなる。

（——でも、オツサンは天使やから。今回はいつもより、ちよつとだけ、ちよつとだけ思い入れが強いだけやから）

そお遠くない内に、天使は新たなカップル候補を見つけてこの部屋に誘うだろう。

少しだけ寂しきを感じながら、人間を見守り、守護していくのだ。

これまでと同じく、これまでより少しだけ愛を強めて。

「……………そろそろ、お別れしましよか」

「天使のオツサン……………」

「もうちよつとだけ、喋らない？ 時間はあるんでしょ？」

「ダメやでお二人さん、これ以上は未練が残るだけや。——笑ってバイバイする為にも、ここでな、さよならなんや……」

笑顔でそう告げる天使に、二人もコクリと頷いて。

「……最後にさ、何かリクエストはあるかオッサン」

「何でも言いなさいよ、わたし達に出来るコトなら叶えるから」

「そうやねえ……うん、やっぱ最後はお二人がキスして笑って部屋から出て行って欲しいわ。オッサンにな、幸せな姿を見せてえな」
「……………わかった」「うん、わかったわ」

これが正真正銘、最後の時だ。

アキラは理子と向き合おうと、彼女の左手を取る。

「オレと結婚してくれ理子、お前と、これから産まれてくる子を愛し、幸せにしたい、……一緒に幸せになつてくれッ!!」

「はい、喜んでっ！ お腹の子と一緒に、いっぱい幸せになつて、いっぱい愛して、愛し合つて、アンタと一緒に幸せになるんだからっ!!」
そして、理子の左手の薬指に指輪がはまる。

二人は笑いあうと、どちらからともなく自然に唇を重ねて。

一秒、二秒、三秒、四秒、五秒、ゆっくりと顔を離す。

「……………また、何処かで会おうぜ天使のオッサン！」

「絶対に連絡してよねっ、待ってるから！」

「うん、うん、——ほな、さいならっ!!」

「ほな、さいなら!!」

そうして二人は、仲良く腕を組んで部屋から出た。

扉の外はアキラの自室に繋がっており、完全に体が出た瞬間、扉は跡形もなく消える。

まるで最初から存在しなかったかの様に、扉は消えた。

「……………帰ってきたんだな」

「夢、じゃないわよね……？」

彼のベッドの枕元にある目覚まし時計を見れば、時刻は朝七時。

その隣にあるスマホで日付を確認すれば、本当に一晩しか時間が経過していない事が分かった。

